れたときに、菊池君が希望を述べられたのである。此費用を削減せられた以上は先日本院から建議になつた大學の增設、並に高等學校の增設に關する所の計畫の豫算と云ふものを、追加豫算として此議會中に提出にならんことを希望すると云ふことを述べられたのである。其時に船越君が何と言はれたか、船越君が然らば高等師範學校のことも其中に加へる積であるかどうであるかと尋ねましたれば、是は憲法の許さぬ所である、出來れば結構であると言はれた。出來れば結構だが憲法が許さぬ。それ故に今議會に於ては高等學校に關する建議は出來ぬ、希望を述べることは出來ぬと云ふ斯う云ふ話なのである。それに依つて既に明なのである。曩に本院より大學並に高等學校に關する建議を爲されたときに、若し其時に此高等師範學校の改築費と云ふものが豫算にないと云ふことを發見せられたならば、其時には矢張高等師範學校の改築のこと增設のことも矢張其建議の中に加へられたものであらうと本員は疑はぬのである。それ故に決して此事柄自らを惡いと云ふのではなくつて詰り文部の豫算が抑さ偏輕偏重なるものであつて、相應に片方を削減し片方を虐待して片方を非常に增大せしめたと云ふ所に關して此削減と云ふものは原因して居るものであると我輩は認めて居るものである。果して然るものであるかどうであるか、當局大臣の意見はどうであるか、質問せんとする所のものである。若し果して然らば適當なる度まで此費目と云ふものを下げて、さうして此費目の復活と云ふことを計るべきものであらうと本員は思ふのである。而して豫算會のときに豫算委員の或る人は此復活を圖ると豫算不成立になるかも知れぬと云ふことを憂へられたのである。然るに谷君が注意になつて豫算協議會があつたゝめに是まで不成立になつたことはないと云ふことを言はれたのである。本員も決して此復活を計る所の協議會を開いたからと云つて、決して豫算不成立と云ふことのある恐はないと思ふのである。今日の此政府、及今日の此政府と提携して居る所の政黨、彼等は決して此豫算の不成立と云ふことを願ふことはない、儀なる文部の復活のために二十萬か三十萬のために、此の大豫算之を殺して之を不成立にする抔と云ふ愚を學ぶ者でないと云ふことは本員は信ずる。決して此文部の復活を計つた所で、文部の豫算の復活を計つても、今日の豫算は決して不成立になる氣遣はない。未だ是からして如何なる大法案が通過せなければならぬか、如何なる大計畫が提出せられて居るか、選擧法の如き是も通過せなければならぬのである。若し機會があれば鐵道買收法案も通過せなければならぬ、提出せらるゝであらう。

斯う云ふえらいものが跡から〳〵通過せなければならぬのである、之を前に控へて居て、此些細なる三十萬圓か二十幾萬圓かと云ふ爲に此大豫算を之を不成立にすると云ふ事は決してない。決してそんな恐と云ふものはないものである。それ故に此復活と云ふものは其邊の所は少も恐れずやらなければならぬものであると思ふ。然れども當局大臣は此二十萬か三十萬のことを貴族院で以て之を復活せんとすれば其ために此豫算が不成立になると云ふことを御答になるか、どうか、是れ亦我輩が當局大臣に質問せんとする所である。今日最も慎くべきことがある。是は何であるか。我國民が教育に冷淡であることである。教育を非常に蔑視すると云ふことである、教育費に二十萬圓か三十萬圓を吝み教育上國家の又國家生存上に最も必要なる事業即ち國語の調査と云ふやうなものに一萬圓と云ふやうなものを吝むのである。而して其國民は果して金のない所の人民であるか、果して貧困なる所の人民であつて決して國語の調査に一萬圓出すことが出來ぬ、普通教育擴張のために二十萬圓や三十萬圓を出すことが出來ぬと云ふことであるか。決してさうではない。若し直に利益の見えることであれば百萬圓でも二百萬圓でも千萬圓でも二億でも之を通過しやうと云ふ勢ではないか。臺灣の銀行に對してはどうであるか、百萬圓の株を請合のではないか、而して其五朱の利子は五年間之を呉れてやるのである。五五二十五萬圓である。又噸稅案に於てはどうである。四十幾萬圓と云ふものが取れ樣と云ふ所を二十幾萬圓と云ふ者を直ぐに棄てるのである。而して又臺灣の事業費と云ふ事に付いては非常なる公債を募ると云ふ事である。固より臺灣の水道であるとか、土地の調査とか云ふ者は必要なのである。然れども其莫大なる金を費す事の出來る人民であるならば教育の爲にもうちッと費して呉れても宜くはないか。教育の爲には餘り冷淡ではないか。斯う云ふ考がどうしても起るのである。若し彼の鐵道買收法と云ふ者が通過すれば之を或る政黨員の調査の如くに二億の公債を要するとすれば、高等師範學校增設の爲に二十萬圓やそこらは出して呉れても宜くはないか。然れども其方は否決する。是は贊成は出來ぬと斯う云つて、教育のことであれば一萬圓でも之を吝んで容易に贊成して呉れぬのである。實に教育に不熱心なる人民と云はなければならぬ。教育の必要なること教育の實に國家に大切なる事は既に先日本院に於ては學政振張の建議に於て認められたのである。當局大臣に於ても其事は十分認められたのである、成る程教育と云ふ者は必要である。今日我々が競爭せなければならぬ所の人民と云ふ者は決して

是は朝鮮人ではないのである、我々が競爭せなければならぬ人民は支那人ではないのである。我々が競爭せなければならぬ人民は印度人ではないのである、然るに朝鮮人が我國に留學に來た、印度人が留學に來た、支那人が我邦に留學に來た、是で大得意になつて居つて宜しいか、どうであるか。我々の競爭せなければならぬ人民は支那人や朝鮮人や土耳其人や印度人ではないのである。我々は既に歐米人の仲間入をしたのである。歐米諸國と競爭して行かなければならぬのである。我々の競爭の相手と云ふ者は最も敎育に熱心なる者である。國家的の敎育を興すのみならず、地方に地方費を以て公立的に敎育を行ふのみならず、又一私人富有者紳士紳商は競ふて敎育の爲に義捐をすると云ふ人民である。最近の雜誌を見ますると云ふと、英吉利の或る貴族の如きと云ふ者は傳染病、バクテリヤ、研究のために二百五十萬圓を義捐せられたと云ふことなのである。英國の如きは敎育に隨分熱心なる國であるが、まだそれでもまだろこしく思ふやうに研究が出來ぬと云ふて、或る華族が二百五十萬圓と云ふものを、バクテリヤ學研究のために投ぜられたのである。又進んではアルハベット、ノーベルと云ふ人が學問研究のために一千四百萬圓と云ふ者を寄附せられたのである。其外亞米利加に於ては殆ど新聞雜誌を得る度毎に幾許か學校のために寄附金をすると云ふやうなことが始終あるのである。さう云ふものが我々の相手なのである。さう云ふ者と我々は鐵砲を以て戰ふと云ふのではない。軍艦を以て戰ふのでもない。時々刻々彼等の物のために我々は苦しめられて居るのである。少しも安樂に暮すことの出來ないやうな世の中になつたのは今日之が不幸であるか、幸であるか。若し我々も彼等と共に競爭をして行くことが出來るならば我々は幸福なのである。若し之を爲すことが出來ぬならば維新前の昔の有樣で居た方が餘程宜いのである。若し敎育と云ふものを我國民がもッと之を尊重して、噸稅に於けるが如き精神を以て、銀行に對する如き精神を以て、鐵道買收に對する如き精神を以て、敎育と云ふものを大に養成せらるゝことを希望するのである。果して文部當局者はさう云ふ御考であるか如何であるか。それとも矢張今日の如くに永く敎育と云ふものを虐待せらるゝ御積であるかどうであるかと云ふことを我輩は文部當局者に御尋ねしやうと云ふ一ッの箇條である。而して我政府の如きも敎育事業と云ふものは非常に大切に認めらるゝのである。我陸軍の如きは敎育の大切なることを認めらるゝために、地方幼年學校と云ふものを起して之に四十萬圓も五十萬圓も投じて敎育をせらるゝのである。我海軍も我陸軍も敎

育の大切なることを認められて帝國大學に委託生と云ふものゝ養成を託せられて居るのである。然るにさう云ふ風に教育の必要を認められて居ながら、教育のために金を出すと云ふことになると云ふと、一錢一厘でも之を吝むと云ふやうな感情が我國民の中に在ると云ふのは實に遺憾なことではないか、之を遺憾なことゝ思はれるか、思はれぬかと云ふことを當局大臣に伺はんとする所である。近頃道路の風說に據れば、本院からして建議になつた所の償金を教育費に充てると云ふことの如きも、大に內閣に於て其歩を進めて居ると云ふことを我輩は傳聞したのである。果して事實であるか如何と云ふことは知らぬが、凡そ一千萬圓位のものを教育費に向けらるゝと云ふことの計畫が餘程歩を進めて居ると云ふことを傳聞したのである。我輩はそれを一睡の夢でなくして事實であると云ふことを疑はぬのである。殊に當局大臣は有力なる大臣であるに由つて、此ことは此大臣に由つて必ず實行せらるゝと云ふことを我輩は決して疑はぬのである。一千萬圓と云ふものを出せば實に教育のために幸福であるが、なれども此一千萬圓と云ふものは一遍頂く所の一千萬圓であつたならば年々歲々一千萬圓宛の利子を受くることになるのである。本員は唯一遍でも宜いからして此一千萬圓と云ふものを文部大臣の力に依つて速に教育費に得んことを望むのである。此ことに付いても文部當局者の御意見を我輩は伺はうとするのである。

高等學校及大學校增設に關する建議案

（明治三十三年一月三十一日）

發議者に質問があります、發議者に質問をしたいのは、發議者は此建議と同樣なものを昨年も本院から全會一致で出したと云ふことを再三繰返して御述になりましたが、昨年此建議をして置いて、而して此建議を或は破るやうな、妨げるやうな、政府當局者をして躊躇せしめて此增設案を出すことを憚らしめたと云ふやうな學動をやつた者はありはせぬか。それは何であるかと云ふと、教育改革調査會を設けるとか或は學制の改革をせなければならぬと云ふやうなことを言つて、頻に大言壯語して騷ぎ立てる者が此社會に在るのである、それ等が教育と云ふものは根本的に變へなければならぬ、教育制度を根本的に變へなければならぬ、大學と云ふものも今日の儘ではいかぬ、高等學校も今日の如きは一種變態のものである、一種の詭道である、斯の如きは天下萬國に見ぬ所のものである、先づ第一に調査をやらうと云ふには調査會を設けるのが必要であると、頻に騷ぎ立つた者があるのである。それ等は自ら出して置いた所の建議を却つて妨げ、政府當局者をして躊躇せしむると云ふ事情がありはせぬか。其の邊に付いて當局者は何と返答されるであらうか知らぬが、私は發議者の意見を聞き、發議者に於てさうは思はぬかどうか、又本年此決議を昨年と同樣にして、又此決議が通つた後とで色々騷ぎ立て〻先づ第一に調査と云ふことをやらなければならぬと云ふやうなことをすれば、又來年も政府は躊躇して增設案を出さぬかも知れぬのである。そう云ふことに此の貴族院の議員が弄ばれてはならぬのである。それで愈〻此決議を通して貰ひたいと云ふならば自ら之を破るやうなことをしてはいかぬと思ふのであるから、其邊を一應發議者の御考は如何であるか、我輩は承はりたいのである。

文部當局者に私は質問を致します。昨年の如き長い質問は致しませぬどうか大臣閣下でも、次官閣下でも、要領を得るやうな御答を願ひたいのである。此建議案にあります所の增設の如くでございましては、大學を增設すると云ふことに付いては我輩は素より雙手を擧げて贊成をするのであります。殊に今發議者の言れる通り、其增設する所の大學たる、今日在る所の大學の如きものを增設すると云ことであるに依つて、それ故に我輩は雙手を擧げて贊成をするのである。併ながら高等學校の增設に至りましては我輩は大に疑がある、高等學校のこと〻云ふものは、今日は

最早之を各府縣の事業に致してはどうであるか、之を官設とすることを止めて縣立若くは私立の事業と、それを文部省に於て奬勵をして縣立の高等學校を起さしめ奬勵して市立の高等學校を起さしむると云ふ方が宜くはあるまいか。其邊に附いて文部省當局者は如何なる考を持つて居られるかを御伺したいである。此建議案に依りまするとと矢張高等學校は文部省に於て官設すべきものである、官設して貰ひたいと云ふことを主張して居るのであります、けれども本員の如きは文部省に之を官設することを廢して寧ろ縣立の高等學校を起すやうに奬勵をして誘導して早く起させてはどうであるか。唯今發議者も言れた通り長野縣でも莫大の寄附金を爲し且つ經常費まで出すと云ふやうなことである。新潟縣でも莫大の金を出すと云ふことになつて居る。愛知縣でも其通りである。靜岡縣でも其通りである。各府縣の大縣であつて而して中學生徒の數多ある所に於ては追々に高等學校を望んで來るのであります。斯の如き巨萬の金を建議しても出さうと云ふやうな時機になりましたのでありますに依つて、此中學の事業の高等なるもの……高等學校の教育は詰り是れは各府縣の事業として文部當局者に於ては唯之れを奬勵すると云ふやうな方針でやる考はないかと云ふことを聞きたい。而して本員抑の考でありますと或は文部當局者に於て官設にすべき場合もないではないかと考へる。それは却つて生徒の少い所、貧縣である青森とか秋田とか津輕會津邊、それ等の邊に至つては即ち高等學校を官設する必要があると思ふ。數縣に亘つて斯の如き場合に於ては適當なる位置を選んで高等學校、高等中學を設立してやる必要はあらう。然れども新潟であるとか愛知であるとか靜岡であるとか長野であるとか、斯の如き大縣であり斯の如き富裕である所の縣は教育に頗る熱心であるやうな縣に應じて官設の高等學校を起してやる必要は決してないのである。

議論ではありませぬ、質問であります。それでさう云ふ方針を文部當局者は採られる考であるかどうかと云ふことを我輩は質問するのであります。それからして又高等學校の增設を主張せらるゝ所の發議者の言れた通り成程山口縣の高等學校を擴張することもあり、それから鹿兒島の造士館も再興の建議も出て居る、文部當局者に於ても早晩之を再興せらるゝであらうと云ふことを認めて居る。然れども唯斯の如き縣にのみ斯の如き藩閥の縣にのみ、高等學校を奬勵し高等學校を起すことをやつて、今日の如き他の縣の新潟であるとか長野であるとか東海道の邊に高等學校を起すことを怠つて居ると云ふことは、益〻今日行れる所の藩閥の

勢を逞うせしむるのであります。それよりは、今日の如く互に競爭して、唯斯の如き大縣であり富裕である所の縣が政府の設立を待つて競爭して居るのである、實に不見識極まることである、不見識極まることでありますけれども、政府の方針たる今日までの方針は官設の方針を取つて居る、故に官設を待つて居るのである、それよりは早く高等學校を設立させるために斷然たる方法を採つて高等學校は斯の如き場合には官設にはせぬ、概して高等學校と云ふものは縣立にすべきものである。又市立を奬勵すると云ふ方針を採られて、而して文部省に於ては官設にせられるのは却つて靑森秋田邊の如き所に官設すると云ふ斷然たる處分を一刻も早く採られる方が必要ではないかと思ひますが、其邊に付いて文部當局者の御意見は如何であるか、我輩は要領を得るやうな御答を得たいのである。

藝文觀

新體詩及び朗讀法

今日は、新體詩と云ふ名稱の起原さへに、知て居らぬ人が、中々多くある樣であります。併し、一般人民に至りましては、新體詩と云ふ名稱の起原の事抔を少しも知らぬのは、固よりの事であります。少しも怪むに足りませぬ。何んとなれば、彼等は、新體詩抔云ふものゝ、世にある事さへに知らぬ者でありますから。去り乍ら、新體詩の事抔に就て、彼此れ議論立てをする如き人達であり乍ら、尙ほ且つ、此の名稱の起原さへに、知らぬ如き人の、往々あるのは、少しく愕くべきの事であります。

左れば新體詩とは、近年世間に行はるゝ、彼の雅言を以て、七五若しくは五七的に作られる、一種の柔弱なる新體詩を、特に指す固有名詞の如くに、思ひ居る人も、少なからぬ樣でありますが。然れども、始めて新體詩を作りたる人々、始めて新體詩と云ふ名稱を用ゐたる人々に在ては、此の新體詩と云ふ名稱は、決して斯く狹隘なる意味にて、之を用ゐたる次第ではありませぬ。

新體詩と云ふ名稱は、十五年の昔、我々が新體詩抄と稱する書を著した時に、始めて用ゐたものであります。即ち當時我々の作つたものは、一種の新體詩であると謂ふ

の義を以て、新體詩と云ふの名稱を用ゐたのであります。新體詩は、必ず、我々が作りし如きものに限るべしと、謂ふが如き意味にて、之を用ゐたのではありませぬ。我々が、我々の作共に、新體詩と云ふ名稱を附けたのは、在來の長歌、若しくは短歌等とは異なつた一種新體の詩なるが故でありました。左れば、七五でも五七でも、五五でも七七でも、將た、是等の如き、窮屈なる詩形に制限せられざるものと雖も、苟も、長歌短歌等昔より在り來りの、詩歌に異りたる詩的の作は、皆之を稱して、新體詩と謂はむとするのが、我々の考でありました。左れば、尋常世にありふれた新體詩も新體詩なれば、頃者我々が著した、新體詩歌集に載せられた如き作抔も、亦新體詩であります。特に其れ而已ではありませぬ、同じ新體詩歌集に載て居るものと雖も、作者の思ひ思ひに、體形と趣向とを異にして居ります。而して、互に他人の作を以て新體詩では無いと、否決はして居りませぬ。併し、如何なる詩形の新體詩、如何なる內容の新體詩が、將來、最も多く行はるべきか、最も人情に訴へ得べきかと云ふ如き問題に關しては、互に、幾分か說を異にして居るかも知れませぬ。大體から申せば、尋常七五者流、五七者流は、新體詩は常に、斯の如き口調の束縛の下にある如きものであらうと思ひませうが、我々は、其れに反して、斯る窮屈なる羈絆を脫したものであらうと思ふのであります。斯の如き說の異同は、固よりあるべきでありませう、併し、孰れが、果して、正しき說であるか、將來、果して、如何樣なる新體詩が、專ら行はるべきかと云ふの問題は、今日之を決する事は出來ませぬ。唯々、時を待て始めて決する事が出來るのであります。到底、理論で決する事は出來ませぬ。實際で決するより外には仕方がありませぬ。今日之を決せむと欲して、喋々する者は、徒に水掛論を爲す者であります。然れども何時の世にも、水掛論者は兎角多い事であります。

論者は、或は謂ひませう、苟くも、新體詩と謂つて、詩の名稱を附する以上は、其體形は如何なるも、其內容は如何なるも、兎に角、詩たるの資格は具へて居らねばならぬ、然るに、新體詩歌集に載て居る、外山の作共の如きは、詩の資格とては、全く具へて居らぬものである、故に、新體化物とでも謂ふべきものにして、新體詩とは決して謂ふべきではないと。斯の如き批評を爲す者も、見受けられる樣であります。我々は、固より、斯の如き論者と爭ふ事は好まぬ者であります。我々は、唯々、感服するの外はありませぬ、彼等が西洋の、在りふれたる詩の定義や、分類等に精いのには、實に感服致します。併し我々は、彼の輩に少し問はむとする事があります。次の如き歌は、彼等は何んと思ひますか。

吾背子乎相見之其日至今日吾衣手者乾時毛奈志
戀者今葉不有常吾羽念乎何處戀其附見繁有
夜晝云別不知吾戀情蓋夢所見寸八
前年之先年從至今年戀跡奈何毛妹爾相難
余能奈何波牟奈之伎母乃等志流等伎子伊與余麻須萬須加奈之何利家理

是等の歌は、論者が如何なる歌と做しますか、是等は、何れも、萬葉集の堂々たる歌であります。故に、立派なる歌であると申しませう。

私が、新體詩と稱して、近年作つた所のものゝ如きは、全く、詩ではないと、謂ふ如き人もある樣でありますが、私は、斯る人に對して、抗辯する如き事は決してせぬ者であります。併し、是等私の作に關しては、大に明言すべき事があります。何んとなれば、私の詩形たり、私の修辭たり、決して、偶然に出來たものではありませぬ。一々、其然るべしと認定しをる理由があつて、之に照して、始めて使用するに至つたものでありますから。

又、一方から觀れば、私の新體詩は、數個の疑問に答へむ爲めのものであります。而して、果して能く答へ得たるか否やは、固より俄に斷定する事は出來ませぬが、必ず、幾分かは其目的を達したとは、私自らは信じて居ります。

我邦の言語は、優しき事、美しき事、哀れなる事等は、巧に之を謂ひ表はす事を得るも、強き事、勇ましき事、莊嚴なる事等は、我邦の詞では、到底謂ひ表はす事は出來ぬ。斯る目的の爲めには、我邦の詞は、實に不適當のものであると謂ふの說は、私は常に聞く所でありますが、此說は、我邦人の間に、一般に行はるゝものであらうと思はれます。而して、斯る說の一般に行はるゝのは、固より原因のある事であります。

凡そ、我邦に於ては、昔より、今に至るまで、美文、名文と稱せられるものは、源氏物語より、馬琴春水の作に至るまで、何れも皆、優美、若しくは悲哀なる性質に富むものであります。竹取物語、枕の草紙の如き、土佐日記の如き、伊勢物語の如き、平家物語の如き、源平盛衰記の如き、將た太平記の如き、何れも、其文章の性質たる、優美、若しくは、悲哀の原素に富むものでありまして、強剛の原素、莊嚴の原素に至りては、甚だ乏しい樣であります。嗚呼、長明の方丈記の如き、兼好法師の徒然草の如きは、共に佛敎的哲理を含有するものでありまして、哲學的の妙味ある文章には富むで居りますが、強剛若しくは莊嚴の原素に至ては矢張多く發見する事の出來ぬものであります。

斯の如く我邦に於ては、古來美文、名文と稱せらるゝもの〻特性は優美及び悲哀の原素であります。左れば本邦の言語は優美若しくは悲哀の文章を綴るには能く適するも、強剛若しくは、莊嚴の文章を綴るには頗る不適當のものであると謂ふの說が、內外人の間に廣く行はるゝのは固より怪しむに足らぬ事であります。併し乍ら是れは大なる謬見であります。苟くも古事記を讀むだ事のある者は、我邦の言語に關して、斯の如き斷定を下す事は出來ぬ筈であります。建速須佐之男命が高天原に上り坐しゝ時に、天照大御神が伊都之男建踏建びて待ち給へる樣を記せる文章の如き、亦此二柱の神が天安河を中に置きてうけび給ひし樣を記せる文章の如きは、ホーメルの如何なる文章に比するも、ダンテの如何なる文章に比するも、ミルトンの如何なる文章に比するも、其莊嚴の點に於ては優る事あるも劣る事はなき者と思はれます。我邦の言語を以て能く莊嚴の文章を綴り得る事は、古事記に由て既に證明せられたる所であります。今の國文家が古事記の文章を研究するを爲さずして、特に源氏物語に元祿文章に戀々とするが如きは、即ち其弊や本邦の言語は莊嚴の文章を綴り得るの能力なきものなりとの觀念を世人一般に抱かしむるに至りたるものであります。固より文章には種々の妙味のある事なれば、源氏物語は固より研究すべきであります、元祿文章も亦大に研究すべきであります。然れども古事記の文章の如きも亦共に研究せねばならぬものであります。

我邦の言語を以て能く莊嚴の文章を綴り得る事は、既に古事記に由て證明せられたる所でありますが、古事記の外には尙ほ參考になるべきもの〻無いではありませぬ。神皇正統記の如きは即ち斯の如き書の一であります。神皇正統記の文章の如きは往々莊嚴强剛の原素を具へたるものがあります。亦參考となるべきは今日世に大に行はるゝ謠曲の文章であります。謠曲の文章には是れ亦往々莊嚴なるもの、强剛なるものがあります。然れども今日は謠曲を謠ふ事は熾に流行しますが、其文章を研究する者は割合に少ない樣であります。

古事記の文章と、神皇正統記の文章と、謠曲の文章とを研究しましたらば、我邦の言語に關して大に發見する所がありませう。併し尙ほ是等の外にも大に參考となるべきものがあります。其れは即ち淨瑠璃の文章であります。淨瑠璃の文章を研究せねばならぬ抔と今時事々しく申しましたらば、或は大に愕く者もありませう。何んとなれば今日の文學者の中には既に淨瑠璃の文章抔を研究して居る者も少なからぬ事でありませうから。去り乍ら今日まで研究して居る所は、私の今研究したら

宜しからうと謂ふ所とは異ては居らぬかと思ひます。今日まで研究して居る所は主として人情の事項ではありませぬが、其れに次で文章を研究する事があります、所は猥褻なる戀慕の文句、若しくは悲哀なる愁歎の文句、若しくは流暢なる紀行の文章等であらうと思はれます。是等を研究するのも固より文學者のすべき事でありませうし、亦我邦の淨瑠璃に於て最も多く人の注意を惹くは蓋し是の諸點でありませう。去り乍ら我邦の淨瑠璃には尙ほ此外にも研究すべきの材料が無いではありませぬ。何んとなれば我邦の淨瑠璃にも多少悲愴若しくは莊嚴の原素の無いではありませぬから。彼の樓門五三の桐濱の眞砂に於て、五右衞門が山門の欄干に寄り掛りて「森のながめはあたい千金とは小さな譬へ」云々と謂ふの段の如き、國性爺に於ける樓門の段の如きは、何れも多少莊嚴の性質ある文章にして、隨分參考となるべきものでありませう。

左れば我邦の言語は、果して能く悲愴の文章强剛の文章莊嚴の文章を綴る能力のあるものなるや否の問題は、私の爲には既に決定せられたものでありますが、世人に取りては尙ほ未だ決定せられざるものゝ樣であります而已ならず、輿論は却て寧ろ之を否決せむとするの傾向ある樣に思はれます、故に私は肯定的に即ち「アッフォルメチイブ」に此問題に答へむ爲めの目的を以て、拙劣なる筆を顧ずに一種の新體詩を作て見るのであります。縱や悲愴なる能はざるも、莊嚴なる能はざるも、幾分か柔弱を脱した作を出來し得たりとすれば、私は實に喜びに堪えざらんとする者であります。

又私が屢〻聞く一疑問があります。疑問と謂ふよりは寧ろ歎息と謂ふ方が適當な事でありませう。即ち他の事ではありませぬ。西洋に於ては詩人が、我が作を聽衆の前に於て朗讀し若しくは諳誦する抔の事があれども、我邦に於ては斯る事を爲す者の一向に無いのは如何云ふ譯であるかとの疑問でありますが、斯る事の無いのも、言語の不完全なるに因る如くに思ふのが常の事の樣であります。併し乍ら其咎は果して言語の不完全なるにありますか、又は適當に之を使用する事を知らぬ人々にありますかは、亦起すべき問題であらうと思はれますが、私は其咎は言語其物に在るに非ずして、之を使用するを知らぬ人達にあると思ひます。

如何樣我邦に於ては、感情的に詩文を朗讀したり、諳誦したりする事はありませぬ。英語にて「レシテイシヨン」とか「デクラメイシヨン」とか云ふ樣な事は、本邦には未だ普通には行はれぬ事であります。文を作るも詩を作るも、自分が之を感情的に朗讀

したり、諳誦したりする事を爲さざる而已ならず、亦他人が之を爲すのを希望する事もありませぬ。音讀は固より無いではありませぬが、其音讀は子供が讀本の素讀でもするのと餘り異たものではありませぬ。情緒の變化を表彰する抑揚緩急抑のある讀方ではありませぬ。

西洋には演述と云ふ事が多く、日本には其の少ないと云ふの異同は、西洋の淨瑠璃と日本の淨瑠璃とを比較して見ると能く分ります。即ち西洋の淨瑠璃に於ては、人物が思想若しくは情操を演述する事が極はめて多い事でありまして、其演述の仕振りで看客を感動せしむるのを頻りに力むる樣になつて居りますが、本邦の淨瑠璃に至ては殆ど全く動作と會話とより成り立て居るのが常であります。私は曾て試に忠臣藏を英文に譯した事がありましたが、其時東西の淨瑠璃に斯の如き異同のある事を著しく悟りました。忠臣藏の如きは、其趣向に至ては非常に面白いものであります。非常に變化があり、非常に意表の事の多い狂言であります。金が無くつては亡君の仇討の仲間入りをする事が出來ぬと云つて、非常に苦心して居る忠義侍が、猪と思つて擊ち殺したのは猪には非ずして人間でありまして、而かも其懷中に丁度自分に入用な程な金があつたと云ふ事でありますから、實に天の助けと喜びましたが、喜んだ甲斐もなく、何んぞ計らん金は女房賣た金、擊ち留めたるは舅殿であつたと云ふ事になつて來ました。姑に頻りに折檻せられて居る最中へ、折惡しく尋ねて來たのが元の同藩士二人、ズンド瑣細な內證事と大層落着を見せましたが、親を殺したのは決して瑣細なことでありませぬから、今までは老婆が一人で責めて居ましたが、今は人切庖丁を二本指したお侍が老婆と一所になつて、理屈と腕力とで責めて來ました。其時勘平は實に苦しい事でありましたらう、中々今日の內閣が責任論者から責められる樣なものではありませんでしたらう。未だ自由黨もなければ國民協會も無い時分でありまして、誰も彼も皆責任論者でありましたからたまりませぬ。前には天の助と喜びし事も今は忽地に天の罰となりまして絕對絕命、勘平は諸肌押しぬぎ、脇指を拔くより早く腹にぐつと突き立てゝ腹を切りますと、勘平早まつたと云ふことに成つて來まして、今までは親殺しの大惡人だと云はれて頻りに折檻せられました者が、又手の裏を反えす間に親の敵を討つた孝行者に變つてしまつたのであります。實に驚き入た變化ではありませぬか。斯樣に意表な變化は西洋の演劇に於ては決して見る事は出來ませぬ。シエキスピーヤの何れの作を搜しても、斯の如き意表な變化は決してありませぬ。併しシエキスピーヤ

の作には又我邦の淨瑠璃に於ては決して見る事の出來ぬ事が澤山あります。即ち優美高尚なる情操即ち、センチメント」の演述が澤山あります。

さうは謂ひますものゝ、我邦の淨瑠璃に於ても、情操の演述とも云ふべき事が全く無いではありませぬ。甚だ巧に、甚だ驗のある樣に入て居るのも中にはあります。即ち仙臺萩の飯たき場に於ける政岡の守り歌の如き、お三茂兵衞の淨瑠璃に於てお三が女猫を相手に趣味ある演述を爲すが如きは、隨分巧な趣旨であります。左れば本邦の淨瑠璃にも時とすると斯の如き事がありますが、概して申せば、我邦の演劇に於て看客を重に感動せしむるのは、言葉少なに爲す所の趣味ある動作であります。明治の演劇に於て最も非常に看客を感動せしめたのは、私の見物した中では重井新左衞門に於ける宗十郎の新左衞門と、仲滿の狂言に於ける團十郎の仲滿でありました。看客をして殆ど天あるを忘れ、地あるを忘れ、人あるを忘れ、我れあるを忘れしめたるは、彼の新左衞門の仕打ち、彼の仲滿の仕打ちでありました。

我邦の演劇に於ては情操演述の事が少なく、會話及び動作が重なる原素でありますから、亦隨て俳優も是等の點に最も注意を致します。是等の點を最も研究する樣に成つて居ります故に、是等の點に於ては、我邦の俳優は世界何れの國の俳優にも劣らざる者であります。然るに近頃の狂言作者には少しは西洋の「ドラマ」抔を覗いた者もあります樣ですが、斯る作者は西洋の狂言には演述が多くあるのに、日本の狂言には從前のものには演述の部分が至て少ないと云ふ事に氣の付いたのであります。ハムレットの「ソリロクキー」にでも倣ふ積りでありますが、何んだか頻りに演說めいた事を入れたがる作者もある樣であります。團洲抔は斯の如き事の爲めに幾何か苦しめられて居りはせぬかと思はれます。役者に少し長い事を言はせるには餘程趣味ある事でなければなりませぬ。若し左もなくして平凡の事でありますと、何程名人な役者でも其れは叶ひませぬ、必ず不評判を免れませぬ。其れ故に作者は斯る事には能く注意しなければなりませぬ。臺詞の如く、掛合ひの如く、役者が互に代り代りに述ぶる詞でありますれば、其れ程深い妙味のある文句で無くても詐す事が出來ますが、唯一人で私の樣につまらぬ事を長く述べますと、失敗は是非とも免れませぬ。近松を始め昔の作者達が人物に長い一人演述をさせぬのは大に道理のある事であります。シエキスピーヤが人物に云はせる樣な事や、ゲーテーが人物に云はせる樣な事は中々容易には出來ませぬ。併し本邦にも其類が全く無いと云ふ譯ではありませぬ。即ち謠曲には中々長い演述が隨分多くあります。さう

して詞も能く練てありますれば、亦思想も頗る立派な高尚なものであります。其れ故に立派に述べる事も出來て聽衆も感動するのであります。

左れば本邦に於て少し長い「デクラメイション」じみた事の多くあるのは、特り謠曲にある而已でありますが、謠曲に於ける詞の述べ方と云ふものは頗る「コンヴエンショナル」なものであります、亦一樣なものであります、恰も能の面の如きものであります。能の面と云ふ者は中には頗る趣味ある面白き者がありますが、其趣味たる活動のある趣味ではありませぬ、有活的變化のある趣味ではありませぬ、不變固定の趣味であります、唯々一の顏付を代表した者であります、恰も怒つた顏をして死んだとか、笑つた顏をして死んだとか云ふ者の顏を始終見て居る樣な者であります。而かも其顏付の表はし方に至ては頗る「コンヴエンショナル」なものであります、能に於ける詞の述べ方は能く是等の面に匹敵したものであります。

能の外に「デクラメイション」じみた事のあるのは講談師の講談であります。咄家の話は徹頭徹尾會話的でありますが、講釋師の講談に至りますと、さうであります、かうであります抔と講談師が己れと聽衆との相對を確に認めて、二人性で述べる所もありますが、事項を述ぶるに至ては往々「デクラメイション」的に述ぶる場合があります。此の點に於ては固より讀物の種類と講談師の性質とに依て大に異同があります、如燕抔の講談には往々頗る「デクラメイション」的の讀方がある樣に思はれます。併し西洋の「オレイション」とか「デクラメイション」とか云ふものとは、其述べ方が幾分か違て居ります。今日は我邦でも演說と云ふ事が餘程開けて來まして、中々達辯な人もある樣に見えますが、「オレイション」とか「デクラメイション」とか云ふ事を爲す人は未だ無い樣で御座います。併し演說と「デクラメイション」を混合したもの、若しくは其間の子の樣なものは、講談の外にも昔から無いでもありませぬ。其れは劇場で座頭抔が他の俳優を看客に紹介する抔の爲めに述ぶる口上と云ふものでありますが、此口上と云ふものは昔から行はれたものでありまして、維新前に於ては恐らくは唯一の演說でありましたらう。而して此口上には時とすると中々長いのがあります、或る年の顏見勢狂言に、中村勘三郎の座に於きまして、如何云ふ譯でありましたか、立役が同盟罷工をやりまして、大層座元勘三郎が困りましたのですから、其前々年の顏見勢に一世一代の口上を述べて世をいとひまして、五百崎の里に閑居いたし、性を養ひ居りました白猿に、又一年丈役者に成て助けて呉れろと頼みましたが、一旦看客へ仕舞ぇすると申した詞が鐵石より重ひと云ふ理由を

申して斷りましたれば、其後又弟半四郎悴團十郎同道にて勘三郎白猿の方へ參りまして、責めては顔見勢を三十日助けて呉れとの頼みでありましたが、其れも看客へ義理が重い故に白猿は目を眠つて又斷りを申しました故に、勘三郎は途方にくれましたが、左ればとて顔見勢を休む譯には參らぬと云ふ所から、然らば顔見勢三十日の間、口上丈を述べては呉れまいかと白猿に折り入つての頼みでありました。白猿も口上丈ならば役者に成るのでも無ひ事だに出て引受けやうと申して、先日の總理大臣の議院に於ての御演説杯よりも長い位の口上を、顔見勢三十日の間述べたと云ふ事でありますが、此口上は役者と雖も一旦公衆へ對して言つた事は鐵石よりも重いと云ふ主義抔を述べたものでありまして、頗る趣味のあるものでありましたから、述べる者も熱心に述べる事が出來、看客も感心して聽いたらうと思はれます。左れば本邦には昔は演説と云ふ事は全く無かつた樣でありますが、さうではありませぬ。必要があれば隨分長い演説をした事もあります。昔演説の行はれなかつたのは、言語の不完の故の如くに思ふ如き者は、實に誤つた考を持つて居る者と謂はなければなりませぬ、昔は演説をすべき機會が無かつたのであります。機會さへあれば隨分立派に演説の出來る言語であると云ふ事は、私は決して疑ひませぬ。

次には七五五七が本邦の詩歌には最も適當した口調であるか否や、と云ふ事に關して聊か卑見を述べませうと思ひます。既に新體詩歌集の序に於て謂ひました通り、此口調を始終變化なく用ゐるのは、決して人を感動せしむるの方法ではありませぬ。七五五七の口調は至て平穩なもので、或る種類の事柄を述ぶるには至極適當した者であらうと思はれます。即ち其れ程深い感情の無い事を優美に述ぶる抔の爲めには頗る好きものでありませう。例へば紀行の如きは枕詞抔を雜せて、此口調で述ぶるのが甚だ適當な事であらうと思はれます。併し强い感情のある事柄は、此口調で述べては却て驗が無くなります。七五五七の句調の詩歌は恰も圓山流の繪畫の如くでありまして、優美は即ち優美である事の出來るものではありますが、强く人を感動せしむる事は到底出來ぬものであります。

七五五七の句調を好む人は、頻に口調とか、聲調とか云ふ事を喧しく謂ひますが、是れには餘程面白い事があります。是等の人の口調とか聲調とか云ふものは、如何云ふものがありますかと云ひますと、感情的に抑揚緩急等の變化を附けて謠ふとか、述ぶるとか云ふ場合の、口調とか聲調とかではありませぬ。唯々子供が鞠歌を唱ふ

るが如き口調、或は昔寺子家で手習子が都でも讀んだ樣な口調、若くは「どうで有馬の御入湯入道清盛火の病」的の口調に過ぎぬのであります。固より是等よりは優美な口調ではありませうが、結局同樣のものたる事は免れぬのでありませう。併し私の口調と謂ふのは斯の如き口調の事ではありませぬ。謠ふべき樣に謠ふ時の口調、述ぶべき樣に述ぶる時の口調の事であります。何んでも七五五七でなければならぬ樣に思て居る人達は、此の眞の口調の事は少しも考へて居らぬのでありませう。本當の謠ひ方、本當の述べ方になりますと、字餘りて口調のよき事もあれば、字足らずで口調のよき事もあります。七五五七の詩歌でありますと完全無缺の優美なものと見ゆるも、却て口調の不滿足なる所が必ずあります。

左れば私には面白くつてならぬ事があります。其れは外の事ではありませぬ、七五にも五七にもあらざる私の新體詩に關しての一種の批評であります。內容と結構とに至ては幾分か取るべき所もあらむが、其口調に至ては如何なるものであらうか、斯樣なものを如何に吟哦すべきか抔云ふの批評でありますが、私には實に面白い批評だと思はれます。斯樣な不調子なものを如何に吟ずるかと訝かる如き其人達は、自分が稱讃する所の七五五七の作を如何に吟じますか。苟も人の作に對して斯樣なものを如何に吟ずるかと謂ふ如き人は、自分が稱贊する七五五七のものを、縱や自身には之を吟ずる事の出來ざるも、他人が之を甘く吟ずるのを聽いた位の事はあつて、其吟じ方の觀念丈は少なくとも確に有て居らなければなりませぬが、彼等は果して斯る觀念を有て居りませうか、如何でありませう。諸君の中には七五五七者流が自作の新體詩を吟ずるのをお聽きに成つた方が幾人ありますか、私はまだ一度も聽いた事がありませぬ。併し世間には七五五七の新體詩の吟じ方が立派に出來て居るのでありませう。私の未だ一度も拜聽した事の無いのは私の迂濶なのでありませう。

世間には定めし七五五七の新體詩の讀み方とか、吟じ方とか云ふものが、既に立派に出來て居るのでありませうが、私の知て居る所では、都て我邦に於ての音讀は新聞紙でも、小說でも、新體詩でも、其讀み方は大抵皆變則の洋學者が西洋の文章を音讀するのと同じ樣なものでありまして、或は吁嗚るが如く、或は謠ふが如く、將た素人が經文でも讀む樣に抑揚もなく緩急もなく、妙な高調子に讀むのが常でありますが、往々は或はウンン或はエーエーと云ひ乍ら讀むのが、是れが我邦の從來の讀み方でありますが、變則家に西洋文の口調の善惡が如何して分りませうか。日本人

が支那の詩を作つて之を日本流に吟じて、其吟じ方の上に於ての詩の口調の善惡を彼此れ謂ふのは宜しう御座いませうが、支那の詩としての口調の事を彼此れと謂はむとする爲めには、先づ支那人の如くに吟ずる事を知らなければなりますまい。日本の詩文に至ても同じ事であります。其音讀をムチヤクチヤにして居る者、其吟じ方を少しも知らぬ如き者が如何して其口調の善惡に就て彼此れと謂ふ事が出來ませうか。謂つた所で一向に價値の無いものではありませぬか。併し文章の讀み方も知らず、新體詩の演述の仕方も知らぬ族にして、口調とか聲調とか左も知つた風に彼此れと謂ふ者の多いと謂ふのは、實に面白い事ではありませぬか。日本の詩文の口調の事を彼此れと謂はむとする爲めには、如何しても朗讀法からして研究して來なければなりませぬ。新體詩の口調の事を如何であるとか斯樣であるとか謂はむとする爲めには、如何しても其演述法からして研究して掛らねばなりませぬ。併し左も物知り顏をして私が斯く申しても、結局私一己の卑見でありますから、其積りでお聽き取りを願ひます。私は七五五七者流に問ふ事があります、謠曲及び淨瑠璃に於て如何なる部分が七五若しくは五七の口調で綴てありますか。謠曲淨瑠璃に於ても、七五五七は重に地の部分に用ゐられる口調であります。詞の部分は七五五七の口調でないのが多くあります。而して地の部分は即ち謠ふ部分でありまして、詞の部分は即ち演述の部分であります。演述の部分に七五五七の口調で無い文句が多くあるのは、七五五七の口調は演述には不適當なものゝ故であります。其れが虛言だと思ふ者は、試に七五若しくは五七の新體詩を演述して見ると能く分ります。七五五七のものを演述しますと、如何しても雷拍子に成る傾きがありまして、誠に輕いものになります。重味のないものになります。若し新體詩と云ふものは眞正に演述すべきものでは無く、音讀と云へば雷拍子で始終變化もなしに、恰も小供が鞠歌を唱ふるが如くに爲すべきものでありますか、但しは又新體詩と云ふものは地と詞との區別なしに、始めより終りまで都て謠ふものでありますならばいざ知らず、演述すべきものであります ならば、始終七五五七の口調を用ゐるのは不適當な事であります。加之淨瑠璃には詞の部分で無い所にも七五五七の口調で無いのが隨分あります、例へば假名手本忠臣藏に於ける「嘉肴ありといへども食せざれば其味を知らず」の如き、亦菅原傳授手習鑑に於ける「鳥の子の巢に放れ魚陸に上るとは浪人の身の喩種菅丞相の舍人梅王丸主君流罪なされてより都の事共取賄ひ御臺の御行衛、尋んと笠ふかゞと深緑土手の並木に指かゝれば向ふから

も深編笠我に逆はぬ其出立互に夫れぞと近く寄り」と云ふ文句の如きは、演述に隨分適當した口調でありますが、其中にも演述に不適當な文句が無いではありませぬ。即ち「笠ふか〳〵と深絲抔の文句は演述には不適當なものであります。併し七五五七流の方では却て斯の如き文句を好むのでありませう。

諸君は馬琴の文章を如何にお讀みになりますか。私の見る所に據りますと著者が事柄を述べる部分と其中の人物が述べる詞との差別無しに大概七五の口調で綴てあります。信乃の詞でも濱路の詞でも皆七五であります。信乃が許我へ旅立をする其前夜に、濱路が信乃の臥房に參りました時に於ての兩人の會話の如きは、實に非常なる感情を興へる所のものでありますが、此兩人は枕詞抔を雜せて始終七五の口調で話をして居ります。其れ故に普通我邦に行はれて居ります抑揚もなければ緩急もなき讀方で讀みますと、誠に口調が好くつて最と輕々と舌が動きますが、其處が即ち其文句に威嚴のない所であります、其口調は決して當時の悲哀なる事情に適したものではありませぬ。然れども馬琴と雖も道德上の斷定抔を下す場合に於ては目前に七五の口調では遣りませぬ。例へば信乃と濱路の品行に關して何んと申ますか、「現悲しきは死別より生別にますものなし吁罕なるかもこの未通女いまだ鴛鴦の衾を累ねず連理の枕を並べずしてその情百年の夫婦に勝たり爾るに信乃は情に引れてその心を動さずよくその情に從ふて男女別ある趣を得たり夫れ色界の迷津は賢不肖無差別也」云々の如きは、七五ではありませぬ故に能く嚴格を得て居ります。亦犬村角太郎が草の庵にて維摩の行を爲し居る樣を述ぶるに當ても、七五の調は用ゐて居りませぬ。其れ故に此の行りには大に威嚴があります。左れば七五好きの馬琴と雖も、眞に威嚴を要し嚴格を要する場合に於ては七五の口調は用ゐて居りませぬ。去り乍ら馬琴の句讀の切り方によつて見ますると、彼は七五の調を用ゐざる所と雖も結局雷的の口調を旨とした者と見えます。其の證據を示しませう。例へば「現悲しきは死別より生別にますものなし」と即ち「現悲しきは死別より」の所で句讀を切つてありますが、是は即ち雷的讀み方の句讀の切り方であります。本當の讀方の句讀の切り方は、是れとは違つたものでなければなりませぬ。然らば如何云ふ樣に切るかとお尋ねでありますれば、私は「現に」の後で切り「悲しきは」の後で切りまして「死別より生別にますものなし」は終りまで別に句讀無しにしますそうしますると「現に、悲しきは、死別より生別にますものなし」となります。是れでなければ本當の讀方の口調ではありませぬ、馬琴の如くに「現に悲しきは死別

より、」の所で句讀を切るのは、決して本當の讀み方の切り方ではありませぬ。又「爾るに信乃は情に引れて」の句に於ても、「夫れ色界の迷津は」の句に於ても、終りに於ての外は句讀を切りませぬが、其れでは本當の讀み方には宜しくありませぬ。本當の讀み方の爲めには「爾るに」と切つて「信乃は情に引れて」とやらなければいけません。「夫れ」と切つて「色界の迷津は」とやらなければいけませぬ。亦犬村角太郎の事を述ぶるに當りましては、「年紀は二十のうへを」で切り、「一ッ二ッにやならんずらん」で切り、「色白く唇絳に眉秀で」で切り、「居長高く」で切り、「月額の迹」で切り、「眞黑に延びたる」で切りますが、是等も本當の讀み方には不適な切り方であります。私は「年紀は二十のうへを一ッ二ッにやならん、色白く唇絳に眉秀で、居長高く、月額の迹眞黑に延びたる」と云ふ樣に句讀を切ります。馬琴の句讀の切り方は、本當の讀み方の爲めには實に不適當なものであります。馬琴の文章の口調や、句讀の切り方を研究しますと、中々面白い事を見出しますから、諸君もちつとやつて御覽なさいまし、隨分發見なさる事がありませう。

次には用語の性質に就て少しお話を致しませう。用語も雅言や比喩語や枕詞や重語等を多く用ふる事を好む人が今時は餘程多い樣であります。斯る種類の詞を多く用ゐて意味を朦朧たらしむる事を頻りに力むる人が多い樣でありますが、斯る性質の詞の多い詩文は、文句の巧なる事、口調の輕々としたる事等に於ては、甚だ宜しきものかは知りませぬが、併し人を感動せしむるの點に至ては斯る虛飾を用ゐずに、分り易き詞を以て意味の明瞭なる樣に綴る方が、却て優つた法ではありませぬか、枕詞や重意語抔を多く用ゐては、悲愴とか莊嚴とか、云ふ樣な詩文は決して出來るものではありませぬ。此の理は萬葉の歌と古今の歌とを少し對照して見ると能く分ります。先づ古今の歌を擧げて見ませう。

立わかれいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ

是れは御承知の通り中納言行平朝臣の離別歌であります。

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

是れは御承知の通り紀の敏貞の離別歌であります。

をしむから戀しきものをしら雲のたちなむ後は何ごゝちせむ

是れは御承知の通り紀の貫之の離別歌であります。

糸にする物ならなくに別れ路のこゝろぼそくもおもほゆるかな

是れは御承知の通り紀の貫之の羈旅歌であります。

如何でありますか。是等は皆巧な詞使ひで、誠に面白く出來た歌ではありませぬか。所で萬葉の歌は如何云ふ風に出來て居りますか。少し其例を示しませう。

勿念跡君者雖言相時何時跡知而加吾不戀有乎

是れは御承知の通り柿本人麿の妻が人麿との別れを悲みての歌であります。

葉根蔣今爲妹乎夢見而情内二戀度鴨

是れは御承知の通り大伴宿禰家持が童女に贈りたる歌であります。

鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之持乍將有

是れは御承知の通り柿本人麿が石見國に在し、死に臨みし時に傷み悲みて作りし歌であります。

妹之見師屋前爾咲花時者經去吾泣涙未干爾
如是耳有家留物乎妹毛吾毛如千歳憑有來

是等は御承知の通り何れも家持の悲歌であります。

遠有而雲居爾所見妹家爾早將至步黒駒

是れは御承知の通り柿本人麿の行路歌であります。

固より萬葉の歌と申しまして、委く斯の如きもの計りではありませぬが、併し萬葉には斯の如き歌が實に澤山あります而已ならず、亦斯の如き歌は古今集には餘り見る事の無いものであります。偖て前に讀みました古今集の歌共に、後に讀みました萬葉集の歌共とは、如何なる點に於て違て居るのであります。第一の異同は、古今集の歌は詞が華麗で、詞使ひが能く整て居りますが、其れに反して萬葉の歌は詞が平易で、詞使ひが打ち付けであります。亦古今の歌には「まつとしきかば」の「まつ」の如く、「あすはあふみと」の「あふみ」の如く、意味を二重に引ッ懸けて居る詞が動ともすると使てありますが、萬葉の歌には此の類の詞が至つて尠なう御座います。謂はむとする所の事を唯一筋に指す如き詞を用ゐるのが常でありますが、詞及び詞使ひの異同の結果として生ずる所の異同が又種々あります、即ち古今集の歌は如何にも巧に都雅に出來て居つて、何處となく興味がある樣で、而かも讀むには至て讀みよい歌でありますが、萬葉の歌は質朴で粗笨であつて、尋常の讀み方では古今集の歌の如くに讀むに讀み克くはないものでありますから、俗人の考では萬葉の歌よりは古今集の歌の方が優れたものと思はれませうが、萬葉の歌を以て古今集の歌よりは優れたるものとする事は、見識のある者の間には既に決定したる輿論であると思はれます、而して其理由は、唯ゝ萬葉の歌は強くして、古今集の歌は弱い、甲者

は男らしく、乙者は女らしいと云ふ樣な事許りではありませぬ。萬葉の歌は思想及び感情を「ナチユラル」に云ひ表はしたものでありますが、古今集の歌に至ては思想及び感情を多くは「アーチフイシヤル」に云ひ表はして居ります。古今集の歌は巧に出來ては居りますが、作者が何う云はうか斯う云はうかと凝て詠だものであると云ふ事は、歴然として其表に顯はれて居ります。然るに萬葉の歌に至りましては想ふ所感ずる所を少しも憚る所なく少しも飾る所なしに述べた樣に出來て居ります。左れば古今集の歌は之を讀む人をして、巧な歌であるとか、良い歌であるとか、面白い歌であるとか謂て褒めさせる事は出來ますが、萬葉の歌の如くに、歌の良否抔を問ふ迄なしに、直に讀者をして感動せしむると云ふ事は出來ぬのが常であります。之を要するに、古今集の歌には術が表はれて居ります、巧が表はれて居ります。虛飾心が表はれて居ります「ヴアニテー」が表はれて居ります、而して亦多分の水が雜て居るものであります、枕詞や重意語は歌に取りては是れ皆酒に雜ぜた水の如きものであります、熱血に雜ぜた水の如きものであります、之に反して萬葉の歌には作者の實意が表はれて居ります、作者の赤心が表はれて居ります、水は一滴も雜て居りませぬ、全く「アルコール」であります、全く熱血であります、其れ故に萬葉の歌は莊嚴であります、悲愴であります、其れ故に讀む者をして實に感動せしむるのであります。

今申した所は概して萬葉の歌と古今集の歌との異同でありますが、同じ人麿の歌でも、人麿の如き名人の歌でも、枕詞や重意語や譬喩語のある歌は面白い樣でも巧に出來て居る樣でも、實がありませぬ、眞情がありませぬ。例へば彼の

あし引きの山鳥の尾のしだりをのながゝし夜をひとりかもねん

と云ふ歌は如何でありますか。枕詞や譬喩語の面白い機關はありますが、能く人を感動せしむるの歌ではありませぬ。是れは熱情の乏しい歌であります。三十一文字の中で半分よりも餘計に水が雜て居る歌で、人を感動せしむる事は決して出來ませぬ。おまけに幾許長いと云つて鳥の尾の長さでもつて夜の長いのを形容する抔とは、人を馬鹿にした話であります、是れよりは「おきて見つねてみつ蚊帳のひろさかな」の方が餘程熱情を表はしたもので、無駄な形容抔が少しもなく實に詩的のものであります、亦古今集の歌にも彼の

奥山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき

の歌の如くに、枕詞や凝つた形容抔を用ゐずに、平易なる詞を以て眞實の感情を自

然的に「ナチユラル」にすら〳〵と述べたものには斯の如く絶妙な歌もあります。此歌は歌合はせの歌ではありますが、猿丸に於ては必ず何時か其悲さを實驗したのでありませう。然らざるも實に之を實驗した事のある樣に出來て居ります。亦

ほとゝぎす鳴きつるかたをながむればただ有明の月ぞ殘れる

の歌の如きも、枕詞や凝つた形容抔は少しも用ゐずに、一言半句の無駄を云はずに、興味ある實況を有りの儘に述べたものでありますが、是れも實に秀逸な歌ではありませぬか。是等の歌は今日の雅言者流、枕詞者流抔の最も研究すべきものであります。或は今の醋豆腐連は、猿丸の歌や後徳大寺左大臣の歌は唯有りの儘に實況や感情を述べたものでありまして一向に面白く無いと、云ふかも知りませぬが、私は實に良い歌であると思ひます。私は思ひます。今日に於ても短歌でも長歌でも新體詩でも、雅言や廻り遠き形容抔は決して好ましいものでは無いと思ひます。斯る方便を用ゐる時は、其歌や詩は巧に出來たとか、面白いものだとか、華麗なものだとか云つて人に褒められる事はありませうが、人を感動せしむる事は其れ程に出來ませぬ。其れよりは俗語でも漢語でも人に能く分る樣な詞の中で、即ち生た人間が怒つた情や喜ぶ時や悲む時に自然に用ゐる如き詞の中で、強い詞や優い詞と夫れ夫れ其場合々々に隨て適當なる者を選んで用ふべきであると思ひます。さうすれば縱や巧に作れたとか、華麗に出來たとか云つて人に褒められる事はなくとも、人を感動せしむる事は却て多く出來るであらうと思ひます。併し斯く申しますも、私の新體詩が即ち斯の如きものであると申すのではありませぬ。其れは固より別問題でありますから、其積りでお聽き取りを願ひます。去り乍ら諸君が私の新體詩を御批評なさる爲めには、私が如何に之を朗讀し若しくは演述するかを御聽き下さるのが必要でありますから、是れから一二の作を朗讀若しくは演述してお聽かせ申しませう。（公刊）

日本繪畫の未來

（明治二十三年四月）

本論は去四月二十七日小石川帝國大學植物園內會議所に於て開會せる明治美術會第二大會の席に於て演說したる予の數年前より懷抱熱慮せる日本繪畫論なり爰に敷部を印刷して辱知諸君に頒つ。

今日本邦繪畫の事を談ずるものは五里霧中にあり

本邦繪畫の事を談ずる者は大約二流派に屬するなり、即ち一は外人の稱揚におだてられて今日宇內の活美術は特り日本にのみ存在するなりと忘信するの族なり、一は日本は尙ほ半開國なり西洋は文明國なり半開國の事物は其何たるを問はず渾て文明國の事物には及ばざるの理なり、繪畫の如きと雖も固より然からざるはなしと只漠然たる憶斷をなしてとりすまし居るの輩なり。然り而して兩流派畫人の製出したる繪畫を其誇唱する處と照らし看るに、一は以て余輩をして宇內の活美術は特り日本にのみ存するものなることを信せしむる能はざるものなり、

日本畫と西洋畫との異同

一は以て余輩をして日本の文明强ちに西洋の文明に劣れるを悟らしむること能はざるものなり、兩者の互ひに誇唱する所は如何がなるも、その製出する所の繪畫に至りては尙ほ今日に在つては實に弟たり難く兄たり難きものと謂ふべきなり。唯兩者の異なる所は、日本畫は需要多くして西洋畫は需要少なきこと則ち是なり、日本畫は賣れ口良く西洋畫は賣れ口惡しきこと則ち是なり。然れども賣れ口の良きは決して誇るに足らざるなり、賣れ口の良きは職として代價の廉なるに由るものなり、未だ遽かに日本畫の西洋畫に優れるを證するに足らざるなり。唯兩者の異なる所は、日本畫は廉價なれども西洋畫は高價なること則ち是なり、然れども西洋畫の高價なるは決して誇るに足らざるなり、其高價なるは繪具の高價なると多量の時間を要するとによるものなり、美術品として日本畫に優れるの故には非ざるなり。何故に日本畫は西洋畫に優れるか、曰く西洋畫は眞物に似せるを旨とすれども日本畫に至ては物の精神を寫すを旨とせりと、何故西洋畫は日本畫に優れるか、曰く西洋畫は濃淡自在なり遠近の寫法完全なりと、蓋し何物の美術品と雖も眞物に由らざるものは有らざるならん、何物の繪畫と雖も濃淡寫景のみを以て盡くせりとすべきものは有らざるならん、今の繪畫を談ずる者は實に五里霧中に在りと

今日の畫人は題に困しめり

曰はずんばあるべからざるなり。

今の畫人は題に困しめるものなり

今の繪畫を畫くものは、日本流なると西洋流なるとを問はず、畫題に此上もなく困しめるものゝ如し、日本畫を看ても油畫を看ても其證據歴然たり。先づ油畫に就て之を言はん、昨年不忍池馬見所に於て開會せる油畫展覽會に陳列せられたる油畫の如きは一として予の謂ふ所逕言に非ざるを證せざるはなし、一として今の油畫畫きは畫題に困しめるものなることを證明せざるはなし、畫題に困しまざるものは多量の日數と多量の繪具とを費やして彼れの如く神社佛閣のみを畫くことはせざるなり、畫題に困しまざるものは彼れの如く枚一枚菜畑のみを畫くことはせざるなり、畫題に困しまざるものは彼れの如く意味もなき田舍家の畫を以て田舍の婚禮とは題せざるなり、畫題に困しまざるものは彼れの如く死したる雉を畫き倘ほも死したる義家を畫きて悟然として大得意になり居るものにはあらざるなり、現今開會中なる第三勸業博覽會美術館に掛け列ねたる油畫を看るべし、龍に乘るの女神にあらざれば海面に茫然たるの天人なり、錦繪の琴彈きに非らざれば「ラオコアン」の燒直しに過ぎざるなり、甚だしきに至ては明治美術會の衣桁菜畑をひ

第三勸業博覽會の油畫

明治二十二年馬見所展覽會の油畫

た其似に其似たるものさへあるに非らずや、實に窮したりと謂はざるべからず。顧みて和畫者流の手際を看るに、其畫題に困しめるは洋畫者流と全く同一なり、今第三勸業博覽會美術館中の出品に就て徵するに、油畫とは幾分か其畫題こそ異なれ、畫題に窮したるの度に至りては少しも擇む所なきことを見るべし、彼れの如く龍に乘るの女神には非らざるも鯉に乘るの女神に過ぎざるなり、彼れの如く菜畑の畫には非らざるも古來常例の山水に過ざざるなり、彼れの如く錦繪の琴彈きには非らざるも唐紙繪の唐兒人形に過ぎざるなり、彼れの如く「ラオコアン」の燒直しには非らざるも看ざる虎の闘ひの畫に過ぎざるなり、應に非らざれば瀑布なり、藤に非らざれば櫻なり、天人に非らざれば鍾馗なり、虎を使ふ羅漢に非らざれば龍を使ふ羅漢なり、魚屋の見世の如きものに非らざれば鳥屋の見世の如きものなり、植木屋の見世に非らざれば八百屋の見世なり、唐人の機織に非らざれば公家の花見なり、子供の漁りに非らざれば高砂の翁媼なり、戰爭の畫に非らざれば犬追物の畫なり、悉く有振れたる畫題に過ざざるなり、一として在來の畫題を燒直したるものに非らざるはなし、窮せざれば斯かる畫題は決して擇ばざるなり。和流の畫人も洋風の畫人も、互ひに我が流儀の優りたることを誇りはすれども、其畫く所の繪畫によ

第三勸業博覽會の日本畫

つて之を證すべしと謂はれたらんには、其の證明に窮せざるものはあらざるならん、而して其の畫題に窮したるの度に至りては兩者の間に擇む所少しもあらざるなり。

畫題選擇に關する誤謬

現今油畫畫きの技倆を察するに、數年前に比すれば大に進歩したるものゝ如し、今日吾邦の油畫畫きには、或は伊太利に於て學びたるものあり、或は巴黎に於て學びたるものあり、よしや佛蘭西伊太利等に留學せしことなき者と雖も、相應なる外國教師に就て數年間正則の教授を受けて洋畫を學びたる者決して尠しとせざるなり、左れば今日吾邦の油畫畫き中には繪具の用法濃淡の調和遠近の分配等に至ては、稍〻其心得ある者尠なからざるなり、蓋し吾邦油畫かきの今日困しむ所は、最早繪具の用法濃淡の調和遠近の分配等の點にはあらざるなり、其困しむ所は全く畫題の選擇に外ならざるなり、今の油畫畫きの擇ぶ所の畫題は、建築に非らざれば景色、景色に非らざれば歴史、歴史に非らざれば想像に由らざるはなし、而して其是等を擇ぶは職として其形を取るに過ぎざるなり、思想を取るものは極めて少なし、故に其畫く所は、建築なるも、景色なるも、歴史的なるも、想像物なるも、全く無味なるを免かれず、全く死物なるを免かれず、殿堂は殿堂に過ぎざるなり、菜畑は菜畑に過ぎざるなり、軍人は軍人に過ぎざるなり、死したる雉は死したる雉に過ぎざるなり、美麗なる源氏の大將の畫も淺草奥山の生人形に彷彿たるの憾なき能はざるなり、田舍の婚禮は其題名を聽いて始めてこれが田舍の婚禮かと疑はしめんとする如きものなり。然り而して西洋の畫人は古今想像に屬する事物を畫く者多しとは吾邦油畫畫きの聞き及べる所なり、例へば美人を畫く者あり、天使を畫く者あり、貞瑪利亞を畫く者あり、アダム、イブを畫く者あり、ヴィーナスを畫く者あり、ヘルキュリース者ありと、是に於て方今吾邦の油畫畫きにも想像的の物を畫かんと企つる者あり、彼の「ラオコアン」の燒直しの如き、彼の龍に乘りたる觀音の如き、彼の海面に茫然たる天人の如き、何れも皆この企てよりして生じたる者ならざるはなし、然り而して彼等油畫畫きが曾に實物を模寫するに止まらずして想像物を畫かんと企つる其志の程は如何にも神妙なれども、是れを爲すの始末是れを遂ぐるの方略に至りては實に笑はずんばあるべからざるなり。今の油畫畫きは少しも眞物に依らざるの想像物を畫かんと企つるものなり、今の油畫畫きは美人を見たることなくして美

想像畫は如何なるべきものなるや

人を畫かんと企つるものなり、今の油畫畫きは惡魔に出逢ひたることなくして惡魔を畫かんと企つるものなり、今の油畫畫きは神靈に觸れたること無くして神靈を畫かんと企つるものなり、今の想像畫にして凡庸看るに足らざる者のみなるは固より怪しむに足らざるなり、美を見たること無きもの〻畫きたる美人は美人には非らざるなり、惡魔に逢ひたること無き者の畫きたる惡魔は惡魔に非らざるなり、神靈に觸れたること無き者の畫きたる神靈は神靈には非らざるなり。若し眞に美人に出逢ひ、其人の爲めには命をも捨てん、其人の姿は寐ても寤ても目に附きて忘れられずと言ふが如き場合に於て、始めて能く眞正の美人を畫くことを得べきなり、而して其美人こそは實に想像の美人ならん。凡そ如何なる美人と雖も肉體の美人には多少不完全なる點なくんばあらざるなり、然れども其畫く所は其腦中に在る美人の觀念其物なり、肉體の美人を畫けりと雖も肉體の美人を畫きたるには非らざるなり、其畫きたる美人の影像には肉體の美人に附き添ふたる不完全の點は附着せざるなり、然りと雖も其畫像は活きたる美人の畫像なり、其目は物を看るの目なり、其口は物を言ふの口なり、畫像にして口をき〻たりと言ふ所のものは蓋し斯の如きものならずんばあるべからざるなり。神靈に觸れ神靈に感じて、あら有難たや、あら尊ふとやと心根に銘じ信心全身に充滿したる時に際して畫きたる神靈の肖像こそ即ち見る者をして必らず崇拜心を發せしめんとするの神像なるべけれ、蓋し美人を畫くは此の一法あるのみなり、神佛を畫くも亦此の一法あるのみなり、斯の如くにして、特に斯の如くにして始めて能く眞に高尚なる想像畫を畫き出すを得べきなり。

西洋の想像畫

チイブルスのサンタ、キャラの寺院に存在するジオットの作に係る麵包と魚の奇蹟の大畫はチイブルス「フランシスコ」會の施行の精神を示さんとせしものにあらずや、實有の美人に依らずんばラフェエルもマッデレナ、ストロッチの如き美人の肖像を畫き出すことは出來ざりしならん、實に彼のラフェエルの「シスクイン、マドンナ」の如きはピッチ及びパルベリニの宮殿に保藏せらるゝ所のラフェエルの愛妾の肖像なりと謂ひ傳ふるものに大いに似たる所ありて、其美人こそは則ち彼の「マドンナ」の手本なりしと謂はるゝものにあらずや。コルレッジオの優秀なる童貞聖子の三大繪畫の如きは、何れも皆家内妻子の情況を描出したる者なりと謂ふにあらずや、又其聖女カテリンの婚姻と題したる畫の如きは其姉妹の婚姻を描出せるものなりと謂ふの說あり、既往諸家の流儀のみを墨守するを爲さずして一機軸

を出だして專心景色と肖像とを畫きて新奇なる感情に訴へ更に優美なる快樂の道を開きたるチシアン其人は、連峯雲に聳え巉岩突兀として蒼天も近く强風時に起り莊嚴なる天景に富みたるアルプス山中に生れたる者にして、思想高尚文化隆盛觀る者聞く者として善畫し美畫せるヴェニスに於て成人したる者にあらずや、而して其畫く所の神の宴會と稱したる畫の如きはその生れ故郷なるカドールより借りたる景色と城郭とを以て完全せしめたる者なりと謂ふにあらずや、ラスキン曰く、「ラフェエルの「マドンナ」はウルビノ山中に生れたるものなり、ギルランダジョの「マドンナ」はフロレンス人なり、ベルリニの「マドンナ」はヴェニス人なり、此等大名人は一人として「マドンナ」をジェデヤ人として畫かんとしたるの企てを顯はさざるなり。

ラスキン氏の名言

又曰く、「若し英國の畫人にして英國今日の貴族院を基ねとして歴史上の人物を畫くことを知らざる者は歴史を畫くことは出來ざるものなり、十九世紀の英吉利娘を基ねとして「マドンナ」を畫くことを知らざる英國の畫人は苟くも「マドンナ」を畫かんことは決して出來ざる所ならん、此れ實に予の熱心に明言する所なり」と、想像物も必らず眞物に依らずんばあるべからざるなり、純粹なる想像物は畫人自らも

想像畫も眞物に依らざるべからず

信ずること能はざるものなり、自ら信ずること能はざるものを他人をして信ぜしむることは固より出來ざるなり、今の畫を畫くものは寫眞の如くに實物の眞影を摸寫せんとするにあらざるよりは、少しも眞物によらざるの想像物を畫かんとして汲々たるの流弊を免かれざる者なり、眞物の摸寫は尙ほ見るべしと雖も、空想の繪畫に至りては全く取る所なきものなり、眞物によらざるの想像畫は我れ之を見て感服すること能はざるものなり、如何でか他人の感賞を得る事を得んや、古今名人の想像畫は一として眞物に依らざるものなきことを知らずして一意に空想を畫かんとするは今日の流弊なり。

眞物に依るべし眞物なるを要せず

眞物に依るべし眞物に依らざるべからずと雖も、固より眞物の畫なるを要せざるなり、否、眞物の畫は眞の畫には非らざるなり、畫は眞物によつて更に高尚なる想像を描出したる者ならずんばあるべからざるなり、畫は實體として外界に存在するの現象を描寫したる者なるを要せざるなり、當時我れも人も外界に存在する者なりと想像する所の現像を眞物に基いて製出したる者なるを要するなり、畫人は、他人が其心中に漠然存在するも如何にして表發すべきか如何にして之を判明の現象と

我も人も信じ得る者を畫くべし

爲すべきかを知らざる如き高尚優美なる想像を、判明確實なる者として畫に於て表發せしむるを知る者たるべきなり。畫人は、我れも信じ人も信じ得る者を畫かずんばあらざるなり。龍を畫く者は眞に龍ありと信せずんばあるべからざるなり龍を畫いて喝采を得んか、之を畫く者も之を看る者も眞に龍ありと信ずる者ならずんばあるべからざるなり、地獄を畫いて喝采を得んか、之を畫く者も之を看る者も實體的の地獄ありと信せずんばあるべからざるなり、僧神を畫いて喝采を得んか、之を畫く者も之を看る者も雷神ある事を信せずんばあるべからざるなり、極樂を畫いて喝采を得んか、之を畫く者も之を看る者も實體的の極樂ありと信せずんばあるべからざるなり、幽靈を畫いて喝采を得んか、之を畫く者も之を看る者も幽靈ありと信せずんばあるべからざるなり、自ら信せざる現象は畫く可からざるなり、自から信せざる者を畫いて喝采を得んとするは愚の至りと謂はざるべからず、自ら信せざる者を畫いて人をして之を信せしめんとするは、モッケリーの至りなり。古來龍を畫き雷神を畫き、地獄を畫き、天人を畫きて喝采を得たるは、畫く者も之を信じ、看る者も之を信じたるが故なり、之を畫ける者は人よりは高尚豐富なる想像を有し、人より巧に之を表發するの道を會得して當時世人の信心を滿足せしめ當

情機衝動せられたる時に非らずんば畫くべからず

風繪の日の出と同樣のもの

時世人の感情に訴ふる事を知りたる者にあらざるはなし、即ち畫は眞物によつて而して眞の想像を表發したる者ならずんばあるべからざるなり。

情機衝動せられたる時に非らずんば畫くべからず

今の畫人は日の出を畫かんと欲して日の出を眺めて而して之を描寫するものなり、今の畫人は神社を畫がんと欲して神社に到り精しく之を點檢して細かに其諸部を模寫するものなり、然り而して其日の出は則ち一個の日の出に過ぎざるなり、多量の繪具と多量の時間とを費したるにも拘はらず風繪の日の出と少しも擇ぶ所なきものなり、神社の繪は則ち神社の繪に過ぎざるなり、貴重なる時間と高價なる繪具とを多量に費やして細かに寫影したるにも拘はらず一個彩色したる寫眞畫に異ならざるなり、何故に其日の出は風繪の日の出と擇らむ所なきか、只その外形を寫したるものに過ぎざればなり、何故に其神社の繪は彩色したる寫眞畫に異ならざるか、畫人の目に映りたる所を其儘畫きたるものに過ぎざればなり。彼の想像畫と稱するものゝ如きも亦同樣のものに過ぎざるなり、今の想像畫と稱するものは大約線と彩色とを程々に分配したるものに過ぎざるなり、看る人をして苟も感動せしむるが如き點は分厘も有せざるなり。彼の摸寫畫たり想像畫たる、何故に

日の出日の入等を畫くべき時機

今日の畫は裝飾畫に過ぎざるもの多し

斯く無味なるものなるや、何故に斯く感動せしむるの力なきものなるや、蓋し之を畫ける者、其感動せる情緒を表發せるにあらずして、只物の形を表はし、想像なきに只線を陳ね彩色を分配せるものなるが故なり。畫人が自ら嗚呼壯觀なり嗚呼高尚なりと感激の餘りに畫きたるの日の出にあらずんば日の出の畫にして人を感動せしむることは出來ざるならん、畫人が自ら嗚呼美觀なり嗚呼神妙なりと感動の餘りに畫きたるの日の入りに非らずんば日の入りの繪にして人を感動せしむることは出來ざるならん、眞に天人を信じ眞に目に天人を見んとする如き畫人にして畫きたるの天人にあらずんば見る者を感動せしむるが如き天人を畫かんことは出來ざるならん、山を畫くもよし、瀑布を畫くもよし、日を畫くもよし、月を畫くもよし、然れども之を畫くや之を見て感動の情胸裡に迫まりたる時に於て始めてすべきなり、之を畫かん爲めに殊更に之を眺めて僅かに其形を寫すが如きことは決して爲すべからざる所なり、我れ自ら信じて人も亦信ずべし、我れ自ら感動して人も亦感動すべし、線を寄せ彩色を分配して僅かに形のみを畫きたるの畫は裝飾畫に過ぎざるなり、眞の美術畫には非らざるなり、今の繪畫にして裝飾畫に非らざる者は將た幾許ありや、畫人は信ずる所あつて始めて畫くことを努めよ、感動する所あつて始めて畫くことを努めよ、「インスピレーション」を得て始めて畫くことを努めよ、我れ眞に龍なりと思ひ得る如きものを畫き出すに非らずんば人をして龍なりと思はしむることは出來ざるなり、我れ眞に龍なりと思ひ得るごときものを畫き得るにあらざるものは龍を畫くを止めよ、我れ眞に觀音なりと信じ得る如きものを畫き出すに非らずんば人をして觀音なりと思はしむることは出來ざるなり、我れ眞に觀音なりと思ひ得る如きものを畫き得るにあらざる者は觀音を畫くを止めよ、我れ崇拜せざるを得ざるが如き觀音を畫くに非らずんば人をして之を崇拜せしむることは決して出來ざるなり、富士山は壯觀なり、然れども其壯觀の爲めに眞に感動せられたるものに非らざるよりは富士山を畫くを止めよ、只これは富士山なり、富士山の畫を畫かんと富士山を眺めて畫きたるの富士山は人をして感動せしむること能はざるものなり、人をして眞に富士山に接したるの感情を起さしむることは決して出來ざるものなり、世間無數の富士山豈淺草紙張の富士山に過ぎざるものにあらずや、勇者に觸れて自ら其勇に感動せしことなき者は勇者を畫きて人を感動せしむることは出來ざるなり、名僧に接して其德に感じたる者に非らざるよりは名僧を畫きて人を感動せしむることは出來ざるなり。

何人も自ら感激し而して人を感激せしむるを得べし

此理は特り繪畫上に止まるものには非らざるなり、詩人なれ僧侶なれ、救世者なれ、革命者なれ、演說家なれ、役者なれ、能く人を感動せしむる者は、能く人心を靡排せしむる者は、自ら大いに感動し身に神靈の充滿したる如きものならずんばあるべからざるなり。彼の名優を見よ、彼れは自ら泣いて而して人を泣かしめ、自ら怒つて人を怒らしめ、自ら憂ひて而して人を憂へさするにあらずや。彼のデモスセニースは何んの爲めに彼れの如く一世の人心を激昂するを得たるや、何んの爲めに希臘人をして飽くまでマセドンのフィリップに抵抗せんと決心せしむるを得たるや、これ他なきなり、彼れは自ら激動したるが故によく他人を激動せしむることを得たるなり彼れは自らフィリップの暴戾を惡みたるが故に他人をして復た之を惡ましむることを得たるなり、全身慈愛を以て成り立ちたりとも謂ふべき彼の釋迦の如き、彼の耶蘇の如きものにして始めてよく世の救世者たることを得べきなり全身炎火を以て成り立ちたるマホメットにして單身身を起して暫時に天下を靡排するを得べきなり、彼のダンテーの「デヴァイン、コメデー」に於ける、ミルトンの「パラダイス、ロスト」に於ける、作者自ら大いに感激せし所あつて而して之を著はしたるものなるが故に其書は則ち當時天下の人心を大に感動せしめたるのみならず今日に於ても尙ほ世人の一般に愛讀する所なるなり。バンヅデンは英國革命の初發に於て不幸にも討死したり、然れども其の一呼は英國人民を喚起して終に革命を遂げしめたるは彼れの全身は自由の精神を以て充滿したるものなりしが故なり。

釋迦耶蘇

ジョン、ブラウンはハーパルス、フェリーに於て狂人に等しき擧動をなして遂に果敢なき最期を遂ぐるに至れりと雖も、彼れは則ち南北戰爭に始めて火を附けたる者にあらずや、是れ偏に其熱心の然らしめし所なり、彼れの熱心は則ち奴隸の鐵鎖を燒き切るの熱度なりし者なり。リューテル新敎主義を說いて羅馬法王をして忽に信徒の一半を失はしむるに至りたるは、其熱心たる肉眼惡魔を目擊してこれと戰へる程のものなりしが故なり。南洲翁一たび起立するに當つてや全國の志士誰あつて其馭尾に從はんとせざるなく、勤王の主義始めて確固當たるべからず、開闢已來二千五百餘年にして始めて眞に海內一致するに到りたるは、翁の全身は正義より成り立ち身に分毫の私心なかりしが爲めなり、翁の赤心は天下をして私心を忘れ正義これあることを悟らしめたるの故に非らずや。凡そ世を救ひたる者、革命を卒へたる者は、國の東西を問はず時の古今を論せず、自ら深く信ずる所あつて而して人を信せしめし者なり、自ら强く感動したる所あつて而して人を强く感動せ

南洲翁

親鸞日蓮

しめたる者なり、親鸞たり、日蓮たり、クロンウェルたりルソーたり、其說く所は何なるも、其與かる所は何なるも、何れも皆自ら深く信じて而して人を信せしめたるものなり、自ら强く感動して而して人を感動せしめたるものなり、左れば今の繪畫を畫く者、こゝに注意せずんばあるべからざるなり、彼のホルベインの如く、死の想像强き者に非らずんば死を畫いて人を感動せしむることは出來ざるなり、彼のミケルアンジェロの如く、壯嚴なる思想を以て全身充滿したる者に非らずんば彼れの如く壯嚴なるものを畫いて人をして壯嚴なる情を起さしむることは出來ざるなり、彼のラフィエルの如く、全身優美高尙なる情を以て成り立ちたる者にあらずんば其畫く所にして人をして優美高尙なる情を起さしむることは決して出來ざるなり。

畫題の變遷

古昔は宗敎畫多し

畫題の變遷

凡そ畫題には宗敎的のものあり、天然的のものあり、歷史的のものあり、肖像的のものあり、人事的のものあり。而して美術的の繪畫に就いて言へば、太古に行はれたる畫題中最も多きものは宗敎的のものなり、次に行はれたる畫題中最も多きものは歷史的天然的肖像的のものなり、人事的の畫題の如きは蓋し最後に最も多く行はるゝものなり。希臘には隨分早くより歷史的の畫題ありたる由なれども、太古の繪畫は多くは「ジュピター」「ヘルキュリース」「ヘイデース」等の如き鬼神若しくは幽界等の畫なりしが如し、漸く世の開くるに從つて次第に多く歷史的幷びに天然的のものを畫くに至りたるものゝ如し、即ち歷史的の畫題に於てはポリグノータスの如くトロイ戰爭の如き事を畫くもの增加するに至れり、パニーアスの如くマラソン大合戰の如きものを畫くもの增加するに至れり、ミコンの如くアセン人と「アマゾン」との戰爭の如きものを畫くもの增加するに至れり、天然的及び人物的等の畫題に於てはジューキシスの如く葡萄の畫の如きものを畫くもの增加するに至れり、バルラシュスの如くアセン人民の畫アセン王の畫ユリシースの畫乳母の畫等の如きものを畫く者增加するに至れり、パウシアスの如く兒童の畫牛の畫花の畫等の如きものを畫く者增加するに至れり。又耶蘇敎社會に於ては紀元後初時代の繪畫は大率宗敎的のものなりしのみならず、暗黑時代を經過して、繪畫の名人漸く顯はれて繪畫の術始めて復再興するに當つてや、其畫題は大率皆宗敎的のものに過ぎざりしなり、ギドーの如きシマブーの如きジオットの如きアンジェリコの如きマサッチオの如きリッピ父子の如きコシモ、ロセルリの如きベノッゾ、ゴッゾリの如

希臘

耶蘇敎社會に於ても最初は宗敎畫多かりしなり

きドメニコ、コルラヂの如きベロッチオの如きビエトロ、ペリュジノの如きフランチャ父子の如きロレンゾ、コスタの如きマンテグナの如きコシモ、チュラの如きエルコール、グランヂの如きアントニオの如きバルトロメオの如きジオヴァンニ、ベルリニの如きミケル、アンジェロの如きレオナルド、ダ、ヴィンチの如きラフェエルの如き、何れも皆其專ら畫きたる所は宗教畫に非らざるはなし、何れも皆上帝の畫に非らざるはなし、耶蘇の畫に非らざるはなし、童貞の畫に非るはなし、惡魔の畫に非らざるはなし、極樂の畫にあらずんば地獄の畫に非らざるはなし。蓋し天然物を畫くことは專らジオルジオネに起りてチシヤンに至つて始めて大いに發達せりと謂ふなり、チシヤンはラフェエル、ミケル、アンジェロ等と同時代の畫人にして、彼等と均しく宗教畫を畫きたることも多くありたれども、其最も注意せるは寫影と肖像なりしが如し天然を能く描寫するの點に於ては伊太利の大畫人中チシヤンの右に出でたる者は有らざるべしといふ、其畫ける所は、歷史的なるも、他の記實なるも、常に天然を手本として畫けりといふなり、而して其後の畫人に在ては苟しくも大家名人と稱せらるゝ者の中には彼のレムブラント及びルーベンス等の如く職として景色のみを畫ける者尠なからざりしなり、ルーベンスの門人中最も高名

景色人物等の畫始めて大に興る

なりしヴァンダイクの如きは職として歷史と肖像とを畫きし者なり、然り而して景色畫はそれよりフランドルス及び和蘭に於て大いに發達したるなり、又壯大なる景色の畫の如きは普露西に於て頗る發達せる所なり、ニコラス、プーッシンこれを創めガスパー、プーッシンこれに次げり、又クロード、ロルレインの如きは朝日と夕日とを巧に色どりて流るゝ水そよめく木の葉を優美に畫くことを始めたるものなり。

日本に於ても最初は宗教畫多かりしなり

斯の如く、太古希臘に於ても、其後耶蘇教社會に於ても、最初畫人の專ら畫ける所は宗教的の畫にして、世の漸やく開くるに從つて次第に天然的歷史的等の畫題を畫くに至れるが如し、是れを本朝畫史に徵するに、又これと同樣の變遷ありたるが如し。太古支那人朝鮮人の吾邦に移住せる者の畫は言ふも更なり、本邦畫人の最も古き名人、小野の篁は佛像を畫くこと神に至り、巨勢金岡は鴻儒聖賢の形像を多く畫けりと雖も、其最も精はしきは佛像を畫くにありたりといふ、其專ら畫けるは淨土曼陀羅、藥師如來、毘沙門天、阿彌陀三尊等の畫なりしなり。金岡の子相見の如きも、竹取翁の事實の如きものを畫きしことありと雖も、金岡と同じく佛像を畫くことに巧にして、其專ら畫けるは天人の羅漢、瀧見觀音、彌陀、文殊、愛染明王等の如き畫なり

しなり。相見の子公忠、公忠の弟公望、公望の子弘高の如きも、或は相撲の畫或は草木の畫或は人物の畫等を畫けるは勿論なれども、動ともすれば愛染明王の如きものを畫きたり、動ともすれば地獄變相の如きものを畫きたり、動ともすれば不動尊千體の如き者を畫きしなり。夫より數世を經て有家有康等に至りても、尙ほ十六羅漢、地藏緣起離宮八幡圖小島荒神等の如き宗敎畫を多く畫きしなり。又金岡以下の巨勢家支流の畫人に在つても、元慶の如く、源尊の如く、行忠の如く、越後法眼の如く、佛像を畫くことに長じて曼陀羅の圖を成すを勉めし如きもの尠なからざりしなり。彼の惟久の如きは、己れの得意とせし所は武者の畫なりしも、尙ほ且つ如來、荒神、辨財天の如き者を畫きしなり。爲氏已下宅磨家畫人の如きも、大率皆佛像を畫くに巧にして、其畫ける所は地藏尊、阿彌陀佛、羅漢、毘沙門、不動尊、觀音、布袋の類多かりしなり。其支流に至りても大率之と同樣なりしなり、降つて永享以後と雖も、芝家の畫人の如きは皆專ら佛畫を畫ける者なり。蓋し古き畫人にして宗敎畫を專らとせざりしは、職として土佐家の畫人なりしなり、基光の如き、隆能の如き、隆親の如き、光長の如き、經隆の如き、邦隆の如き、長隆の如き、吉光の如き、何れも皆山水、建築、人事、人物、鳥獸草木等を畫く事に長じたる者なり、然れども皆また佛を畫く事にも巧なりし者なり、即ち基光は山水、相撲、人形等の畫を善せしと雖も、亦佛畫を巧にせし者なり、隆能は殿閣人物を畫くに妙を得たりと雖も、亦佛畫に巧なりし者なり、光長は人形、家臺、草木、鳥獸等を畫くことに長じたりと雖も亦佛畫を畫くことに巧なりし者なり、長隆は歷史物語等の畫を善くしたりと雖も亦佛畫を巧にせし者なり、吉光は人物畫傳等を畫くに妙を得たりと雖も亦佛畫を巧にせし者なり。また古き畫人にして住吉慶恩の如く景色繪傳等の雜畫を畫きたる者あり、信實の如く人物物語等の畫を多く畫きたる者あり、啓書記兆殿司の如く山水人物等をも大いに畫きたる者あり、然れども皆兼て大いに佛畫を畫きたるのみならず、往々其最も長じたるは佛畫を畫くに在りたり。是に由て之を觀るに、他家の畫人はいふもさらなり、土佐家の畫人の如く最初より常に歷史的、天然的、人物的、人事的等の畫を巧にせし者と雖も傍はら佛畫をも多く畫かざりし者は始んど無かりしなり、而して足利の中葉如雪、周文、宗丹、能阿彌、藝阿彌、相阿彌等よりして雪舟、秋月、光信、元信等の畫人に至りて始めて佛畫は大いに廢たれて皆競ふて花鳥山水、歷史人物、草木龍虎等を畫いて互に其技倆を顯はさんとするに至れるなり。

花鳥山水等の畫初めて大に興る

何故に何れの國にも

何故に希臘に於ても耶蘇敎社會に於ても日本に於ても最初行はれたる繪畫は何

於て最も初は宗教畫多かりしや

れも多くは宗教畫にして歴史的、天然的、人事的等の畫は稍〻後の世に至りて始めて大いに行はるゝに至りたるか、是れ素より明らかなる理由あることなり。夫れ太古に在つて人の最も大切と思ひたるものは神佛に外ならざるなり、太古に在つて最も飾るべき建築は即ち神社佛閣に外ならざるなり、太古に在つて人の最も貴重するの畫は神佛の畫に外ならざるなり、太古に在つて人の感情を最も滿足せしむるの畫は神佛の畫に外ならざるなり、神佛の畫は當時人のこれを崇拜する所なり、神佛の事は當時人の何よりも注意する所なり、左れば當時に在つては宗教畫の必要最も多かりしなり、宗教畫の需要最も盛んなりしなり、曼陀羅は必要なり、藥師如來の畫は必要なり、地藏尊の畫は必要なり、毘沙門天の畫は必要なり、阿彌陀佛の畫は必要なり、是等は皆當時破竹の勢なりし佛教の爲めに必要なりしものなり、或は寺院の依頼によりて之を畫くものあり、或は罪障消滅の爲めに之を畫くものあり、或は王公貴人の命によりて之を畫くものあり、夫れ當時の畫人たる、王公の爲めに使役せらるゝの役人なるか、然らざれば僧侶の爲めに使役せらるゝ傭人同樣のものなり、ラフエル、ヴィンチ、ミケル、アンジェロ等は共に甚だ見識ありたるの畫人なりしと雖も、常に法王の爲めに種々の方法を以て驅り立てられて寺院禮拜堂等の飾りの爲に技倆を顯はすことに汲々たりしなり、本邦畫人の如きは土佐家なれ巨勢家なれ狩野家なれ皆治者の臣下にして其爲に常に使役せられざるは無かりしなり。故に當時宗教の思想のみ盛んなりし時に際しては、畫人は宗教畫を專ら畫かざるを得ざるのみならず、畫人自らも宗教畫によつて技倆を顯はさんと一途に思込まざりし者は甚だ稀なりしなるべし。希臘に於ては、最初より耶蘇教社會及日本等の如く宗教畫盛んに行はれずして、歴史的天然的等の畫の割合に多く行はれたるは、希臘の如きは畫人の名人の出でたる時に際しては既に昔の耶蘇教社會の如く昔の日本社會の如く宗教思想の盛んならんが故ならん。左れば最初斯の如く宗教思想のみ盛んなりし社會と雖も、次第に開明に趣きて、人事は繁劇になり、歴史上の事件は增加し、人物は尊大になり、天然には注意するに至りて、始めて追々と宗教的の者のみを畫くの風薄らぎて、或は歴史的の畫を畫く者あるに至り、或は肖像を畫く者あるに至り、或は花鳥山水を畫く者あるに至り、或は人事を畫く者あるに至るなり。大將は我が勝利を得たる合戰の畫を畫かせんと欲し、王公は我が肖像を畫かせんと欲し、宮殿は繪畫を以て其内部を飾る事必要となれり。左れば畫題の變遷は必らず時勢の變遷に伴なはずんばあるべからざるなり、畫題の變遷は必らず

衆色人物の畫次第に多くなる理由

内外情勢の異同に應せずんばあらざるなり、何れの國何れの時代を論せず、世に行はるゝの畫題は當時世人の最も注意し當時世人の感情に最も關係を有する所の事物たらずんばあるべからざるなり、若し斯の如くならざる者を畫くに於ては、決して名作は出來ざるなり、決して自分を滿足せしめ世人を感動せしむる如き畫を畫く事は出來ざるなり、蓋し當時世人の注意せざる事物、當時世人の感情に關係なき事物は、畫人自らに於ても注意せざるものなればなり、畫人自らの感情にも關係なきものなればなり。

希臘の美術品に裸體人物の多きかりしし原因

此理は、特に何故に何れの國に於ても最初に在つては宗教畫のみ多く行はれて天然的人事的等の畫は後世の事なりしやと謂ふ如き大體の問ひに答へ得べきものなるのみならず、何故に此の國には人物畫が流行り、何故に彼の國には山水畫が流行り、何故に此の時代には花鳥畫が流行り、何故に彼の時代には人事畫が流行れるかといふ如き細かなる問ひにも答ふるを得るものなり。爰に一例を擧て之を論せん、何故に日本の畫には花鳥山水を畫けるもの多く、希臘の美術品には人物を、殊に裸體人物を表出せるもの多かりしや、蓋し何故に希臘の美術上に於ては裸體の人物著るしき部分を占めたりしやと謂ふの問ひに答へんと欲する者の能く注意せずんばあるべからざる事情あり、抑も希臘人は古昔の人民には珍らしく自覺心即ち「セルフ、コンスシオスネス」(self-con-sciousness)に富めるものにして、則ち人類を以て此上もなき大切のものと認め、人體を以て靈妙崇敬すべき美觀のものとなし、良き體格を見れば則ちこれを崇拜せざる計りに感賞せるなり。ホーメルの詩中ユリシーズ以下勇士の體格を形容せる條の如きは、讀者と雖も共に其心にならしめんとするものなり、而して彼の四年目毎に執行せる「オリンピッキ、ゲイム」と稱する國家的競爭遊戯の如きは、希臘人の體格を完全せしむるに最も有効なりしものにして、希臘人をして善良なる體格を殆んど崇拜せしめんとしたる程の影響ありしものなり、此の競爭に於て優秀なる體格を示し、此の競爭に於て勝利を得んことは希臘人の最も名譽としたる所なり、此の競爭に於て勇士の體格を見るは、勇士の勝負を見るは、希臘人民の最も熱心に喜べる所なり、希臘は古今に稀なる人民國なりしなり、而して其人民の一般に見て最も喜び一般に見て最も感情を動かさしめたるものは此の競爭場に於て見る所の優秀なる體格、非凡なる力量早業に外ならざりしなり。當時希臘の美術家にして其作を以て世人の感情を動かさんと欲したるものは、優秀なる體格、非凡なる力量早業等の狀勢を表出せずんばあらざりしなり。斯の

日本の美術品に裸體人物少なき理由

如く一般希臘人の感情に訴へ得べき事物は他には有らざりしなり、是れ希臘の美術家をして多く裸體の人物を表出せしめたる一大原因なるが如し。顧みて吾邦美術品を觀るに、彫刻と繪畫とを問はず裸體の人物を表出したるものは二王の外には稀に見る所なり、是れ本邦には希臘の如く人體を崇敬するの情尠なかりしこと、希臘の如く優秀なる體格非凡なる力量早業を目擊して感動するの機會あらざりしこと、本邦には優美なる花鳥絶妙なる景色全國到る所に存在して人の心を奪ひたること、佛敎は人心をして凡俗を離れて花鳥山水を樂しましむるの傾向あること、儒敎は人を風雅に導き仙骨を帶びしめ清風明月の間に遊ばしめんとするの性質なること、吾邦の美術品は希臘の美術品の如く一般人民の爲めに作りたるものに非らずして斯の如き傾向の佛敎斯の如き性質の儒敎の敎育を受けたる僅少なる王公貴人の爲めに作りたるものなること、吾邦掛物の如く家内裝飾を專ら目的とするの畫に在つては花鳥山水の如き畫題最も適したるものなること、是等諸般の事情は本邦の畫人並びに本邦の畫人を使役したる人をして常に最も花鳥山水に注意せしめ常に最も花鳥山水を樂しましめたる所以なり、これ則ち本邦畫人の多く之を畫きたる原因なるが如し以上は即ち本邦畫題變遷の一斑を窺へるものなり。

畫題は當時人の最も注意する事物を擇ぶべしを

畫題選擇に關する心得

畫題選擇に關して吾人の心得べきことあり、第一、畫題は當時人の最も注意する所の事物を擇むべき事、第二、畫題は苟くも畫人の感情を動かしたるものに非らずんば取るべからざること、則ち是れなり。而して今の畫人を見るに、この二則には全く無頓着なるものゝ如し、左れば其畫く所は人をして感動せしむること能はざるなり、左れば其畫く所は決して名畫なること能はざるなり、今の畫人は畫題に變遷あることを知らざる者なり、今の畫人は今日に於ては既に不適當となりたる事を知らずして尙ほ舊來の畫題を畫かんと企つるものなり。何故に古昔の畫人は神佛の名畫を多く畫き得たるや、古昔の畫人は自ら宗敎心強くして眞に神佛を信せしものなればなり、古昔の畫人の如く宗敎心強くして眞に神佛を信じたる者は宜しく神佛の畫を畫くべきなり、今の畫人の如く宗敎心薄くして神佛を信ぜざるものは神佛を畫くを止めよ、若しこれをして神佛を畫かしむるも決して見る者をして感動せしむることは出來ざるなり、龍を信ぜず觀音を信ぜずして觀音の龍に乘るの畫を畫かんか、其畫く所は見る人をして觀音の龍に乘るの畫とは思はしむる能は

畫題は畫人の心を感動せしめたるべきを取るべし

今日に在ては不適當の畫題

今日の畫題は人事的のものたるべし

ずして、松明のあかりにてチヤリネの女が綱渡をするの畫なるやと疑はしむるなり、龍の如き鬼の如き佛の如き神の如き地獄の如き極樂の如きは今日に在ては既に不適當なる畫題となりたる者なり、今の畫人にして之を畫かんとする者は必らず失敗せずんばあるべからざるなり。夫れホーメルの時代あり、シェキスピーヤの時代あり、ヴェルジルの時代あり、ゲーテーの時代あり、ダンテーの時代あり、ロングフェローの時代あり、詩題なれ畫題なれ時勢に依つて變換せずんばあらざるなり。然らば今日に在つては如何なる畫題を以て適當のものと爲すべきや、蓋し今日に於て適當なる畫題は花鳥山水、禽獸人物、歴史人事等の數種に屬するものなるなり、蓋し花鳥山水禽獸等は今後と雖も尙ほ廣く行はるべきの畫題なり歴史的幷に肖像的の畫題は從前よりも多く行はれんとするものなり、然れども從前最も少なく行はれたる畫題にして今後最も行はるべきものは蓋し人事的の畫題即ち「ジェンル、サブジェクツ」(genre subjects) 即ち「デイリー、ライフ、サブジェクツ」なるが如し、今後一機軸を出ださんとするの畫人は必らず人事的の畫題を擇むべきなり、今後名畫と稱せらるゝものを畫くものは必らず人事的の畫題を擇むの畫人なるべし、今後の名畫は多くは人事的の畫題に拘はるものならんことは予の豫め前知して疑はざる所なり、花鳥、山水、禽獸等に屬するの畫題には際限あれども、肖像的幷に人事的の畫題には際限あらざるなり、而して肖像畫は寫眞に均しきものにして到底趣味多きこと能はざるものなり、眞に趣味ありて且つ際限なきの畫題は人事的のものより外には有らざるなり、將來世人の最も多く注意せんとするものは人事に外ならざるなり、花鳥、山水、禽獸等の畫題は大體古今一定の分量なれども人事的の畫題は世の進むに從つて日に月に益〻增加せんとする者なり、世の開け世の進むに從つて特り益〻錯雜繁多になるものは即ち人事なり、世の開け世の進むに從つて日に月に變遷萬化するものは即ち人事なり。太古に於て人の心を最も奪ひたるは宗教の事物なり中古に於て最も人の心を奪ひたるは天然の事物なり今世に於て最も多く人の心を奪はんとするものは即ち人事なり、則ち予輩人間の身上に關し予輩人間の幸福に關する所の現象なり。今や吾邦の如きも宗教的幷に天然的の時代を脫して將に人事的の時代に至らんとせられたる者は土佐家の畫人と浮世繪師とを除きては大概皆佛畫に非ざれは花鳥山水禽獸等を畫く事に丹誠を凝らせるなり、花鳥山水禽獸等は各派の名人の爲めに既に廣く畫かれたる所なり、花鳥、山水、禽獸等の畫を畫きて古畫の右に出でん

人事は日に月に多く短になるものなり

人事は日に月に變遷するものなり

花鳥山水等は大家名人の既に多く畫くける所なり

事は決して容易の業にはあらざるならん、今の畫人にして神佛、怪物等を畫かんとする者の如きは之を措て論ぜず、彼の花鳥、山水、禽獸等を畫かんとする者の如きも其辛苦思ひやらるゝなり、今の畫人にして鷹を畫がいて曾我直庵の右に出でんことは決して容易なる業にはあらざるならん、今の畫人にして山水を畫がいて雪舟、探幽の右に出でんことは決して容易の業にはあらざるならん、今の畫人にして魚鳥を畫がいて應擧の右に出でんことは決して容易なる業にはあらざるならん、今の畫人にして猿を畫がいて狙仙の右に出でんことは決して容易の業にはあらざるならん、花鳥、山水、禽獸等は既に大家名人の畫きたる所少なからざるなり、之を畫きて世を驚かさんことは決して容易の業には非らざるなり、然れども特り人事の畫に至りては未だ名人の畫ける所多からざるなり、今後の畫人にして名を後世に傳へんと欲するものは宜しく人事に關する畫題に就て畫くべきなり、然れども予輩の人事と稱するものは浮世繪者流の畫く如きものゝ謂ひには非らざるなり、又土佐家繪卷物の畫の如きものにも非らざるなり、予輩の人事畫と稱するものは他に一種あるなり。

今後の畫人は思想畫を描くべし

今後の繪畫は思想畫たるべし

畫は形狀を表するものあり、活動を表するものあり、情緒を表するものあり、思想を表するものあり、古來吾邦の繪畫たる大率皆形狀を表せるものなり、活動を表せるものなり、情緒を表せるものなり、思想を表せるものは至つて稀なり。歷史畫の如き、宗教畫の如き、想像的のものと雖ども、畫人の想像は專ら形狀に拘はるものなり、專ら活動の樣子に拘はるものなり、專ら單純なる情緒の表象に拘はるものなり、錯雜なる思想に拘はるものにはあらざるなり。佛を描かんか、印度の考に基きて慈悲溫順の表象を表はしたるものに過ぎざるなり、山水を畫かんか、雪舟、雪村、元信、探幽の如き大家名人と雖も支那の古式に倣つて形狀を表出し僅かに風韻と稱するものを加へたるに過ぎざるなり、鷹を畫かんか、其猛狀を表はすに過ぎざるなり、其覘射の狀を表はすに過ぎざるなり、合戰を畫かんか、劒を振り鎗を遣ひ、或は刺し或は射るの狀を表はすに過ぎざるなり、人事を畫かんか、花見の有樣營業の狀態等を描出するに過ぎざるなり、土佐家の人事畫は巧なりと謂へり、然れども之を褒むるものは火附けを捕ふるの狀態趣味あること火焰の眞に迫りたることを稱賛するの外に出ること能はざるなり。今日迄は吾邦の畫人は尙ほ感納的段階即ち「レセプチブ、ステイジ」(receptive stage)にあるものなり、未だ思想的段階即ち「コンセプチブ、ステイ

今日迄の畫人は感納的段階にあるも

のなり

今後の畫人は思想的段階に登らざるべからず

ジ(conceptive stage)には登らざるものなり、然れ共今後は勉めて思想的段階に登らずんばあるべからざるなり、之をなすにあらずんば吾邦の繪畫をして新面目を顯はさしむることは出來ざるなり、之を爲すにあらずんば明治の繪畫は徒らに舊來の繪畫を摸倣するものに過ぎざるなり。

思想畫とは果して如何

思想畫とは果して如何なる者の謂ひなるや、從前の繪畫の如く特に形狀を描出したる者の謂ひにはあらざるなり、從前の繪畫の如く特に活動を表出したる者の謂ひにはあらざるなり、從前の繪畫の如く特に單純なる情緒を表出したるものゝ謂ひにはあらざるなり、予の所謂思想畫とは即ち錯雜なる思想を含有したるものゝ謂ひなり、錯雜なる思想を表出したるものゝ謂ひなり。今一二の例に依つて具さに思想畫の何物たるを示さん。予輩は頃日鎌倉に於て予輩を甚だ感動せしめたるものを見たり、僅かに數尺の高さに過ぎざる一個の墓標なり、墓標は全く蔦の纏ふ所となりて恰も蔦を以て作りたるものゝ如き觀あるものなり、冷たき石も寒からざるの觀あるものなり、老朽せる墓石も常に青々たる形を存し居るなり、苔を以て掩はれたる臺石は時代の古きことを徵するに足るものなり、臺石に沿ふて其周圍にやさしき姿を成して咲き聯ねたる紫花地丁(スミレ)は妙なる首を振りて心有りげに點頭く

鎌倉の墓標畫題の一

日光と鎌倉

家康と頼朝

ぞ、衰れなる後ろには大なる常磐木あり茂れる枝葉は墓を衞りて雨露の爲めに犯さしめざるなり其後ろは山の側面なり墓を護して動かざるの勢あり遠く向ふを望めば松の並木の間より遙に見ゆる水の面あり見ゆるは僅かに一片の水面に過ぎざると雖ども是れぞ即ち渺茫として殆んど際限なき太平洋に外ならざるなり數尺の墓標後ろには動かざる山の控ゆるあり前には毫塵の障碍もあらざるなり、此れは是れ何ん人の墓なるぞ、伊豆の片隅より起りて旭將軍を粟津ヶ原に亡ぼして先づ源氏の一統を遂げ、平家を西海に沈めて終に海内を一統したる源頼朝の墓なり、日光に於ては僅かに三百年舊き「ヴェイン、ボンド、エンド、グローリー」のみを見るべきなり、鎌倉に於ては八百年の昔なる「ヲイチヴ、シンプリシチー」を見ることを得べし、家康は日光に於て廣大に眠るなり、頼朝は鎌倉に於て質素に眠るなり、然れども家康をして日光に於て斯く廣大に眠らしむるものは鎌倉に於て斯く質素に眠る頼朝に外ならざるなり、三百年以前に家康をして在らしめたるは八百年以前に頼朝のありたるが爲めなり、家康は實に古今無双の英雄なり、然れども其三百年以前に成就したる所は即ち頼朝の八百年以前に創めたる所に過ぎざるなり、諸君、頼朝の墓は畫題として描くべきの價値なきものなるや、深淵なる思想を含有する

秀吉病牀家康に對面の段の二題の二

秀吉の心中

の書を製出せしむるの資格なきものなるや予輩は書人に非らざるなり、予輩はこの問ひに答ふること能はざるものなり、諸君は書人なり、宜しく此の問に答へずんばあるべからざるなり。

秀吉が病牀に於て家康に後事を託したるの時は如何なる時なりしや、日本の天下は將に豐臣氏の手より德川氏の手へ遷らんとしたるの時にあらずや、天下何人か此際に於ける秀吉を憐まざるものあらんや、此際に於ける秀吉の心中は將た如何がなりしや、失敗は智者の最も恐るゝ所なり、而して朝鮮の失策は未だ其局を結ばざるなり、子を愛するの情は英雄と雖も同じことなり、家の永存を願ふは何ん人も異なる所なし、秀頼の暗愚ならんことは秀吉の患ふる所なり、家康の豐臣氏に於けること秀吉の織田氏に於けるが如くならんことは秀吉の恐るゝ所なり、家康の正義は秀吉素より之を知れり、然れども家康は小義の爲めに大義を誤まるものにあらざることも亦秀吉の知れる所なり、家康は秀吉の最も恐るゝ所なり、然れども天下を託すべき者は特り家康あるのみなり、秀頼の爲めを思はんか、豐臣氏の事を思はんか、家康に先だつは秀吉の成佛する能はざる所なり、天下の爲めを思はんか、萬民の爲を思はんか秀吉をして能く成佛せしめ得る者は特り家康あるのみなり、秀吉も一大丈夫なり古今無双の智者なり、秀頼果して暗愚ならば天下を豐臣氏に返へすに及ばずとは是れ則ち秀吉の赤心なり、秀吉も人なり死期に臨んで素より慽む所なくんばあらざるなり、然れども亦大いに安んずる所ありしならん、又當時家康の心中は如何がなりしや、家康は秀吉の爲めに今秀頼を託せらるゝものなり、豐臣氏を託せらるゝものなり、天下を託せらるゝものなり、秀吉にして秀頼の事を、豐臣氏の事を家康に託するは素より良し、然れども天下を託するに至つては少しも其必要なきものなり、家康の天下を思ふ素より人に託せらるゝことを待たざるなり、家康の眼中秀頼も無し豐臣氏も無し、唯特り天下あるのみなり、唯特り萬民あるのみなり、家康は素より秀吉を憐まずんばあるべからざるなり、然れども天下の爲めには豈悅べる情なしとせざらんや、秀頼暗愚ならば豐臣氏に天下を返へさざることは家康の最初より疑はざりし所ならん、否、天下の罪て豐臣氏の物なりしことは家康に於て決して知らざる所なり、天下は一人の天下にあらず天下の人の天下なりとは家康の深く信じて疑はざる所なり、秀吉にして家康に天下を託することを語るは「モッケリー」に過ぎざるなり、天下は既に業に豐臣氏の有よりは寧ろ德川氏の有にあらずや、天下已に家康に日本を託せるにあらずや、何んぞ秀吉の之を託す

家康の心中

探幽筆家康の肖像

るを要せんや、予は世間に傳播する所の家康の肖像即ち新選文部省讀本にも載せたる所の家康の肖像を看て眞に家康の肖像なりとは常に信ずること能はざりしなり、然るに昨年東京市三百年祭の時に際して探幽の畫ける家康の肖像を看たり、實に家康の肖像といふべきものなり、實に英雄の相貌を表したるものといふべきなり、實に正義の爲めには毫厘も動かざるの堅固を表したるものなり、實に小牧山合戰の度量を表したるものと謂ふべきなり、本邦歷史上の事實にして擇んで以て畫題とすべきものは尠なからざるなり、然れども秀吉病牀家康と對面の段の如きものは決して多からざるなり、是れ畫人の丹誠を凝らすべき畫題にはあらざるか、此れは是れ高尚なる思想を表出せしめ得るの畫題にはあらざるか、予輩は畫人には非らざるなり、此の問ひに答ふること能はざるものなり、諸君は畫人なり、宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

痩馬重荷を挽ひて惡路に苦しむ畫題の三

美に新たに土を盛り砂利を敷きて作りたる一ト筋の細道あり、土は堅たからず、砂利は多からず、節々挽き來たる車の齒の爲めに忽ちに二タ筋の深き溝を生じたり、往く車として其溝の中へ齒を挽き込まざるはなし、重き荷の車は往くこと極めて難儀なり、此に煉瓦石を積みたる一輛の荷車あり、其齒は深く溝の中にはまれり、馬方は頻りにいら立ちて馬を遣らんとせり、痩馬は只困しむことを知るのみなり、是に於て馬方は力に任せて牽き綱を引きこづけり、馬は鬣を振り亂し目を血走らして頭を後ろへ振りあげたり、此時他の一人の馬方あり、大いなる敷板を持ち來り、前なる馬方が牽き綱を引きこづかんとするの途端に馬の尻を打たんとして勢ひ込んで敷板を振り上げたり、予輩にして畫人ならしめば描いて以て深き思想を表出せんとするの畫題なり、此れは是れ採るに足るべきの畫題なるや、予輩は畫人に非らざるなり、此の問題に答ふること能はざる者なり、諸君は畫人なり、宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

大森の晩景車夫の最期畫題の四

某年某日、頃は秋の末つ方、時は黃昏、所は大森の「ステイション」瓦車の來るを待つ折柄、二人の客を乘せたる車、息せき切つて挽き來る車夫「ステイション」に着きたり客は下りたり、車夫は賃錢を請取らんとして手を出だせり、時に心臟の破裂せるにや錢を請取らんとして手を伸したる儘棍棒の上にどうと倒れて絶命したり、二人の客は外國人なり、賃錢さへ拂へば用はなし、車夫の死したるは素より與かる所に非らざるなり、跡をも見ずして早足に立去れり、「ステイション」に居合せたる他の車夫どもは驚きて死人の周圍に集りたり、時に一人の老人ホト〳〵として歩み來れり、

兩國橋上惡魔と天使の題畫の五

群集せる車夫どもは老人の來るを見て互に面を見合せ低語き乍ら道をあけたり、老人は死人を見て只茫然たる計りなり、是れなん杖とも柱とも憑みたる子に突然死なれたる親なり、諸君今こゝに見る者は如何なるものなるや、親を哺まんが爲めに務めをなして命を捨てたる男子は死して其處に横たはれり、命を捨て取り得たる賃錢は頭の邊に散亂してあり、無情なる乘客の後ろ影は尚ほ遠くに見ゆるなり、天下にも替へ難き一人の子に遽かに別れて途方に暮れたる老人なり、鬼ならぬ車夫どもの死人の孝行を褒め老人の不幸を憐みて低語くもの亦其所にあり、諸君、此れは是れ深淵なる思想を表出し得るの畫題にあらずや、予輩は畫人には非らざるなり、この問ひに答ふること能はざるものなり、諸君は畫人なり、宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

頃は明治の初なり、時は冬の最中なり、某月某夜、所は兩國橋の上、冴え渡る冬の月は哀れなり、月の光に照らさるゝ下なる水は物凄し、時は丑滿、往來の人は途絶えたり、聞ゆるは只幽かなる按摩の笛の音と流るゝ水の音、欄干に寄り縋り身を伸ばす者あり、身投なるか、身投なり、然れども我が身を投げんとする者には非らざるなり、まだ頃是も無き乳呑み子を水中に投げんとするの男あり、狂氣の如く必死となりて

朝は地獄夕は極樂畫題の六

男の袖に縋り付き上の子をば投げさせじと爭ふ一個の童子あり、上には哀れなる月の眺むるあり、下には無情なる水の靜かに待つものあり、爭ふは三人の親子なり、貧に迫まり途方に暮れて今や吾兒を水中に投げんとするの鬼親あり、足らぬ力も顧みず我が弟を死なせじと必死に爭ふ兒童あり、親は惡魔なり、子は天使なり、惡魔が勝てるや、天使が勝てるや、稚子の命は助かりしや、予は之を知らざるなり、諸君、此れは是れ深淵なる思想を表出するを得べき畫題にはあらざるや、予輩は畫人には非らざるなり、此の問ひに答ふること能はざる者なり、諸君は畫人なり、宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

年は何年なるを問はず日は幾日なるを論ぜず、朝八時頃某區某町に見るべき者あり、近在より荷車に荷を載せて市中に挽き來る壯年の男あり、後ろより車を押す若き女あり、脊には紐を以て負へる乳呑兒あり、あら無情なり此の男、あら痛はしや此の女、女子の身にて車を押し搗て加へて稚兒を負へり、日本は野蠻國なり、日本の男子惡むべきなり、年は何年なるを論ぜず、日は幾日なるを問はず、夕陽西に傾かんとするの頃某區某町の町盡頭に見るべきものあり、快よげに一輛の空車を挽き往くの男あり、否、空車には非らざるなり、車上には乳呑兒の口に乳房を含ませ餘念なく

子を愛するの婦人を載せたり、實に言ふに言はれざるの趣あり、朝に在つては地獄の觀を呈したるものも夕に在つては極樂の觀を呈するものなり、大和男子無情なりとは何者の誣言なるぞ、粗服を身に纏ひ妻子を車に載せて挽き往くこの男子は身に美服を纏ひ夫妻同伴双々兩々馬車に乘り軸をきしらして往くの王公貴人に耻るものなるや、如何なる貴人の快樂と雖も汗を流して今日の務めを畢り妻子を載せたる車を挽きて今や我が家へ歸らんとする此男子の快樂に勝るものは決してあらざるならん、日本の風俗は野蠻なるか、予輩は野蠻の風俗を天下に示さんことを願ふ者なり、此觀物こそは日本生活の困難を示す者なり、此觀物こそは日本女子の辛苦を示す者なり、此觀物こそは日本男子の性質を示す者なり、此觀物こそは日本帝國の宇内に存在する所以を示す者なり、此觀物は予輩一人の見る事を得る者には非ざるなり、何人も見る事を得べき者なり、和風の畫人にも洋風の畫人にも此奇觀を畫きたる者の無きは予輩の了解に苦しむ所なり、諸君、此れは是れ採つて以て畫題とするの價値なき者なるや、優美高尚なる思想を表出し得べきの畫題にはあらざるや、予輩は畫人には非ざるなり予輩は此問ひに答ふること能はざる者なり、諸君は畫人なり、宜しく之に答へずんばあるべからざるなり。

最も著しき結果は人事的思想畫なるべし

畫人は詩人ならずんばあるべからず

諸君予の思想畫と稱する者は果して如何なる者なるかは粗御了解になりたる事と思はるゝなり今後日本畫人の職として畫くべき所は思想畫なりと思はるゝなり今後の日本の畫人は只感納的にのみ「レセプチブ」にのみ精神を働かせ居るべき者には非ざるなり宜しく思想的にも働かせずんばある可らざるなり而して最も著しき結果を得べきは蓋し人事的思想畫の上に出づる者は非ざるならん然り而して其畫くべき材料を得るの方法に至つては常に能く百般の人事に注意して觀察を下し特に肉眼を以て事物の外形のみを見る事を止めて心眼を以て其外狀の下に存在する思想を發見する事を勉めずんばある可らざるなり人事には實に面白き事あり人事には實に豫想外の事あり人事には往々「ロマンス」よりも尚「ロマンチック」なる事實あり人事には往々「ポエム」よりも尚「ポエチック」なる事實あり諸君は時を看折を窺つて之を見出す事を勉めずんばある可らざるなり「ロマンス」は往々實に意外の所にある者なりロングフェローの散文は往々其畫よりも尚詩なる者あり畫人は詩人ならずんばある可らざるなり畫人は詩人の目を以て事物を觀察する事を知らずんばある可らざるなり予輩は疑はざるなり諸君にして若し予の說に從て人事的思想畫を描く事を勉めらるゝに於ては日本の繪畫は一大改良

を加ふるに違ひなしと予輩は信ずるなり日本の繪畫は面目を改むるに違ひなしと明治の繪畫は明治の繪畫ならずんばある可らざるなり明治の畫人は明治の畫人たる事を知らずんばある可らざるなり舊風を墨守する者は和流畫人なるか洋風畫人なるか人の踏みたる跡のみを「ビーテン、トラックス」のみを履み行く者は和畫者流なるか洋畫者流なるか明治の畫人となるは和畫者流なるか油畫者流なるか明治の繪畫を描くには和畫が最も適したるか油畫が最も適したるか、予輩は此問題には答ふる事能はざるなり之に答ふべき者は則ち諸君に外ならざるなり。

因にいふ頃者傳聞する所によれば日本畫をして宇内に振はしめんとして大いに盡力せられたる米人フェノローサ氏は近日歸國せんとせらるゝなりと予輩は此の風説の事實ならざらんことを偏に願ふものなり若し我が東京美術學校が今にして氏を失ふの不幸に遭遇せんとするが如きは予輩に於て此の上もなく憂ふる所なり予輩の熱望に堪へざる所は天フェノローサ以下日本繪畫に熱心なる諸氏に千萬年の壽命を貸して永く東京美術學校に於て和流繪畫養成の爲めに盡力し明治の繪畫を描くに適したるは油畫に非ずして和畫なることを證明することを勉めしめられんこと則ち是れなり。（公刊）

演劇改良論私考

（明治十九年八月）

本論を著すの主意

今日我が邦に行はるゝ演劇は大いに改良を要するものなりと云ふことは既に一般の輿論となりたるが如し。而して其の改良を要するの點に至りては演劇改良會趣意書幷に二三新聞の社説に於て縷々陳べられたる所にて大略之を盡せるが如しと雖も、世には此改良に關して甚だ漠然たる考へを懷く者多きのみならず、中には甚だ謬りたる考へを有する者も少なしとせざるが如し。即ち我邦の芝居に屬することにして排斥すべきことゝ排斥すべからざることゝあるを知らざるものあり或は又改良すべき事と改良し得べからざる事との別あるを知らざる者も之あるが如し。本論は則ちかゝる誤謬を正さむが爲めのものなり。

改良を要する箇條

演劇改良は概して之を言へば第一狂言に關するもの、第二役者に關するもの、第三組織に關するもの、第四劇場に關するもの、第五音樂に關するもの等なることは誰も異存はあらざるならむ。然れども此の五項の中には改良の爲し易きものと爲し難きものと、多く之を要することゝ、少なく之を要することゝあり。今余は先づ改良

演技場の事

なし易きものより論じ始め、進んで其の之を爲すことの難きものに説き及ぼさむとす。蓋し改良することの最も容易なるものは演技場ならむ。金が無き時は演技場も改良することは至難なるべしと雖も、金さへ有らむには演技場は支那風にでも西洋風にでも、塗り家にでも煉瓦づくりにでも、銀びかりでも金びかりでも、三階づくりでも四階づくりでも、獨逸風にでも佛蘭西風にでも、好み通りに如何にでも建ることを得べし。道具の如き景色の如きも亦金の力にて佛蘭西の通りにでも英吉利の通りにでも好み次第になるものなり。されば今假りに金が充分あるものとせば建築は如何なるべきか、道具及び景色は如何に改むべきかと言はむに、余の考へにては建築は宜しく堅牢なる煉瓦石づくりを以てすべし。されども地震の恐れ有ればあまり高き建物は宜しからざるならむ。中の模樣は總て西洋風になし天井其の外は少しは金びかりも宜からむ。概して成るたけ奇麗にすべしと思はる。見物人は椅子によるべし

見物人は椅子によるべし

劇場内に持ち込むなどいふことは一切廢止にすべし。空氣の流通はどこまでもよき樣になしたし。又西洋の劇場では中から火を失することの有らむには、出口の不完全なるが爲めに許多の見物が燒け死にせし例しも往々有ることなるが、如何ほど西洋風が好きでも燒け死にのお相伴は眞平御免なれば非常口などは充分設け置きて、これぱかりは西洋の眞似をせぬ樣にすべし。茶屋の制度は後に論ずる如く到底廢すべきものなれば、劇場に屬する運動場及び休息場の設けは無くんばあるべからず。景色は無論西洋風のものに改むべし、且アカリをよく使ふことを務めざるべからず。蓋し我が邦の劇場に最も固有なるものにして未だ西洋の劇場に見ざるものは花道と廻り舞臺の二つなり。世には西洋の劇場に花道も廻り舞臺も無き故にこれ等の如きは野蠻國の芝居に固有なるものと心得、只管に之を排除なさむとする如き連中も或ひは有るべけれども、花道たり廻り舞臺たり決して野蠻芝居に固有なるものにはあらず。其の昔我が邦が今日より尙ほ野蠻なりし頃の芝居には花道も廻り舞臺も有らざりしなり。其の後、世が大いに進みし時に至り始めて行はるゝに至りたるものなり。廻り舞臺の如きは殊に便利なるものとして之が爲めに芝居の面白味を增すこと甚だ少からず。廻り舞臺の如きは如何ほど劇場改良でも廢さぬ樣にしたきものなり。花道は廻り舞臺ほど大切のものにはあらねども其のあるが爲めに往々餘程面白き趣向も出來ることあり。承應の頃には芝居も假り建てにて舞臺には床几を列べ、棧敷と云ふものも無く高場と云ふべきものありけ

非常口を設くべし

運動場休息場の事

花道と廻り舞臺の事

承應年間の芝居

花道の由來

り舞臺へ行き通ふ道をつけ、見物より役者へ色々の贈り物をするに時々の花を折り添へて遣はしけるゆゑ今でも役者への贈り物を花と云ひ、今の花道も其通行道より起りたるものなりと云ふ說あり。果して然らばこの花道を特に通路に止めずして狂言の道具に使用するに至りしは全く自然の變遷によりしものならむ。狂言の性質によりては舞臺を常よりは大きくなさむとすることを欲する如き場合あるも、舞臺には素よりきまりたる廣さのあることなれば、俄かに之れを廣げることも出來ざれば、かゝる場合に當りては花道を以て舞臺の一部分と爲して其缺を補ふ如きは最と巧みなる仕掛と云ふべし。花道果して廢すべきや否やは俄かに斷言する能はざれば、これ等は其の筋にて確と熟議を經たる上にて決すべきことなり。

以上は劇場の構造幷に道具等に就ての余の意見の大略なり。前にも言へる如く此の項に關する改良は金さへあれば好み次第に出來ることなれば、決してむづかしきことはあらじと思はるゝなり。

芝居の組織與行時間

次に論ずべきは芝居の組織のことなり。余の所謂る組織とは見物の法、飲食の制、興行時間の長短等に關することなり。今日の芝居に關して上等社會の見物の最も多く苦情を鳴らす所のものは蓋し興行時間の長きこと是れなり。日の中十五六時間も芝居見物の爲めに費して恬として居らるゝ者が世に多く有らう筈はなし、有らば國の爲に甚だ憂ふべきのことなり。今の仕掛にては日々定まりたる職業の有る者は虛病をつかつて出勤を斷はるか、若しくは商人ならば勤むべきことを怠り、取るべき金を取らずに濟ませむとする者の外は日曜日にあらざるよりは芝居見物は殆んど出來ざるの勢ひなり。而して我が邦の芝居たる空氣の流通は惡しゝ其の狂言は情緒を激衝するに過ぎ、運動は爲さずして終日飲食を多くし身體を養ふべき日曜の休暇も芝居見物に出かくれば却つて身體の不爲めとなるは、男子と雖も其の通りなるが、況して女子に於てをや。殊に子宮病の女子などは芝居見物のからだにあたること實に少なからずといふ。到底興行時間を短くなし夜分四五時間位のことゝ爲すべしとは是れ上等社會の人の間の輿論なるが如し。我が邦の芝居は斯の如く十五六時間も興行するものにて、幕數も甚だ多けれども其の中見るに足るものは大抵一幕か二幕に過ぎずして其の他は大抵「ダレ」を以て埋めたる如きもの多し。又大立物は烏渡顏を出すばかりで中役者がたゞドタバタとやらかしたり、面白くも無きシャレを言ひ散らして其れで事濟みになる幕も少からず。而して厭ふことを見聞きするは大いに精神の疲るゝものなるがゆゑに、かゝる幕はイキッ

芝居茶屋の事

今の芝居見物は不經濟

キにはならずして却つて身體の疲勞を增加するものなり。考へれば今の世の芝居見物ほど馬鹿氣たるものはあらざるなり。又我が邦芝居繁昌の一大障礙物は茶屋の制なり。今日の如く十五六時間も打ち續きて見物せねばならぬ芝居ならば、芝居茶屋も素より必要なるべけれども、茶屋あるが爲めに我が邦の芝居見物は實に不經濟極まるものなり。たゞ一ト幕か二タ幕よき所を見む爲めに貴重なる時を十五六時間も費やし、又其の上に一ト幕か二タ幕の爲めに茶屋へは茶代をやり若い者には祝儀を遣はしなどして却つて棧敷の代にも勝る費用を拂はねばならぬ譯なり。斯く不經濟なるがゆゑ見たき狂言も見ずにしまふものも少からざるならむ。手輕に見られむには同じ狂言でも隨分幾たびも見物したきものあらむが、餘計の手がかゝるが爲めに見合せにする者も多く有らむ。又茶屋の若い者の爲めに費やす金を土間棧敷の爲めに拂ひたらむには、役者の給金も今よりは增すことを得べく、道具幷に衣裝なども大いに立派にすることを得べきに、今日の有樣にては肝腎の所に費すこと尠くして却つてツケマツリの爲めに費やす所莫大なり。芝居の不繁昌なるも怪しむに足らざるなり。我邦芝居の如く飲食することの盛んなるものも西洋諸國には決して見ざる所なり。これも興行時間の長き弊に伴ふものにして、狂

芝居にて今日の如く飲食するは芝居のためにあらず

一大不便

清潔を要す

言見物にどうしても必要といふものにはあらざるものなれば、幾分か眞正なる芝居の爲めには有害なるものと言はざるべからず。坐して一日飲食すれば消化の働きは不完全にならざるを得ず、消化不完全なれば隨つて氣分に差し響きを生ず、氣分爽快ならざれば面白き狂言も充分なる面白味を覺へざるなり。又今日の風として芝居見物にはそれ〴〵定式の飲食がありて其れだけのものは欲せざるものと雖も一般の習ひとて其れだけのものは取らねばならぬ情實なるゆゑ、棧敷の一ト間もかりて芝居見物と出かくる時は日本人の身上と狂言とを比ぶる時は甚だ不平均なる金高を費やさゞるを得ず。斯の如く不經濟にして且つオックウなる仕掛は速に改たむべきなり。この外に尙ほ一つの大不便といふは我が邦の大芝居にては一人で芝居見物に行き、よき場所に入らむことは一人で一ト間かりきらざる上は決して出來ざることになり居り、芝居見物は必ず一間若しくは二間かりきるに足るほどの仲間を拵へることを要する如き事情では芝居を充分繁昌させることは到底出來ざるならむ。せめて土間だけは一人でも二人でも申し込みの早さ次第で如何ほどよき場所でも取れる樣になすべきなり。

多人數群集する場所は餘程清潔にする積りでも甚だ不潔になり勝ちのものなる

が、我が邦從來の芝居の如きは最初より不潔を厭はざるものゝ如し。酒もこぼせば食物もこぼし、茶屋の若い者を始め幾百人とも知れぬ人が毎日ハダシであるきまはり、木地の所は眞ッ黑になり、食事の最中と雖も其の上をカラス子の男女が股まで出してバサ〳〵とあるき、或ひは大跨にまたぎ行く如きは不潔極まる垢の分子が空中に散亂して精血を清むべき大切なる空氣を汚し、辨當の中にも盃の中にも西洋料理の胡椒の如くにス子の垢やモヽの垢が飛び込む日本芝居はこれぞ不潔の隊長芝居、尻まではし折れる若い者が、きりなく見物の頭の上をあるきまはる如き習慣は貴人紳士の見物すべき芝居には甚だ不適當なるものなり。今日に在つては如何なる身分の人でも土間にて芝居見物を爲さむには日に何たび茶屋の若い者の跨をくゞらせらるゝかも知れず、實に言語同斷の至りなり。其の外、茶をかけられたり酒を頭からあびせられたり烟草盆の灰を頭からかけらるゝ者は日に一人や二人は必ず有ることなり。瑣細のことの樣なれどもかゝることは芝居改良に付て最も注意すべきことなり。見物人にあらざる者がきりなく芝居の中を徘徊する如き風習は決して許すべきものに非ず。これは茶屋の制度が廢せられむには茶屋の若い者の徘徊することも止むならむが、ラムネ賣りや水菓子賣りなどが其の代りに入り來らぬ樣今より注意が肝腎なり。

役者に關する改良

第三項に關する意見はこれまでと爲し置き、これより役者に關する改良のことに說き及ぼさむ。世には日本の政治家と異なること、日本の學者の西洋の學者と異なること、日本の新聞記者の西洋の新聞記者と異なることを知らずして、日本の役者のみ俄かにブースたらむことアービングたらむことを希望する者も無きにあらざるが如し。學者で無ければならぬのはひとり役者に限らず、政治家も新聞記者も皆な然り。今日演劇改良を唱ふる者は役者の改良に關してはたゞブースたらむことアービングたらむことを望むに止まるべきか。數年の後に役者がブースたりアービングたらむことを望むは誰も同じことながら、かく言ひ放つのみにて今日の役者が改むべきこと、改め得べきことゝを示さゞるは徒らに空論を好む者と言はむか、不深切なるものと言はむか、將た其の他には改良すべきものなしと思へるか。到底政治家がヂスレリー、グラッドストーンにあらず、學者がハクスレー、ヘルムホルッにあらず、新聞記者がブライヤント、モーレーにあらざる今日に於て役者ひとりブースたりアービングたらん事を望むは到底出來ない相談と云ふものなれば、これは將來の規模と爲し置き、余輩は今の役者に付て其の改良

すべきことゝ、其の改良し得べきことゝを聊か示さむとす。余輩の考へにては今日の役者の中には今日の政治家學者新聞記者等に比して其の技藝の決して耻ぢざるものもありと思はる。明治の役者は明治の政治家なり、明治の政治家は明治の役者なり、明治の新聞記者があれば明治の商人もあり、明治のハナシカもあり、明治の俳優もあり、俳優ひとり時代おくれなどゝは虛妄の說なり。併し俳優の中には時代おくれの者もあり、其れは他の職業と同じことなり。而して其の時代おくれの者と其の時代おくれならざる者とを論せず、今日の役者の通弊とする所のこと二箇條あり。其の一は今の役者は狂言と小說とは其の別あるものたることを知らざること、又一は役者の本分ならざる藝道に少しく長ずることあれば、忽ち大得意になりて舞臺の上にて其の藝道を顯はすことを好むこと是れなり。夫れ役者が狂言と小說とを混同するとは、小說にては細かに事を叙して筆力にて室內の模樣、家具の配置、人物の動作等を細かに述べて其の家は如何、其の人物の起居は如何と眼に見る如く之を寫し出すが必要なれども、演劇に於ては大いに之と異なり、最も必要なる點のみを演じ瑣末の點は之を省き、あとからあとからと見物の心を奪ふ樣になし、見物をしてイキつくヒマも無からしめ、狂言を見物して居る中は宇內に他事あるを忘れしむる樣になし、四時間か五時間の間に最も完全にして優美なるミモノを與ふるが趣味なり。然るに今の役者の癖として見物人のアクビをするをも顧みず、ユウ〳〵カン〳〵と舞臺の上にて茶をたてたり、花をいけたり、著物をぬいだり、著替へたり、全く演劇の精神に悖る如きことを爲して大得意になりて居る者少なしとせず。狂言にはかゝる興味の無きことは決して入らざるなり。數時間の間に高尙なる快樂を得むと欲して來りたる見物人に落ちつき拂ッて茶をたてゝ見せたり、花をいけて見せたり、意味も無き酒宴を爲し乍らクダラなき話しを爲して聞かせたりして得意になりて居るとは餘り人情を知らぬといふものなり、あまり狂言の何たるを知らぬといふものなり。これは作者の罪も有らむが、かゝることを得意になりてする役者も亦其の責は免かれず。演劇の時間が短かくなれば猶更以てかゝるウメクサは廢さねばならぬなり。これ今日の役者の最も務めて改むべき弊の一なり。

次に今の役者の弊として唱歌、管絃、舞ひ、謠ひ、茶道、挿花、階子乘など何か少しくごまかせる事が一藝あらむには、無性矢鱈に我が腕の技倆の程を見物の前にて顯はし見せむと欲し、謠ひ自慢の俳優は何かにかこつけて謠ひを謠ひ、尺八自慢の俳優は

唯々眞を寫すのみ而已が演劇の主意に非ず

尺八を吹き鳴らし、階子乘自慢の俳優は類りに加賀爪の眞似をしたがり、よき年をして階子の上に乘り大得意になり居る者も少からざるが、斯る役者は役者の本分を知らざる於虚のシレモノどこそいふべけれ。尺八が聽きたくば古童の所へ行き謠ひが聽きたくば梅若に行き、階子乘が見たくば出初めへでも行くものを。何程よく出來ても俳優の謠ひは俳優の謠ひなり。何ほど身輕でも俳優の階子乘は俳優の階子乘なり。かゝる事を爲して喜ぶはボルテールが政治學に誇り、フレデリック大王が詩に誇りたると一般、小兒に等しき業にぞある。俳優がかゝる事を爲すのを見て見物が之を賞めるは恰も小兒が大人の眞似でも爲したる時に之を賞めると同じく、誰は役者のくせに威心に謠ひがうまいとか、誰は役者のくせによく階子乘が出來るとか言ふの類なり。甲の役者は乙の役者の如く階子乘こそ出來ざれ、舞臺にて書畫會然たる事を爲し何先生の氣取りにて大得意で居れり。階子乘と書畫會とは品こそ變れ其の性質は全く同一なり。等しく見物の厭ふ事にて等しく眞の役者の爲すまじき所なり。又或る役者は狂言は何でも眞を寫しさへすればよきものと心得居る如く見ゆるものも有れども、何ほど眞に迫りたること〻雖も審美學の理に悖りたることは決して狂言の中に加ふべからざるなり。何ほど眞に迫りたること〻雖も病みぼうけたる癇病やみがむさぐるしき雪隱から腹をかゝへながら出る如き醜觀は全く審美學の理に悖るものにして、アゝこつたりと言ふまでなり。役者のこるのも場合によりてはよけれども、かゝることにのみこる者は役者は一種の美術家なることを忘れ、演劇は一種の美術なることを知らざる者といふべし。たゞ眞を寫し細かくやるばかりが眞の役者とは言ふべからず、眞の美術家とは言ふべからざるなり。

役者品行の事

今の役者の人より賤まるゝ理由

役者の品行を改良せむことは甚だむづかしきことなれども、心ある役者は務めて品行を正しくし、且河原乞食と言はれたる時分より役者社會に固有なる惡き習慣を破ることを務めざるべからず。然せざるときには一般人民と同格のツキアヒは出來ざるならむ。「歌舞伎役者と言へる者は人の太鼓を持つ氣象では上手にはなり難し」と坂田藤十郎などは言へる位なり。されどもヒトリ藝の上手になれぬのみならず、世人と人間なみの交際が出來ざるなり。明治の今日に在りては稼多も無ければ河原乞食も無きが故に、人より人間視せらるゝと否とは全く我が覺悟一つによることなれば、今の役者の人より賤しまるゝは全く舊習の幣間流義が失せざるからのことにて所謂る自暴自棄といふものなり。聞く所によれば先年參議方其の他

貴顯方俳優を避けられし事

貴顯の面々が打揃はれて、新橋より滊車にて横濱へ行かれむとせられて將に乘車せられむとせられしに、有名なる俳優某が今の御世には稀多も無く河原乞食も無きことなれば、金さへ出せば上等客如何なる參議貴顯でも滊車の中では御同席眞平御免下されと言ひしや否やは知らねども、中に坐せるは誰も知る、まがふべうなき俳優なれば、これほど驚く貴顯がた、思はずあとへタヂ〳〵〳〵互に見合す顏と顏、目くばせせられて其の室に入らるゝことは止められしも、折りも折りとて其の時は、上等室はたゞ一つ、彼の俳優に占められて、前を望めど後ろを見れど、乘るべき車のあらざれば、別に車を仕立てさせ、首尾よくお立ちになりしとぞ。我が身一つの故をもて、かゝる騷ぎの有りたることを、彼の俳優は知りたるや、否やのほどは分らねど、若し知りたらばウハベには、恐れ入りたり濟まざることなりと、手を下げ頭を地につけて、あやまるならむが腹中では、「不見識なる貴顯のヤカラ、今の御世をば何とか知る、車ひきでも役者でも、人に差別は無き世の中、下等なるも上等なるも、たゞたゞ金の爲めのみと、いと有り難き上のお定め、其れを何とか誤解せる」錦着て疊の上の乞食かな」とはこれ舊幕時代のこと、其れを何ぞや俳優と同車はならぬなど言ふは、開化を口に唱ふれど、腹を探れば猶ほ未だ封建時代のサムラヒの心が全く拔けざる故なり、片腹いたきことなり」と嘲り笑ひもしつらむが、よく考へて見よさうで無し。貴顯方が今の役者たちと同席さるゝを厭はるゝは決して理由なきにあらず、人は如何なる賤業の者と雖も其れだけの仕事を爲して其の酬いを得るが正路なり。何も爲すことなく媚を賣つて人より金を得るものは幇間なり、正路を履ますして金を得るものなり。今の俳優たるものは暑中見舞其の外の爲めに貴顯紳商を訪ひ、舞ひもせず謠ひもせず唯頭を下げたばかりで金圓を投せらるゝことあらば、喜んで頂戴する者にあらずや。これ今の役者は貴顯紳商の共にヨハヒするを欲せられざる所以なり。これ今の役者が錦着て疊の上の乞食たるを免かるゝ能はざる譯なり。上に說きたるものゝ外に役者に關する改良の最も大切のものあり。其れは別の事にあらず、これ迄の如く女の役を男に勤めさする事を廢して、眞實の女子に之を勤めさする事これなり。女の役を男が勤め居るうちは決して高尙なる芝居は出來ざるなり。女子にあらずむば女子の情を示さむ事は決して出來ざるなり。色女の體や花嫁の體は云ふも更なり、繼母の仕打や、ヤキモチ女の身振りは眞の女子にあらずむば決して充分には出來ざるなり。我邦芝居の濫觴を原ぬるに、最初は男女打交りにて演せしものゝ如し歌舞妓の元祖は阿國と云へる艶色嬋娟たる出雲の

女役者の事

國女の事

大社の觀なりし由なるが、傳助と云ふオドケモノ岡國が歌舞を助けしといふ。其れよりして男子の此の藝を爲す者出來しが、中に佐渡島與惣二と云へる者能藝をよくせしが、遊女のかほよき者を撰むで歌舞を敎へ能藝を施さしめし事あり。又島田萬吉と云ふ女之をはかりて女名代と云ふを始めたりと云ふ。然るに女藝は見る者心を蕩かす事之に過ぎたるは無しとして寛永年中女藝を禁止せられたり。されば我邦昔の芝居は女役者の大に行はれたる事知るべし。而して此女役者は今の女役者の如く人の爲に賤しまれたる者にあらずして實に彼の國女の如きは信長、太閤の前に出で其他高貴の門に入りて技を爲せしといふ。女役者の止められたるは封建サムラヒの品行の爲にはよかりしかも知らねど、芝居の進歩の爲めには歎ずべき者なり。殊に風俗を紊るものは強ち女役者に限らず、風俗を紊ると云へば男役者も同然なり。既に女藝を止められたる後、若衆歌舞妓と稱し少年に藝を施させしに、男色、女に減せざりしかば遂に芝居を全くやめられしといふ。其れ然り若し風俗を紊るとして止むべきならば、當時の政府の如く芝居は全く之を止むべきなり。成るほど今日に在ては男色の行はるゝこと少なきが故に、男役者が勅奏任や紳商などの品行を紊ることは無しと雖も、後家や、娘や、おかみさんの品行は幾分か紊り居るものならむ。男の品行は紊して惡し、婦人の品行は紊しても宜しと云ふ理は素より有るべき筈なし。若し品行を紊すべき男ならば、女役者を待つて初て紊すにはあるまじ。我が邦の如く外に幾人も藝妓や茶屋女の如き浮氣女のある國にて女役者のみを拒みたればとて決して道德上著しき違はあらざるならむ、たゞ女役者が出來たらば藝者輩が少しはヒマにならむか、さすれば藝者が女役者になるまでのことなり。女役者が出來たからと云つて、今日より日本男子の品行が惡くなると云ふことは毛頭あらざるならむ。若し假りに女役者が出來たるが爲めに男子の品行が惡くなるとせむか、若し果して然らば男子の品行が惡くなるだけ女子の品行がよくなる理なり。なせなれば女役者が女形を勤むる樣になれば、今の女形は無用物になるべければ男役者が其れだけ減る勘定なり。而して女役者が出來て男の品行が惡くなる譯なれば、男役者が減ずれば女の品行は其れだけよくなるの理なればなり。或は說を爲して今日は女役を勤むる者が男なるが故に色事なども見苦しくはあらねども、女役を女が勤め男役を男が勤め眞の男女が舞臺の上で今日の如くヌレゴトを爲さむには其れこそ大いに風俗を紊るならむと、何さま一應考へると、さる恐れも有らむが、余の考へにては一たび女役者がまじりたらむには却ッて今の如き

女藝禁止

女役者を禁止すべければ男役者も禁止すべし

女役者の雜るは狂言の面を減少するの功能あるべし

能にも女を雜ゆべし

狂言の改良

猥褻のことも大いに減少し總體演劇は大いに上品にならむ。何となれば今日の如き甚しきことも役者が皆男なればこそ之を許して置けども、女役を女が勤め男役を男が勤むる上は今日の如く甚しきことは決して天下の許さぬことゝなりて、色事もこれまでの如く肉交上にあらずして情交上のものを演する樣にならむこと疑ひなければなり。男ばかりでも女ばかりでも「バカリ」は決して道德の爲めによきことにあらざることは他の場合に於ても、いくらも經驗の有ることなり。されば演劇改良に際し最も大切なる改革の一にして其の行はれむことを余の切に希望するものは女役者をして女役を勤めさせむこと是れなり。能の如きも今日の如く假面をかぶりて男擬ひにてやるをやめ、男女をまぜて素面にて之を爲し宜く西洋のオペラの如きものに改むべきなり。

さて次に論ずべきは狂言の改良なるが、この改良は改良中の最もむづかしきものなり。何となれば善き脚本を作り出さむことは金の力でも學問の理屈でも決して出來ざることにして、天才を待ッて始めて出來べきことなればなり。世には芝居改良と云へば、先づ第一に狂言改良のことゝ心得、在來の狂言は皆な下作なるものなり。時代おくれのものなり、芝居改良ならば先づ新規に脚本から作ッてかゝらねば

封建時代の狂言果して排斥すべきか

ならぬなどゝ、一途に思ふ如き者も往々有る如く見ゆれども、これは大いなる考へ違ひなり。何さま近頃の作には取るに足らざる者が多けれども、時代ものには名作も少からず。余我が邦の演劇を見ること數年、而して狂言に不滿を感せしは常に新作の世話ものにして、時代ものに至りては甚だ稀れなり。演劇改良なればとて狂言の乏しきことは決して有らざるならむ。然るに時代ものは皆な時代おくれのものなり、封建時代の民情を現はすものなれば一も取るべきもの無しとして排斥せむとする如きは余の決して取らざる所なり。封建時代のことゝ雖も強がち封建時代にのみ固有のことにはあらざるなり。いつの時代いづれの國にも其の時代其の國にのみ固有なることゝ一般人類に普通なることゝあり。國を隔て時を隔つることゝ彼の希臘のホーメル以前のトロイのことゝ雖も、トロイの勇將ヘクトルが彌國の滅亡に臨み、妻に最期の別れを訣ぐる條の如きは苟くも人たる者の情を知る者ならむには、之を諳みて感せざる者はあらざるならむ。封建時代の狂言には封建時代に固有なることも有らむが、一般人間の情緒に訴ふることも亦尠しとせず。何れの國にても名人の作りたる者は一國一時に止らずして、廣く人類の精神に固有なる確乎動かすべからざる情緒に訴ふるものなるが故に、かゝる名家の作は國を異に

シェキスピーヤの作も排斥すべきものにあらずや

し時代を異にするも廣く世の人に寵愛せられざるはなし。有名なるシェキスピーヤの作の如きは、其の作たる希臘羅馬の事に係るものか然らざれば外國の事に係るもの多し、本國の事に係ることの如きも大抵皆な封建時代の事に係るものなり。而して其の狂言には或は化物の出るものあり或は大岡流の裁判もあり、或は借金の抵當にカラダの肉を爲すものもあり。かゝることは皆な今日の人情に近からざるものなり。然るにシェキスピーヤの作の如きは、封建時代のものなり馬鹿氣げたるものなりと云ふてすてざるのみならず、佛蘭西でも獨逸でもシェキスピーヤの作は何人でも之を貴重するは、これ一はシェキスピーヤの作は適切に一般人情に訴ふるものなると一は西洋人は今の日本の論者の如く博識ぶりたり開化ぶりたりして芝居や淨瑠璃のことは少しも知らずに兎や角と評判するものにあらずして美術上の心を以て平意虛心に判斷を下す者なるによるものなり。而して西洋諸國に於ては脚本作者の時代は既に經過せる如くにて、英國に於てはエリザベス時代以來名作の出來たること甚だ稀なり。近時の巨魁なりといふリトンやテニソンなどの作と雖も昔の作には及ばざるなり。佛蘭西でもモリエール、ラシイン、コルチール等の時代後に名作の出來たるものは至つて少なし。我が邦に於ては今後如何

時代狂言中不都合なる點を除くべし

樣なる名作が出來るかも知らねども、今日までの所にては近時の作よりは德川時代の作の方が遙かに優れるが如し。これ等の作は將來之を排斥なさむよりは寧ろ之を大いに演ずべきものなり。近來芝居の失敗は名作なる時代ものを演ずることを爲さずして野卑拙劣なる新狂言を演ずるによること少なしとせず。さりながら如何なる名作と雖も時代が違へば幾分か不都合の廉の出來るものなれば其の邊は能く取捨して演ずべきなり。シェキスピーヤの時代に在つては不都合にあらざりし談も今日に於ては甚だ不都合になりたるものあり、封建時代の人の耳には猥褻とも思はれざりしことも明治の時代に在つては甚だ聽き苦しきものもあり。其の例を擧れば忠臣藏三段目にて伴内がお輕に戀慕の塲の如き、同じく七段目にてお輕の階子乘の際に大星が下からの戲れの如きは則ち斯の如きものなり。又我が邦の芝居にては女子の方からあつかましく男に戀慕を仕掛くるのみならず、やゝともすると一夜のお情けなどゝいふことが常なれども、かゝることは實際でも上等社會には無きことなれば、況して芝居に於ては決して爲すまじく言ふまじきことなり。かゝることは役者の量見次第で如何樣にもなることなれども役者がかゝることの分らぬ者ならむには他より宜しく制止すべきなり。蓋し猥褻の事を厭ふ

坂田藤十郎

は今日に於て初めて始まれるにあらず、心ある者は昔より皆な然りしなり。役者にも坂田藤十郎の如きは舞臺にて役者が猥褻の事をするを憂へしのみならず、舞臺にて傾城買ひの狂言を勤むるさへ差支ありと言ひたりしとぞ。然るにいつの頃よりか次第に差し合ひのセリフ多く、近頃は舞臺にて二人寢る狂言などあり、箇樣の趣向を作る作者古人の示敎を知らず、假令ひ作者は箇樣に作り出すとも其の仕打を勤むる役者も同罪なり。藤十郎申されし如く二三十年過ぎなば役者の行儀大いに紊れぬべしと未然を示し申されしこと日々に思ひ當りたり。狂言に差し合ひあらば其の場に及ばぬうち如何樣にも仕樣あるべし。近來の狂言は親子一所に見物なり難し、さて〳〵苦が苦がしきことなり」と賢外集に見えたり。されば昔しもきたなきことを厭へる役者も多くの中にはありたりと見ゆ。今日の役者の中にも藤十郎の如き者少しはあるならむが、かゝる者は甚はだ少なきやうに思はるゝなり。封建時代の役者にも既に藤十郎の如き者ありたるにあらずや。明治の役者として封建時代の役者に負けてはならぬなり。今の役者は宜しく奮發せずんばあらざるなり。

時代が變れば狂言を演ずるの模樣も多少異なる

同一の狂言でも時代が變り役者が違へば其の時代の人情其の役者の見識によッて之を演ずるの模樣多少異なることは何れの國も同樣なり。英國にて昔より今まで絶へず人に寵愛せらるゝ所の狂言にして古來俳優が其の技倆を顯はすは必ず其の狂言に於てすること我が邦の忠臣藏の如きものはシェキスピーヤの作でも之を演ずる模樣の今日までに變りしことはなるが、同じシェキスピーヤの作でも之を演ずる模樣の今日までに變りしことは實に非常なることなりと云ふ昔しは何役と雖も其の身振りたり音聲たり天然自然の身振りや音聲とは甚だ異なりたりしも近來になるに隨ひて段々と人間の身振り人間の音聲に近きものになりたり。例へば彼の有名なるハムレットの如きは昔しに在てはムヤミにカンバリたる聲を張り揚げギスギスたる身振りを爲し、其の母に物言ふ時の如きは恰も之を叱り付くる有樣にて實に氣違ひ地味たることにて粗暴野卑を極めたることなりしも、世が進み人の思想が高尙になるに隨つて之を演ずるの模樣も大いに變り今日のハムレットは優美高尙にして甚だ人間に近きものとなりたり。昔のハムレットと今日のハムレットはまるで違ひたる人の如し。我が邦と雖も其の通り、同じ石川五右衞門でも昔の石川五右衞門と今の石川五右衞門とは實に雲泥の違ひなり。されば昔の狂言でも演じ方次第で今の人情に適する樣に爲すことも出來べければ、時代ものなればとて一概に馬鹿げたるもの

ハムレット

石川五右衞門

なり舊幕時代の腐敗物なりとして排斥せむとするは演劇の史を知らざる者なり、俳優の活物なることを忘るゝ者なり。今の演劇改良を唱ふる者は宜しくこゝに省みる所なくんばあらざるなり。今日まで世に遺りて人にもてはやさるゝ作は當時の總作中の百分の一か千分の一に過ぎざるものにして其の今日に遺り居るものは適者生存の理に因るものなれば今日の世に遺る時代ものゝ近時の作に優るもの有るは又怪しむに足らざるなり。近時の作は想像に乏しくして趣向は拙なり、猥褻に富みて優美を缺き、變化も無ければ和合も無く、只管に凡俗を事として下等なる人情に訴ふる者多しと雖も、時代ものに至つては大いに之と異なり、想像に富み猥褻に乏しく、變化ありと雖も而も和合を存し、高尚にして且つ優美なるもの比々其の類多し蓋し昔の作とても皆な箇樣のものゝみにはあらざりしならむ。今、名も知れざる作者も多く有りたることなれば、昔の作とても十に八九は近時の作の如く拙劣野鄙のものにてありしならむ。然れども今日尚ほ存する所のものは存すべき理由あつて存するものなるが故に、たゞ其の時代ものなる故を以て之を排斥せむとするはこれこそ馬鹿げたる沙汰の限りなり。

昔の作と近時の作との異同

遊女、遊女屋のこと

今日行はるゝ狂言に付て改むべきことの一は人の最も賤しむべき遊女や遊女屋のことを演ずることこれなり。今日までの芝居には舞臺へ遊女屋の樣を寫し出し、女郎買ひの所などを演ずること往々あれどもこれは明治前の人情では許せし所なるかも知らねど、明治の御世には最早全く許さぬ所なり。夫れ遊女遊女屋は必要害物なれば西洋諸國と雖も、法律上之を公認するを以て規則と爲せり。然れども流石は文明國だけありて一般輿論の之を排斥するは我が邦の比にあらざるなり。遊女遊女屋の話しなどは決して爲さぬことになり居りて、社會一般の交際上に於ては遊女だの遊女屋だのと云ふものは全く無きものゝ如くに爲し置き、苟くも女郎買ひを爲せしことなどが世間に知れたる者の如きは世人の爲めに擯斥せられて遂に人とッキアヒも出來ぬやうになるは如何にも賴もしき風俗なり。遊女や遊女屋のことは箇樣に擯斥して澄きたるものなり。舞臺へ赤格子づくりの遊女屋の體をしつらへ其の中に遊女が居ならびたる樣を演ずる狂言の如きは皇族大臣は言ふも更なり紳士紳商の恬として見るべきものにあらず、自今以後かゝることを舞臺にて演ずるは全く廢止すべきなり。頃日新富座にて演じたる彼の高野長英の狂言の如きは概して言へば先づ可なりなる出來なりしが、上等芝居に取りて最も著しき瑕なりと思はれたるは新宿遊女屋の場にてありしなり。殊に長英が遊女屋の

とを排斥すべし

高野長英の狂言の瑕

大滿團の上に居るの體に至りては觀る者をして長英の品格の野鼻なることを覺えしむる傾向あるものなればよしや眞の長英はこの位のものなりしかは知らねども、狂言の長英はかく野鼻なるものに致さぬが美術の法なりと思はるゝなり。かゝる醜觀は明治の劇場より放逐すべきものなり。既に前陳せる如く遊女遊女屋のことは成るたけ賤しむが文明社會の法なれば、我が日本も文明諸國に仲間入りをしたる上は、之と同等のツキアヒがしたくばひとり遊女のみならず藝妓と雖も一たび足を洗ひ立派に婚姻して、士大夫の北の方となりたる以上は格別鑑札を所持して藝者商賣を爲し居るうちは娼妓同然世人の最も賤しむべきものなり。內所のことはイザ知らず、公然世人の中に出でゝ坐席を共にすべきものにはあらざるなり。然るに近頃最も驚きたるは鹿鳴館に於てレメニー氏の大音樂會の催しありたるとき藝妓輩數名が大威張の御客樣にて內外紳士幷に宣敎師などゝ同室同席にて在りしこと是れなり。鹿鳴館は講談、演說、舞ひ、躍りの浚ひ、席料さへ拂へば如何樣なることの催しにでも少しも搆はず貸す如き一私有物とは違ひ、外國人との交際の爲めに政府にて建てられたる堂々たる高尙なる建築なれば錢さへ出せば藝者でも娼妓でも立派な御客で入り來ると云ふ如き催しに此の建物を使用せしむる

藝妓も亦擯斥すべし

藝妓鹿鳴館を汚す

は實に大いなる濫用と言はざるべからず。これ全く催主の不注意に出でしものにて將來宜しく防ぐべきの弊なり。而して此の世話人の日本人ならざりし如きは此の事に關して滿足の一なり。蓋し余輩の鄙見にては藝者たり娼妓たり文明の世に在ては靑天白日の身分にあらずして云はゞ日蔭の身の上なれば、かゝるものは公然世間へ出づべきものにあらざるが故にかゝるものゝことは文明世界の狂言や歌には決して作るまじきことなり。

今の芝居に行はるゝ慣習にして猶ほ改むべきことは血まぶれ騷ぎの仰山なることなり手傷を數多負ひ流血淋漓たる體にて立ち回りをやりたり、腹十文字にかきり七頭八倒の中にて腸を攫み出す如きことを演ずるは、上等社會の芝居には最も不適當のものなり。今日の役者の中にもこゝに大いに見る所ありと見えて、近來は切腹の場などは其の惨狀を見せずして屏風を以て之を蔽ひ其の中にて爲す如くに取り計らふものあり、眞に賴もしき改良なり。總て此の心がけにてやれば萬事よからむ。先年千歲座にて直助權兵衞の狂言の時に吹竹を以て兩手の指を一本づゝ折る樣を演ぜしが、かゝることは如何なる芝居に於ても決して爲すべからざるなり。皿屋敷の狂言の如きも之と同樣のものなり。總て切腹の場などは見せぬがよ

血まぶれ騷仰山過るの事

直助權兵衞の狂言の惨狀

今日の狂言にて見るに足るもの

けれども判官の切腹の如きは如何あつても見せねばならぬと云ふならば、其れは仕方が無きことゝするも成るたけアッサリと上品にやる樣にすべし。かの切腹の前に刀の切先を股に突きさし股を切つて其の切れ味を例す如きは下等社會の眼から見れば、如何にもよき樣に見ゆれども實はイヤミをつけ狂言を野卑にするものなればかゝることは注意して省くべきことなり。

仲光の狂言

狂言改良に關する點は先づ斯の如くなるがたゞこれのみにては在來の狂言中果して如何なるものが採用になるべきものなるか、其の邊に關して疑團を懷く者もあるべければ標準ともなるべきものを一二示して世の參考に供へむとす。蓋し在來の狂言中採用すべきものは決して少なからざるが、近年演ぜし狂言中にて余幷に演劇改良會員中數名が最も完全なるものと思ひしものは市村座にて中村宗十郎が演ぜし重の井新左衞門の狂言と新富座にて市川團十郎が演ぜし仲光の狂言の二つなり。新劇場をして此の二者の如きものを多く演ぜしむることを得ば、演劇改良の一部分は効を奏せしものと言ふべし。然れども余の此の二者を稱讃するは敢て身代りのことを好むにあらず、たゞ上品にして且つ情を含む所二者の如きものを好むのみ。而して此の二者の人をして感ぜしむることの斯の如くなりしものは、ひとり狂言のよき爲めにあらずして之を演ぜし役者の巧みなりしによるものも少なからざりしならむ。

音樂の事　チョボを廢すべし

芝居改良に際して幾分か音樂のことも改良せずむばあらざるなり。先づ第一かのチョボの制は宜しく廢すべきものと思はるゝなり、人形芝居ならば義太夫かたりが必要なれども人間芝居にてはひとり必要物にあらざるのみならず、却つて狂言を見、講釋を聽くの妨害となるものなり「樣の下には猶ゑつぼ」とチョボにて言つて呉れずとも、樣の下に斧九太夫が居て其身振を見れば其れで用は足りるなり「首見る役は松王丸」と義太夫かたりが言つて呉れずとも事は充分わかるなり。よき義太夫を聽かむ爲めには人形芝居なしに義太夫ばかりを聽く方がよし。よき狂言を見む爲めには義太夫なしに狂言だけを見る方がよからむ。チョボなしには狂言の分らぬ如き者は人形の身振りを見ずには義太夫が分らぬと云ふ者と同樣なり。今日の如くチョボで狂言の最中音樂を奏して狂言の妨げを爲さしむることは廢して、幕の間に優美なる音樂を奏して見物の快樂を增す方がよからむ。其の音樂の性質に至りては猶ほ他日卑見を陳述すべし。

クロンボの事

瑣細なることなれどもこゝに一言すべきはクロンボの制なり、狂言の最中クロン

ボが人には見えぬ積りでチョコチョコと舞臺へ出て來り死骸を片付けたり衣裳を直したりするは實に見苦しきことなりかゝることは高尚なる芝居には決して有るまじきことなれど、これも此の際他の惡習と共に改良すべき一事なり。

以上は演劇改良に關して余がかねて懷ける所の卑見なるが、近頃演劇改良に關して種々の論も出ることなれば余も聊か持論を吐露して世の參考に供へむと欲し則ち本論を草したれども、余は演劇改良會員の一人なるが故に本論中或は余一己の考へに屬する如き說を以て演劇改良會の說の如く看認めらるゝことも無しとせざれば、其誤解を避くる爲めに本論を名づけて「演劇改良論私考」と言ふ。（公刊）

音樂の改良に就て

（明治三十二年應和會に於ける演說）

本會は音樂に熱心なる諸君が音樂の改良發達の爲に開設をせられた會であると云ふことでありますそれで此前の會の時にも出席しろと云ふことを或る會員から御話がありましたが差支があつて出られませぬでした、然るに今日又會があるに付いて出席しろと云ふ御話がありました、併し今日は種々差支がありまして、諸君の有益なる御演說もありませうし、又種々面白い音樂なども段々とあることであらうと思ひますが、それを拜聽することが出來ませぬのは甚だ遺憾に存じます、併し本會に對して一言祝詞を述べ且つ聊か希望を述べやうと思ふ。

本會の如く音樂の爲に熱心なる諸君が團結して、さうして音樂の發達進歩を計られると云ふ會は、他にはまだないやうに考へて居ります、是まで音樂會と云ふものがありまして音樂其ものを奏すると云ふ會は大分ありまする、けれども音樂奬勵の爲に、音樂發達の爲に特に其目的を以て出來て居る所の會と云ふものは、本會が或は唯一のものであらうかと思ひます、而して唯今委員の報告に依りますると云

ふと、まだ盛んであるべきのに思ふ樣に盛んでないと云ふ大いに嘆息の言もありましたが、併し物事は微々たる所より始つて段々と盛大になつて行くと云ふことが順序なのでありますそれ故に此會の如きも創立以來まだ日も淺いことでありますに依つて、今日は微々たるものであつても、年一年に盛大に赴いて行く、其事業も擧つて行く、有益なる論說も出て之を實行することにもなると云ふやうな時が追々に來ることであらうと思ひます、デ今日御集りになつた諸君は、此少數なる中に御加りになつて居る諸君でありますから、諸君の御熱心の程は感服するのであります、此御熱心を以て益〻此事業に從事せられ、尙ほ熱心なる者を集めて此會を段々と盛んにせられて、種々樣々な音樂上の問題などを討議して、さうして進步改良を計られることになるであらうと云ふことは我輩の疑はぬ所であります、此會の如きは我邦の音樂の發達の上には必ず著しい功績のあるものとなることは疑はぬ所であります。

それからして此音樂のことも繪畫彫刻等の美術と同樣に、今日の所では我邦ではまだ問題である、疑問である、繪畫の如き彫刻の如きもどうも西洋風のものは、之を作る所の者は熱心になつて作り出しても之を社會が歡迎することの熱度が實に低いものであるやうに思はれる、日本の美術品であると云ふと非常に歡迎されて、さうして展覽會などに出品があつても求める人が中々高價の物でも之を買つて行くことが實に多い、上野の展覽會でありましても、谷中の展覽會でありましても、日本の美術品の賣れることは中々盛んなものである、之に反して油繪の方、昨今展覽會のある白馬會の如きでも、油繪の方では新派と云ふやうな譯で、油繪の方で氣炎を吐いて居る人達が團結して居る會である、昔からの派から見ると趣きも一層面白いやうに先づ其人達は言つて居るのである、併し社會が歡迎することはどうであるかと云ふと、其熱度が低いやうである、白馬會の出品を買ふ者は甚だ少ない、谷中の美術院のものと白馬會のものとの世間の歡迎の仕方と云ふものは餘程違ふことである、世間が歡迎することに於てさう云ふ相違があるから、それに依つて優劣を極めると云ふことは出來ない、其優劣は容易に分るものでない、それで之を人が歡迎するとか歡迎せぬと云ふことは種々の事情があつて……美術上に於ける所の優劣と云ふことの外に種々の標準に依つて決定せられることであらうと思はれる、さう云ふやうな事情でありますからしてそれに對して優劣の斷定を俄かに下すことは出來ぬが、兎に角茲に歡迎せられる、せられぬと云ふことの事實

は存在して居るのである、之と等しいことが音樂に於てもある、音樂者も、西洋流の音樂者も段々と出來て來て、隨分長い間年期を入れて相應なる音樂者であつても、音樂の純粹なる美術上の標準から言ふと隨分優等なる者があつても、世間で歡迎することに於てはそれ程優等なる者でないと云ふ者を大いに喜ぶと云ふやうなことがある、其事情と云ふものは種々樣々あつて、特に音樂の優劣には因つて居らぬことであらうと思はれる、それであるに依つて將來西洋流の油繪、繪畫等が成立つて行くと云ふものはどう云ふ事情の下に成立つて行くか、音樂が將來西洋流のものが日本に行はれると云ふものはどう云ふ事情の下に行はれるかと云ふことは一つの問題であると思はれる、それであるが此美術と云ふものも、唯美術として美術上の製作物として優等なるものであれば、必ずしも人が之を贊成する歡迎すると云ふものではないと云ふことは、是は隨分あるのである、が美術の存在して行くと云ふものも矢張社會の人の心に叶ふ、社會の人に需用と云ふものがあつて之に應ずる所のものでなければ到底行はれぬと云ふことがあらうと思はれる、人の心を喜ばせる、且又人の必要と云ふものを充たすことが出來ると云ふものであれば是が段々と行はれて往くことであらうと思はれる。

それで先づ西洋の繪畫彫刻に就て考へて見まするとと、繪畫彫刻と云ふものは西洋のは中々不景氣である、不景氣であるが其中どう云ふ所に於て段々と位置を占めて來るかと云ふと、西洋の繪畫彫刻が最も適したる所に於て勝利を得て來るのである、それは何であるかと云ふと、此銅像と云ふやうなものゝ場合に於ては西洋の流義のものが中々行はれて來るやうである、又畫像の如きは油繪でなければいかぬ、日本畫では到底人の肖像と云ふものを描くことはむづかしい、到底油繪ほどは良く出來ぬのである、依つてあの側に於ては油繪には敵が無いと言つて宜いも、のであらうと思はれる、併し其外の花鳥であるとか、山水であるとか云ふものに至つては中々西洋流のものが勝利を得る譯には往かぬやうである、それからして又西洋流のものと日本流のものとの考が、どちらも狹隘な考を持過ぎて居るやうに思はれる、日本畫の方では西洋畫をまるで許すべからざるもの、斯う言ふものは到底日本には不適當なものであると云ふ考、油繪の方であると云ふと日本畫を潰して仕舞はなければいかぬと云ふやうに考へて居るのが普通である、中にはさうも見て居らぬものがあるが多くさう云ふ考を持て居る、是が或は間違ッて居りはせぬかと思はれるのである、と云ふのは或は日本の繪畫も改良して幾分か發達せしめ

なければならぬ、西洋の繪畫の如きも純然と西洋流のものでなしに、日本には日本のものとして之を用ひることにしなければならぬのである、日本の國の油繪としなければならぬ、それに就ては是までのものよりも改良を加へて特種のものを日本から一つ作り出さなければならぬと云ふやうなことでありはせぬかと思はれますが、まだ其邊は考中でありますが、或はさう云ふことではないかと思はれる、それから音樂の如きも西洋の音樂が行はれぬと云ふが、或る場合には西洋の音樂が唯一に行はれて之に敵無しである、それは何であるかと云ふと樂隊と云ふものである、樂隊は日本の音樂では迚も往かぬ、それから又軍歌と云ふもの、軍歌は日本の音樂では迚も往かぬ、斯う云ふ場合に於ては、モウ西洋流の音樂と云ふものが全然勝利を得て居るのである、而して將來又どう云ふ所に於て西洋の音樂と云ふものが行はれるやうになるかと云ふと、廣く多人數の者に愉快を與へると云ふやうな場合であるとか、多人數の者に莊嚴なる感情を起さしむる、多人數の者に悲哀なる感情を起さしむるであると云ふやうな、そう云ふやうな機會には西洋流の音樂と云ふものが段々行はれて來ることではないかと思ふ、日本の音樂と云ふものは、多くはどう云ふ途に是まで利用されて居るかと云ふと、或は少數なる人の幾分か獵藝的の快樂を滿足させるやうな場合に多く行はれて居ると云ふやうなことがありはせぬか、それで音樂の用ひられる所の機會、どう云ふ場合に音樂が用ひられるか、其場合に依つて、或は日本の音樂が適した時もあるし、西洋の音樂が適した所もあるだらうし、又西洋の音樂も日本に應用するには幾分か日本流に化して來なければならぬと云ふやうなこともあるであらうと思ふ、それから日本の音樂も是までは誠に不都合なる所の文句や何かぐあつたが、之を今後に於て使用する日には、どうしても改良を加へて來なければならぬと云ふことになる、それで社會の進歩と共に日本の音樂の如きも必ず改良して行くものであらうと思はれる、日本の音樂は全然廢滅に屬すべきものであると云ふやうな考を持つて掛ると云ふのは、或はどう云ふものであらうかと思はれる、西洋の音樂の通りのものを之を其儘でソックリ日本に入れゝば宜いと云ふ考であるのもどうであらうかと思はれる、其邊は兩者共、日本の音樂に關しても、西洋の音樂に關しても、大いに研究をせなければならぬことであらうと思ふ、各〻適當なる用ひ場所がある、學校などで言ふと、學校ではどうしても西洋の唱歌でなければならぬ、日本の歌の常盤津とか清元とか長歌とか云ふものをやる譯には往かぬ、日本の音樂の好きな人でもさう云ふ勇氣は迚

も無い、それであるに依つて、どう云ふ時にどう云ふ音樂が適するかと云ふことを考へて、さうして成るべく西洋の音樂は西洋の音樂の適したやうな所に用ひて往くやうに計つて往かなければならぬ、將來さう云ふことに段々となつて行くだらうと思ふのであります、さう云ふことに就ての研究と云ふものは音樂者もやるが宜し、又それに就ての種々な說を提出すると云ふことは、本會の如きものに於て、段々と意見を闘はして試るやうなことになつて行つたらば宜からうと思ふ。それで音樂のことに就ても又美術のことに就ても色々御話をしたいこともありまするけれども、今日は先刻申した通りに他に約束がありまして行かなければならぬから、極くちよッとした一つのことに就て意見を述べたゞけであります。（公刊）

漢字を廢すべし

（明治十七年一月假名の會の總會合に於て爲したる演說）

會長、御婦人方、殿原、いづれにも御存の通り、西洋諸國の人の宗旨は耶蘇敎なり、而て今日勢力ある耶蘇敎の宗派を大別すれば、則ち「ロウマン、カソリッキ」敎、「プロテスタント」敎、「グリーキ」敎の三宗派なり。此三敎の中にて最も勢力の强きものは「ロウマン、カソリッキ」敎と、「プロテスタント」敎なり。又此二敎の中にて「プロテスタント」敎は最も開化したる者、最も智識に富む者の信ずる宗旨にして、「ロウマン、カソリッキ」敎は概して云へば、智に乏しき者の信ずる宗旨なり。則ち「プロテスタント」敎は英人の宗旨なり。獨逸人の宗旨なり。スコットランド人の宗旨なり。佛人中の智識に富む者の宗旨なり。「ロウマン、カソリッキ」敎はアイルランド人の宗旨なり。イスパニヤ人の宗旨なり。佛人中頑固なる者の宗旨なり。今日何學を論せず大學者と稱せらるゝ所の人々は、全く耶蘇敎を信せざる人なるか、然らざれば「プロテスタント」敎を信ずる者の中に最も多くして、「ロウマン、カソリッキ」敎を信ずる者の中には至て尠なし。乍去今日こそ「プロテスタント」敎は斯の如く盛大を極はめたれども、今より四五百年以

前には歐羅巴は、全く「ロウマン、カソリッキ」敎の歐羅巴にてありたるなり。「プロテスタント」敎抔と云ふ宗旨を信ずる國としては一國もあらざりしなり。實にや當時羅馬法王の權威は最とすさまじきものにて、如何なる帝王と雖も、一度法王の意に逆ふて爲に破門せらるゝ時は、臣民は中に及ばず、妻子眷屬にまで見はなさるゝと云ふ最とおそろしき目にあはせられしが故に、羅馬法王には諸國の帝王も皆二目も三目も置きたる如き情實にてありしなり。特り法王の權威のみ斯の如く熾なりしにあらず。之に從ふ僧侶達の權勢は亦隨て熾なることにてありしなり。而て羅馬法王と、其配下の僧侶社會に斯の如く熾なる權勢のありたるは、全く當時の人が一般に「ロウマン、カソリッキ」敎を奉じたるに因るとなれば、「ロウマン、カソリッキ」敎に世人の背かざらんことを欲して、法王の、苦慮なせるも固より怪むに足らず。就ては世人の「ロウマン、カソリッキ」敎に背かざらんことを欲して、法王の使用なしたる方便は多くある中に、其一は則ち世人に經文を讀ませぬ樣に爲したること是なり。それには又如何なる工夫を用ひたるぞと云ふに、世人に讀めぬ樣なる語を以て經文を綴らしめたるなり。則ち經文は「ラテン」語にて之を認めおきたり。されば經文を讀みてはならぬと云ふ譯にはあらざりしも、六ケしき「ラテン」語を學びたる者にあらざれば、讀みたくても經文を讀むことは出來ず。當時「ラテン」語を學ぶ者は今日より多かりしとは雖も、それでも各國共に其人民中「ラテン」語を解する者は極めて僅なりしが故に、耶蘇敎を奉ずる者の中にて經文を自ら讀みて僧侶の說く所は經文に載る所と合ふや、僧侶の云ふ所には何程虛言がありや否を、自ら判斷することの出來る如き者は最と尠なかりしなり。斯る有樣なりしは僧侶の爲には如何にも都合よきことにてありしなり。宗旨の問屋は羅馬法王一人にて、之を賣捌く僧侶の外には、經文を讀得る者は尠なかりしが故に、耶蘇の敎には全く戾りたることを云聞せられても、エメン、エメンと云ふて難有がりて居らねばならぬ仕儀にぞありつる。御客の眼を塞ぎ置きて品物を賣附けんとする商人がありたらば、それは實にふとき奴なり。羅馬法王は取も直さず斯の如き商人なり。併し馬鹿な奴は難有和尙樣だと其足までをなめる者が澤山あり。世人の眼が開かぬ樣にと法王と、其手下の族が心配したるも實に尤もの至なり。乍去時の勢は致方なきものなり。千五百年代の中頃に至りて、經文は竟に各國の語に翻譯せらるゝに至れり。且又此頃恰度印刷の發明がありたるが故に、國々の語に譯されたる經文は忽ちに耶蘇宗徒の中にひろがりたり。こゝに於て世人は耶蘇の敎を自身に知ることの出來る樣になりたり。こゝに於て

耶蘇宗徒は僧侶が是まで何程うそを云ふて居りたるかを銘々に判斷することの出來ることゝはなりたり。各方にも御承知かは知らねども、羅馬法王は至て深切なる人にて、昔より帳面を控へて居りて、天下の書物の中にて讀みては門徒の爲に惡き者と認むる者は、一々其帳面に載せて門徒に之を讀むことを禁ずる定なり。併し餘り深切すぎて昔より學術をすゝめ世の開化を助くる如き書物は其帳面に書載せられぬは稀なり。斯の如き書物は門徒は讀むことは出來ぬ樣になりて居るなり。蓋し此帳面の初て、出來たるは、千五百五十九年にポール第四世と云ふ法王が、各國の語に翻譯して出版せられたる經文を禁じたる時なりと云へり。其時法王は其禁じたる經文を手をつくして取あげ、一々之を燒すてたり。乍去人情は何地も同じことなれば、開けては惡いと云はれたる玉手箱は開けて見たく、のぞいて惡いと云はれたる節穴は、のぞかずには居られぬ如き者が多き故に、羅馬法王が經文を取あげ樣としても、其手を喰はぬ者が中々澤山ありて、其人達が自身に經文を讀みて見ると、これまで僧侶から聞き居ることゝ違ふこともあれば、僧侶より絶て聞きたることもなきことまでが載て居ることなれば誰も彼も相競ふて經文を讀む樣になりて、法王は大に信用を失ひたり。是に於て羅馬法王のみを耶蘇教の問屋と爲し置くことに不承知を云ひ出したる者が多くあり、終に歐羅巴大半は「プロテスタント」となりて法王に背きたり。此に由て之を觀るに各國の言語に經文の翻譯せられたるは、法王並に其手下の僧侶の爲には此上もなく不都合のことにてありしなり。されども「ラテン」語を讀むことを知らぬ耶蘇宗徒に取りては如何、自分達にも分る言語を以て綴られたる經文の出來たるは不便なることなるか。決して不便なることにてはあらざるなり。併し英人の爲には最も大事なる經文を英人に分らぬ言語にて綴りて置き、佛人の爲に最も大切なる經文を佛人に分らぬ言語にて綴りて置くのが宜いと云はん如き者は、特り羅馬法王と其子分の僧侶達のみにあらず、斯の如き者は今日、我邦にも澤山あり。日本の書物を假名にて綴らんことを不便なり、不都合なりと云ふ人達は則ち斯の如き者なり。日本人に讀易い假名にて日本人の讀むべき書物を綴らんことを不便だと云ふ人は、英人の讀むべき書物を、英人に讀易い英語を以て綴らんと云ふを不便だといふ人と、其馬鹿加減は同じ者なり。併し今日我邦の書物を假名にて綴らんとを不便だと云ふ人達は決して馬鹿者にはあらざるなり。其人達は中々澤の分つた人々なり。尠なくとも彼の羅馬法王と其子分の僧侶位は譯の分つた人々なり。羅馬法王と其手下の僧侶達は、何故に諸國の人に分る言

語に經文の翻譯せられんことを拒みたるぞ。全く自家の爲に不都合なること多き故にてありたるなり。我邦の漢字を廢せんと云ふことに不同意なる人々は、何故に不同意なるや。全く自家の爲に不都合なる事の多きが故に外ならざるなり。

我邦人中に漢字を廢しては不便なり、不都合なりと云ふ者多くあれども、其不便不都合とは誰の不便不都合ぞと尋ぬるに、其不便不都合とは全く自分達の不便不都合のみなり。假名の會の諸君と雖も特に自分達の不便不都合をのみ圖られんには漢字を廢せんは不便なり不都合なりと云はれん如き者も定めし多くあるとならん。併し諸君の云はるゝ便利たり都合たり、決して數年の星霜を費して漢字を學び得て、之を自由自在に讀書することの出來る者の便利都合の謂にあらざるなり。今日漢字を知らざる數百萬人の便利都合の謂なり。今より以後我邦に生れ出づる千億萬人の便利都合の謂なり。國の開化の爲の便利都合の謂なり。西洋諸國と競爭せん爲の便利都合の謂なり。今日漢學の敎育のみある人々に取りては、漢字を廢せんことは固より不便ならん、それは此方にても百も承知なり。今日我邦には漢字を讀習するを知る計の故を以て、好き地位を占めて居る者が澤山あり。新聞記者でも役人でも民權家でも其中で威張て居る人達は抑も如何なる敎育を受けられたる人なるか、如何なることを知らるゝ者なるや、敎育とては漢字の敎育より外には藥にしたくも、外の敎育は受けられたることなく、知て居らるゝことは、かくの多き字をよみかきすることに達者なるのみにて、冗長の文を綴り、あたら白紙を惜氣もなくほごにすることを知て居らるゝより外に知て居らるゝことはなき人々が多し。毛唐人には分らぬ程六ヶしき詩文を作ることは知れども、物理學や、化學や、地質學や、植物學や、動物學や、生理學に至りては中學生徒は云ふも更なり、小學生徒にもはるか及ばざる如き者が多し。何樣斯の如き人々に取りては漢字を廢せんは一方ならぬ不便の事にてあるならん。株が上るならん。顯がひるならん。上等社會の人に漢字を廢するは不便なりと云ふ人の多きは、固より怪むに足らざるなり。去りとて此人々とて決して故意に天下の爲も顧ず私利を營まんとせらるゝ如き惡人にもあらざるならん。羅馬法王並に其手下の僧侶とても故意に私利を圖りし者は、決して多くはあらざるならん。凡そ誰にても自分の爲に惡き事は、他人の爲にも惡き事ならんと思ふは一般の人情なり。羅馬法王は我より外には耶蘇敎の眞意を解する者はなきことゝ思へり。故に自分の手下の僧侶に就て敎を受くるにあらずんば、神の道を知らん事は出來ざる事と思へり。世人がみだりに經文を讀むは却て邪道におち

ゐるの基なりと思へり。故に世人の廣く讀得べき言語に經文の譯されんことは甚だ憂ふべきことゝ思へり。今日我邦の漢字を廢するは不便なりと云ふ者の如きも、之を廢するは己の爲に不便なること多きが故に、他人の爲にも亦不便多きことゝ思へる者なり。

或る人の爲には如何程不便を生ずるとも、天下の爲に便利ならんことは行はずんばあるべからざるなり、今日の人の爲には如何程不都合多きことゝ雖も、之を行ふ時は百萬年の後までも都合よきことゝ認められたることは、勉て爲さずんばあるべからず。假名嫌の者の所謂不便の如き不便を生ずることにして、維新以來行はれたること夥多あり。驛遞局の設立せられて郵便の法の整頓したるは天下萬民の爲には此上なき便利のことなれども、私利を專にする舊來の或る飛脚屋は實に不都合極はまることゝ思へるならん。是は政府の專賣なり、民の自由を害する仕方なり、天下の一大事なり、斯る事は自由國には有間敷きことなりと思へる者も、定めしある事ならん。併し驛遞局は立てねばならず、郵便の方は整頓せずんばあらず。鐵道の出來て滊車の走るは舊來の宿々の者の爲には此上なき不都合のことなり、宿々の者は活路を失ひ、宿は全く衰微せん。宿々の人は宿々が衰へれば天下も隨て衰へることゝ思へるならん。世は實に末なりと思へるならん。併し鐵道は出來ねばならぬなり。滊車は走らねばならぬなり。封建の廢せられ世祿を取上られたるは士族の爲には此上なき不便なり。併し喰つぶしのへりたるは天下の爲には甚だ都合よきことなり。大小を取上られて切捨て御免抔云ふことのなくなりたるは士族の爲には至て不便かは知らねども、にんじん牛蒡同樣に切捨てにされる樣の人達に取りては、斯ることのお廢止になりたるは何より結構のことなり。士族の爲には大小がさせて、切取强盜武士の習抔云ふ主義の行はれたらんには、それこそ何より便利なることにてあるならん。斯る主義の行はれたらんには勿體なくも大職冠鎌足の子孫だの、淸和天皇の後胤だのと云ふ人の人力車夫に落ぶれて、家柄にも耻ぢず一錢の蠟燭代をお客にねだる抔と云ふことは爲さずとも濟むことならん。併し切取られる身分の者の爲には士族は如何に落ぶれ樣とも、切取られぬのが萬々都合よし。

余を以て見るに漢字を廢しては不便なりと云ふ者多くあれども、假名を讀み書きするに所謂不便とは、漢字を讀み書きするには既に達者なれども、其論を聞くに其はまだ不熟練なる者の覺ゆる不便にして、其他の不便は甚だ尠なし、假名の會の仲間には大槻文彥君の如く、自ら假名狂氣と稱せらるゝ假名の會の高山彥九郎氣取

にて居らるゝ先生のあられて、假名のみを用ひては不便なりと云ふ說は、既に之を十分に打平げられたれば、某の如くそれ程の狂氣にもあらぬ者が、今更喋々するにも及ばざることなれども、敵は大勢身方は小勢のことなれば、俄に勝を得んことは中々六ヶしく、攻擊の出來る丈敵を攻擊せねばならぬなり。故に御迷惑は百も承知なれども、諸君も假名狂氣の仲間のことなり、何も假名の爲なれば御迷惑でも反對論の大略と、某の駁論の大略とを一通り御聞下されんことを願ふなり。

(第一)假名ばかりを用ひんと云ふ說を非とする者の、賴みて以て根據となし、假名者流を攻擊するに最も好き點なりと思ふものは、同音にて意義の違ふ語は漢字を用ひれば、一々其區別は立つものなれども、漢字を廢して假名のみを用ひん時は、何が何んだか全く混雜してしまふならんと云ふこと是なり。殊に漢語には同音にして意義を異にするもの多くあるが故に、漢語まじりの文章を假名のみを以て綴らん時は、全く何だか分らぬべろ〳〵になるならんとは、是れ反對論者が最も堅固なる城の如くに思ふ所の論なり。然れども余を以て見るに、此論たる一を知て二を知らざる者の論なり。其故は(第一)同音異義の語を假名にて綴りて、區別が立たざる譯ならば、同一の字にて種々の意義ある漢字を以て綴りても、區別の立たざることは同

樣にてあるべき筈なり。今漢字を見るに同一の字にて種々の意義あるもの實に多し。例へば「强」の字の如きは「ツヨシ」「スコヤカ」「ツトム」「シイテ」等の意義あり。「露」の字の如きは「ツユ」「アラハル」等の意義あり。「朔」の字の如きは「ツイタチ」「ハジメ」「キタ」等の意義あり。「行」の字の如きは「クダリ」「ツラナル」「ヲコナヒ」「ユク」等の意義あり。「經」の字の如きは「フル」「ツネ」「タテ」「ノリ」「クビル」「タヾチ」「タテスヂ」「ヲサム」「イトナム」「ハカル」等の意義あり。其他枚擧にいとまあらず。英語の如きも同音の語にして種々の意義あるもの甚た多し。例へば同じく「フライ」と云ふ語にして、「飛ぶ」「ハレツスル」「ニゲワシル」「アダル」(紙鳶抔を)「乘ル車ノ一種」「輪ノ一種」「旗ノ一部」「蠅」「磁石ノ一部」「印刷機ノ一種」等の意義あり。同じく「フート」と云ふ語にして「足」「寸尺ノ名」「步兵」「詩ノ行ノ一部分」「オドル」「アユム」「基礎」「足ニテトル」「フム」「ケル」等の意義あり。同じく「ハング」と云ふ語にして「ツルス」「クビククル」「カンガヘル」「ナガビク」「ヨリスガル」等の意義あり。其他同音同綴の語にして夥多の意義あるもの枚擧にいとまあらず。實に英語には唯〻一の意義のみの語は甚だ尠なし。斯く英語には同音にして、夥多の意義ある語の多きが故に假名嫌の人の考に從へば、英人も竟には羅馬字を廢して漢字と出掛くべき譯なり。併し今日までは英人が斯の如き氣ちがひになりたることは、今に於て聞かざる所なり。好

しや英人が羅馬字を廢して、漢字を用ふることあるも、實は少しも益はあらざるならん。何となれば既に前に述べたる如く漢字にも同字にて種々の意義あるもの夥多あるが故に、英人が羅馬字を廢して漢字を用ふると雖も、つまり五十歩百歩どころではなく五十歩五十歩で、彼所に區別の立たざる論ならば、此所でも區別は立たざる筈なり。(第二)日本語には同音にて意義の異なるもの多きが故に、假名のみを用ひては區別が立たなくなると云ふなら、日本人の談話が互に分るは如何なる譯なるぞ。假名では分らぬと云ふ人達は、日本人の談話は分らぬから皆啞者になりて、漢字を以て筆談と出掛くべき筈なり。支那人の談話は日本人の談話よりも尙は分らざる筈なり。支那人は決して口をきくべからざる者なり。漢字と云ふ最と結構なるものがある事なれば、支那人の爲には何もかも皆筆談でやるのが至極便利であるならんに、日本人も支那人も啞者と出掛て筆談と爲さゞるは、何かそこには不便なることがあることゝ思はるゝなり。論者は同綴の語でも話ならば分れども、假名で書ては分らぬなり、何んとなれば同綴の語でも意義を異にするものは、話ならば音節若くは調子に異同ありて、一々すぐ區別は立てども、假名で書ては斯の如き區別は全くなくなるが故に、實に混亂を極はむるならんと云はんが、余を以て見るに話にでも全く同音のものにして、意義の異なる言語決して尠なからざるなり。彼の「橋」と「箸」の如きは東京抔に於ては全く區別なきにあらねども、「橋」と「端」に至りては少しも區別なきが如し。又「蜂」と「八」と「鉢」とは共に「ハチ」なり。口にて「ハチ」とのみ云はんには「蜂」のことだか「八」のことだか「鉢」のことだか少しも分らねども、それでも話は分るなり。英語の如きも亦然り。特に綴の同じきのみならず、音節より調子に至るまで全く異同なきもの其數尠なからず、前に云ひたる「フート」の如き種々の意義はあれども、其音聲に至りては少しも異同あるなし。又「マーチ」の如き「三月」と云ふ義の時も「進ム」と云ふ義の時も、其音聲は全く同一なり。又「メイ」と云ふ語の如き「五月」と云ふ義の時も、助動詞の時も全く同音なり。其他斯の如きもの枚舉に遑あらず。然れども話の中に斯の如き語を用ふることは多くあれども、間違の出來ることは至て尠なし。其話でよく區別の立つは全く前後の關係の爲なり。而して前後の關係に由て區別の立つ理は、話でも假名書でも少しも異同はあらざるなり。蓋し漢字と雖も前後の關係にするにあらずんば區別の立たざるもの夥多あり。唯一字「行」の字を書きて「ユク」と云ふことだが、「オコナヒ」と云ふことだが、當て見ろと云はれたら、如何に假名嫌の者と雖も定めし困るならん。「省」の字を一字書いたばかりでは「ツカサ」と云ふことだか、

「カヘリミル」と云ふことだか決して分らぬならん。假名者流がたは「タコ」「タコ」「タコ」と書きたらんには、成る程如何なる「タコ」のことだか少しも分らぬと雖も、文章の中にあらんには假令假名文にもせよ、前後の關係に由て「タコ」と「タコ」と「タコ」とは一々區別の立つものなり。即ち「かせが、よいから、こどもが、「タコ」をあげてゐる。」「こんにちは、さかなやに「タコ」が、たくさんあるから、ばんの、そうざいは、いも「タコ」にでもするがよい。」「こんにちは、じぎやうにつき、しごとしが「タコ」を、もつてまゐりました」と假名にて書てあつても決して間違は出來ざるならん。如何に假名嫌の先生と雖も子供があげる「タコ」と、魚屋に賣て居る「タコ」と、仕事師が地形をする爲に用ふる「タコ」と混同する恐はあらざるならん。

(第二)假名にては漢字の如くにすら〳〵と書くことは出來ざるなりと假名嫌の者は云へり。然れども其人達が漢字はすら〳〵と書けても、假名はすら〳〵と書けぬは決して一は漢字にして、一は假名なる故にはあらざるならん。全く漢字は幼少なる時より、常に書馴れたるものなれども、假名に至りては、それ程書き馴れざる故ならん。漢字と雖も最初より其人達にすら〳〵と書けたるものにもあらざるならん。隨分一畫一點毎に考へ〳〵書きたる時もありたるならん。今でも中々すら〳〵と書けぬ漢字も少しはあるならん。漢字を多く知らざるが故に常に假名のみにて書き馴れたる者には、假名のみにて中々すら〳〵と書くことの出來る者あり。婦人方の中には假名をすら〳〵と書く者も、隨分いくらもある樣に思はるゝなり。洋學者は皆覺のあることなるが、横文字を初めて書き習ひたる時には、横文字は中々すら〳〵とは書けぬものにてありき。初は横文字と云ふものは決してすら〳〵とは書けぬものならんと思へる計なりき。假名にてはすら〳〵と書けぬと云ふ人の如きは、そこで横文字は決してすら〳〵とは書けぬものならんと云ふて、横文字は止めにせんとする如き者ならん。笑止の至とこそ云ふべけれ。假名は縱に四十八字なり。漢字は數萬あり。如何程假名嫌の者と雖も、漢字を書習ふ程假名を書習ひたらんには、いくらでもすら〳〵と書ける樣になるならん。

(第三)假名而已の文章は漢字まじりのものゝ如くにすら〳〵と讀めぬと云ふ者あり。是も前條同樣の熟練によるものなり。漢字はすら〳〵と讀むことの出來るものにして、假名はすら〳〵とは讀めぬものなりと云ふ如き理はあらざるならん。讀みつけたらんには假名文と雖も必ずすら〳〵と讀むことの出來るものならん。漢文

と雖も決して最初よりすら〳〵とは讀めぬものなり。假名嫌の人と雖も、漢文は云ふも更なり、漢文まじりの文章と雖も、すら〳〵と讀む事の出來る者なりと保證しがたき者も隨分あるならん。假名嫌の者の中にも漢字まじりの文章をうん〳〵と、うなり乍ら讀む如き者も尠なしとせざるなり。假名文と雖も馴れさへすれば決して拾ひ讀にせずともすむものなり。其證據には、めし屋「そばや」「ごぜう屋」等の看版抔を拾ひ讀にする者は多くはあらざるならん。假名嫌の者と雖も空腹なる時に此等の看版を見たらんには決して拾ひ讀にはなさざるならん。蓋し讀馴れさへしたらんには假名而已を以て綴りたる文章は、皆此等の看版同樣に一目瞭然に讀み得べきものとなるならん。其證據には洋學者は皆覺のあることならんが、最初洋書を讀み習ひたる頃には一語々々に拾ひ讀になしたる而已ならず、一綴々々に拾ひ讀になさねばならざりしなり。然れども次第に上達するに隨ひて一綴々々に拾ひ讀にするに及ばざる樣になる而已ならず、一語々々に拾ひ讀にするにも及ばざる樣になるなり、特り一語々々に拾ひ讀にするに及ばざる而已ならず、中々長き文句と雖も一目して、すぐ其意を解し得ることの出來る樣に成る者なり。併し是は大に習ひ樣によるものなり、最初より常に變則讀にしつけたる者は、文意を解することは中々よく出來る者と雖も、兎角ぽつ〳〵と返り乍ら拾ひ讀にする癖のあるものなり、是に反して正則讀にしつけたる者は、精き事は前の變則先生に及ばざるも、大意を取り〳〵讀むことは變則先生よりは餘程達者にして、變則先生がぽつ〳〵一枚讀む間にはすら〳〵と二枚も三枚も讀み得るならん。漢學と雖も亦同樣にてあるならん。堂々たる漢學先生の中にて、洋學者が横文を讀む樣にすら〳〵と漢文を讀み得る者將幾人ありや。假名文を讀みつけざる者に假名文がすら〳〵と讀めぬからと云ふて、假名文は決してすら〳〵とは讀めぬものなりと云はん如きは、實に奇妙なる論法とこそ云ふべけれ。

(第四)甚だしきに至りては漢字を廢し假名のみを以て文章を綴ることにしても、たれにでも名文が書けると云ふ譯には行かざるなり、矢張習はずには名文は書けざるならん。されば假名のみを用ふることにしても格別益はあらぬならんと云ふ如き者往々あり。實に言語に絶えたる論とこそ云ふべけれ。論者は習はねば出來ぬとならば、如何程六ケしくても同じことゝ思へるが、游泳は習はねば出來ぬものなり。故に論者は游泳は石をしよつて稽古すべきものなりと云はんとするか。

(第五)假名にては文章が長くなり、紙のいることが非常に多くなるならん、漢字なれ

ば一行に書き終り得べきものも、假名にて之れを綴らんには二行にも三行にもなるならん。何んとなれば漢字なれば一字にてこと足るべき所も、假名にては二字も三字も用ひねばならぬもの多ければなりと云ふ者あり。一理なきにあらず。乍去是又よく考へざる者の論なり。成る程「林」と書く代に「はやし」と書き「男」と書く代に「をとこ」と書き、「蛇」と書く代に「へび」と書かんには、固より長くなることは長くなれども、長くなりても決して仔細はあらぬなり。何となれば長くなりたる代にはばが狹くなりたればなり。「林」「男」「蛇」の代に「はやし」「をとこ」「へび」等と書かんにはたてに紙のいることは增したるにもせよ、横に紙のいることはへりたるなり。又假名は漢字よりは餘程細くてもよきものなり。漢字より餘程細くても讀むに不都合なし。又餘程細くても書けるものなり。されば漢字の代に假名を用ひたればとて、字の大きさと形次第にて、强ち漢字雜りの文よりは假名而已のものが長くなると云ふ譯にもあらぬなり。

(第六)假名而已にて書くは漢字雜りにて書くより、筆數を多く動かさゞるを得ざるなりと云ふ者あり。此論たる會員大槻氏の既に十分駁せられたるものなれば、今更此論に就て喋々するを要せざるなり。特にこゝに一言すべきは漢字を書習ふ程いろは四十八字を書習ひたらんには、假名の方が却て漢字よりも書きやすきに相違なからんことは、既に前に陳べたる如くなるが、文字の性質より考へても、假名は漢字程力を費さずして書き得べきものなり。凡そ何の運動に限らず、單一なる運動は錯雜なる運動よりは爲し易きものなり。同じ分量の運動でも錯雜なる運動は單一なる運動よりは骨の折れるものなり。同じ里程の路でも直ぐなるものを走り行くのは曲りくねりたる路を走り行くのよりは、はるかにらくならん。針目の數は同じことでも眞直に縫うのと、右へ左へ上へ下へとまがりくねりて縫うのとは、眞直に縫う方が甚だらくならん。蓋し假名を數字書くのと漢字を一字書くのと、同じ分量の運動にても假名を書く方が、はるかにらくにてあるならん。假名を書く爲に要する運動は、重に上下の運動にて且つ甚だ單一なるものなれども、漢字を書く爲に要する運動は、上へ下へ右へ左へ殊の外錯雜なるものなり。同じ筆數にても漢字を書く方が假名を書くよりは餘程骨の折れるものなり。

(第七)又或る論者は何事も自然勢にあらずんば出來べからざるなり、社會の事の興起變遷するは則ち社會の大勢の然らしむる所にして、其中個々人の得て枉ぐる能はざる所なり。漢字まじりの文章は太古より行はれ來れる者なり。今假名の會の者

抔が兎や角と云ても、漢字は決して廢する能はざる者なりと。天下の大勢や自然の理をまる呑になしたる如くに立つるなり、併し何が自然の理にかなへるか、何が天下の大勢の向ふ所なるかは容易には分らぬなり。維新前に今日の如く、容易に封建の制度の廢せられん者なりと思へる者は將た幾人ありしや。明治の初に森有禮君抔が廢刀論を主張せられたる時に當てや、天下大概は昔より武士の魂と云ふ程のものを俄に廢せんことは決して自然の理に合ふことにあらず、數百年の國風を一時に變へんことは決して出來べからざるなり。日本魂の武士の大小を取上げん抔云ふことは特り天下の大勢のよくなし得べき所なり。個々人の力にては決して出來べきものにあらず抔と云へるならん。併し封建も廢せられたり。廢刀も出來たり。今では封建を廢するは自然の事なり、廢刀の行はれたるは天下の大勢の向ふ所なりし故なりと、云はぬ者は一人もあらざるならん。されば滅多にこれは自然の理に合へり、彼は天下の大勢に背けり抔とは云はぬものなり。滅多に智慧者ぶつて天下の大勢は個々人の得て枉ぐる所にあらず抔とは云はぬ者なり。個々人が大勢の一部分を爲す者にあらずとは誰が云ひたるぞ。社會は個々人より成立する者にあらずや。社會の事にして個々人の關係せぬ事は至て尠なし。水戸烈公の如き高山彦九郎の如き、西鄕隆盛の如き個々人が勤王主義を唱へ、王政復古を主張せられたればこそ、王政復古も出來たり。封建も廢せらるゝに至りたり。天下の大勢は個々人の得て枉ぐる所にあらずと云ふて、此等諸士が勤王主義を唱へらるゝことのなかりしならば、王政復古も封建廢止も何時に至て出來ることだか知るべからず。徒に大勢の至るを待ち口を開きて牡丹餅の入るを待つが如くには參らぬなり。畢竟賴山陽の如き、高山彦九郎の如き、個々人が勤王主義を唱へることが、封建制度を廢せんとか云ふ時は、斯る念慮は決して之を公に主唱する人々に限りて起るものにあらず、當時の人には之を公言することは知らざるも、同じ念慮の胸裏に起る者は夥多あるならん。凡そ世に久しく行はれたる事を此人や彼の人が廢すべしとか、除くべしとか云ひ出すは、年來の經驗によつて略〻其事の利害が人に分る樣になりたるか、若くは往時には社會の爲に必要なりしも、今は最早社會の爲に必要にあらぬことの人に分る樣になりたるが故なるべし。然れども公然理由を陳述して之を廢すべし之を除くべしと云はん如き者は、初は至て稀なるべし。多數は唯〻胸中に之を廢したし、之を除きたしと思ひ居る者ならん。蓋し多數は何事に就ても自己の考を公に陳述することの出來ざる者ならん。されば世に弊害多き事の行はるゝ時は、多數

は唯〻鬱々として世に不滿をいだくに過ぎざるならん。若し此時に當て何人に限らず其事に就て明なる思想を懷ける者ありて、世人に先立ちて其弊害を說き、之を廢し之を除かんことを主唱する者あらんには、多數は初て我が不平の源因が明に分り、主唱者は則ち多數が云ひたくも云ふことを知らざりし事を、明に云ふ者なれば、其說は忽ち天下の輿論となりて、除くべきことは除かれ、廢すべきことは廢さるゝに至るなり。マーテン、ルーサーが一度羅馬舊敎を攻擊して忽地新敎の起るに至り、烈公山陽等の如き者が勤王主義を主唱して、竟に王政復古を來すに至りたるは、共に同一の手續なり。最初は皆彼の人此人が彼れこれと云ひ出したるに始まれり。ルーサーにしろ誰にしろ、他人の心に少しも起らざる考を自分一人考へ出したと云ふ者はあらざるならん。全く世の變遷進化に由て漸次に世人の心に起り來れる思想を、他人に先立ちて發言なしたる者に過ぎざるならん。蓋し社會の事は何に限らず、時が至れば一人が發言し二人が贊成なし、次第々々と同意者が殖えて、竟に天下の輿論となりて行はるゝに至る者なり。最初一人二人と主唱する者がなき時は、竟に主唱する者はあらざるならん。今日假名の諸君の如く漢字を廢せんことを主張する者の出來たるは、全く自然の勢の然らしむる所なり。今日漢字を廢せんと云ふ者の既に斯の如く多きは、我邦人民が是までの經驗に由て漢字の不便を知り之を廢せずんばあるべからざる事と悟れるに由るなり。然り而して假名の會の諸君の如きは此事に就て既に明なる思想を懷かるゝ者なれども、世には斯く明なる思想はなけれども、私に漢字の不便を憂ひ之を廢せんことを欲する者、幾百萬あるを知るべからず。漢字を廢せんことを公然主唱する者にして既に斯の如く多人數なり。公然主唱することは知らざれども、余輩に同意なる者の多きことは固より知るべきなり。我輩の主唱する所は則ち天下の大勢の向ふ所なること疑なきなり。是れ決して虛言にあらざるなり。余輩を賛成なさん者の日一日多からんことは鏡にかけて見る如くなり。何んとなれば漢字を用ひることの不便は日一日に增加するものなればなり。何故漢字を用ひることの不便は日一日に增加すべきや、日一日に人の知らねばならぬことが多くなればなり。往昔西洋諸國と交通の開けざりし時の如くに學問と云へば、畫の多き字を讀み書きするより外にはなかりし時代に在りては、漢字を學ばん爲に數年の星霜を費すも、さまで害なきことなりしと雖も、今日は漢字の外に學ぶべきことが澤山あり。畫の多き字をならべて詩文を作ることさへ知て居れば、自身一人は大學者を氣取りて居りても、世人は最早斯の如き輩は學

者とは認めぬ如き時勢となりたり。今日は畫の多き字の外に衞生學あり、數學あり、物理學あり、天文學あり、動物學あり、植物學あり、心理學あり、論理學あり。漢字は知らざるも可なり。これ等の學問は學ばずんばあるべからず。昔日に在りては漢字を學ぶは、特に之を學ばんに爲に學ぶものゝ如くに思ひたる者も多くありたれども、今日に在ては漢字は思想を交換し學問を傳ふる爲の方便に過ぎざることを知る者多し。若し其方便にして之を學ばんには、多數の歲月を費さずんばあるべからざる如き性質のものにして、之を學ぶが爲に彼の眞の學問を學ぶ爲の時を大に減少する如きものならんには、此方便は一日も早く改良せずんばあるべからず。此方便たる漢字の如く六ケしきものにして、之を學ぶが爲に光陰を費さんには、到底西洋人と競爭すること能はざるならん。例へば西洋人は靴を穿ちて走るに日本人は足駄を穿ちて走るが如し。今の時に當りては宜く奮發して跣足にて走らざるべからず。將來尙ほ漢字を用ひんことを主張する者は足駄を穿ちて走るの人か。

偖此に人々の注意を要することあり。漢字を廢すると云ふことゝ、假名を用ふると云ふ事とは問題の相異ること是なり。漢字を廢せんことを主張する人の中には、或は之を廢したる上は羅馬字にするがよいと云ふ者あり。或は朝鮮の字は假名にも羅馬字にも優るものなり、宜しく朝鮮文字にするがよからんと云ふ者もあらん。或は日本は佛敎國なり。梵字にするにしかずと云はん如き者もあるならん。或はかれにうかれ出して國語を全く改め、英語を用ひるがよからん抔と云ふ者もあらん。又本會諸君の如くずッと着實に出掛け、我邦は言魂の國なれば漢字を廢する上は、我邦の文章は全く假名にて認むべしと云はん如き者もあるならん。蓋し今日假名組の斯く多きを以て見れば、兎に角一時は假名組が勝利を得んとする如く見ゆるなり。そこで既に諸君の如く我邦の文章は假名を以て綴るべしと決定せられたる以上は、更に熟考すべき問題數個あり。則ち左の如し。

(第一)假名を用ひるならば如何なる假名が讀みよきか。如何なる假名が書きよきか。今日までは諸君は出版にも筆にて書くにも平假名を用ひられんとせらるゝが如し。併し書くには平假名がよけれども、出版には片假名がよいとか、又は書くには片假名がよけれども、出版には平假名がよいとか云ふこともなしとせず。是はよく試驗して見ねばならぬことなり。

(第二)活字の形は如何なるが最も讀みよきか。たけのつまりたるものがよくはあらぬか。字の間は成る丈接近したる方がよくはあらぬか。横文字でも字と字との

間の除りあきたるは讀みにくきものなり。本會の如きは先づ活字の見本を幾樣も作りて篤と研究すべきなり。

(第三)通常の書物には如何程の大さの文字を用ふべきか。文字は如何程の限りまで小さく爲すも眼に害なきか。洋字に比せば大小の權衡は如何あるべきか等を考究せざるべからず。

(第四)本日諸君の如く此場に參集せられたるを見れば、實に本會の盛大なるを認知するに足れども、會員諸君と漢字を主張する輩とを比せば余輩の徒は實に僅々たるものなり。假令彼れに論據なしとするも此僅々たる人員を以て、量り知れざる多數の反對論者と戰ふは最も難事たり。此時に當て若し會員中に內破を爲すと云ふことのあらんには戰爭は爲し能はざるぞ。實に容易のことにては反對論者に打勝つこと能はざるぞ。宜く共同一致して力を盡して以て反對論を攻擊せざるべからず。余の考にては月の部だの雲の部だのが是までの樣なる雜誌を出版して、わづかに會員中に分たんよりは、假名の會より天下に向て新聞紙若くは雜誌を發行する方が優れりと思はるゝなり。又公衆を集めて演說をもなさゞるべからず。今日に在ては廣く天下の人に說きすゝむる工風が何より肝腎なり。

今日の如く月雪花の部門が立ち居りて、此部門の一に屬するにあらずんば、假名の會員たることの出來ざると云ふは實になげくべきことなり。斯の如き部門のあることなきに於ては假名の會員は今日の幾倍なるを知るべからず。世間には漢字を廢し假名而已を用ひんと云ふ主義を贊成して、假名の會員たらんことを欲すると雖も、部に屬さるゝを得ざるが故に、見合せ居る者甚だ多し。諸君篤と考へて見られよ、漢字を廢して假名書になさんと云ふ次は同說なれども、他の點に於ては多少異同のあらんは勿論のことなり。其異同たる決して月雪花の異同に止まらざるならん。若し是まで通り部門を立て置ねばならぬ譯ならば、雨の部、風の部、地震、雷、火事、親父の部までを置かずんばあらざるなり。部はなるべくは廢し度きものなり。

さて會員諸君を見渡すに、官權家もあり、耶蘇敎を奉ずる人もあれば、佛敎の人もあり、又神道者もあるが如く、種々の人種あり。官權家、民權家及び耶蘇敎、佛敎、神敎の徒の如きは常には喰合をも始めかねざる勢なるに、其政治宗敎の主義の異同にもかゝはらず、斯く一致せらるゝを見れば、此かな文字のことは最も重んずべく、最も大切なることにて、民權より大切に、佛敎より重く、又耶蘇敎よりも大切なるに由るな

らん。斯く人々が信ずる政治宗教の主義の異なれるにも關せずして、かな文字のことに一致して力を盡さるゝは實に喜ぶべきのことなり。斯る以上は部は宜く之を解き、一心奮勵して相共に反對論者を駁擊するに盡力せずんばあらず。諸君以て如何と爲す。（公刊）

三宅氏の文を讀みて百驚を喫したり

（明治十七年五月）

三宅氏の御論には實に驚き入りたり。仰の如く如何にも余は一驚を喫したりと云はんには、氏は定めし滿面に笑をふくみ鼻をひこつかせんとせらるゝならんが、實は余は僅に一驚を喫したるにあらず。二驚も三驚も四驚も五驚も喫したり。則ち例を擧げんに假名と云へば平假名のことを而已云ふと思はるゝに驚きたり。假名の活字は今日用ふる如き形のものに限ると思はるゝに驚きたり。三宅氏は〇〻〻馬〻〻と書せずして、日月山馬龜弓と書するは「いんてぐれいしよん」によるなりとは云はるれども、何の爲に此「いんてぐれいしよん」は生じたるか、其理を辨へられざるに驚きたり。氏にして其理を辨へられたらんには大に悟らるゝ所あらんに、然らずして得意顏をせらるゝに驚きたり。三宅氏は「假名は(一−1=5)にして漢字は(4−3=1)なれば漢字はやはり假名より遙に劣れども、假名と漢字とを合併すれば(5+1=6)となるを以て單に假名のみを用ふるよりは多く利あり」と云はるれども、唯合併とのみ云はれて如何なる割合に假名と漢字を合併すべきものなるや、之を明かに示され

ざりしに驚きたり。「三宅ゆう」と「三やけゆう」も「み宅ゆう」も合併は則ち合併なり。三宅氏は合併でさへあれば如何なる割合のものでも5+1=6となる如く一概に說かれたるは驚きたり。假名と漢字の割合の異同によつては必ずしも5+1=6とならぬ場合もある譯ならば、何故に5+1=6となるべき割合を明かに示されざりしか、甚だ驚きたり。自ら「三宅ゆう」と書せられたるを以て見れば、斯の如き合併こそ5+1=6となるものなれと思はるゝならんか。併し斯の如き合併は5+1=6とならずして却つて5+1/12=3なるに非ざる事を說明せられざりしに驚きたり。氏の如く假名は6−1=5なり、漢字は4−3=1なり故に之を合併すれば5+1=6となるなりと一概に云はんには、氏は何故に假名と漢字を合すれば5+1=6なり、羅馬字は8−2=6なり、故に假名と漢字と羅馬字を合併すれば5+1+6=12となるなり、宜しく三者を合併すべしと云はれざりしに驚きたり。朝鮮字には7−3=4の利ありと假定せよ、梵字には8−4=4の利ありと假定せよ、トルコ字には2−1=1の利ありと假定せよ、ヒブリュー字には5−2=3の利ありと假定せよ、シーリヤ字に6−1=2の利ありと假定せよ、フィーニシヤ字には5−3=2の利ありと假定せよ、三宅氏は假名と漢字を初として其他を悉く合併せんには5+1+6+5+4+4+3+2+2=26となるなり。宜しく之を悉く合併すべしと云はんとせらるゝ者の如くに、假名は6−1=5なり漢字は4−3=1なり二者を合併すれば5+1=6なるなりと、甚だ覺束なき計算づくで勝利を得んとせられたるに驚きたり。合併するの易きことゝ、合併して利あることゝは自ら異なる事實なることを悟られずして、假名と漢字の合併は故鄕の人々の親睦會を開くに似たり抔と逃口上を云はれたるに驚きたり。尙ほ此外にも驚きたる事あれども之を略す。（公刊）

漢字を廢し英語を熾んに興すは今日の急務なり

（明治十七年二月）

今日我邦の急務は何なるぞと問はゞ或は條約を改正して治外法權を廢するにありと云ふ者あらん、或は外債を募りて熾んに鐵道を敷設するにありと云ふ者あらん、或は佛敎を排除して耶蘇敎を弘むるにありと云ふ者あらん、或は海陸軍を擴張して軍備を嚴重にするにありと云ふ者あらん、或は漢學を熾んに興して儒敎主義を弘むるにありと云ふ者あらん、或は外人に雜居を許し內外の男女をして熾んに雜婚せしむるにありと云ふ者あらん、或は民權を弘張し租稅を減少するにありと云ふ者あらん、其他人々の見識に依つて今日の急務とする所は彼なり是なりと千差萬別ならん、蓋し右に擧げたる事共の中には實に今日の急務なることも固よりあるならん、去りながら余輩の卑見にては今日の急務中の急務共云ふべき者は漢字を廢すること〻我邦人をして西洋語を普通に學ばしむる事との二事なり、漢字の不便なることは今さら云ふまでもなきことなり、特に考ふべきは此不便なる文字は我邦に於ては決して廢する能はざる者なるか、斯の如く不便なる文字を用ひ續くるも海外諸邦と能く競爭し得べきかと云ふ二問題なり、余輩の考にては第一漢字は決して廢す可らざる者に非ず、第二漢字を用ひ續かんには特り外人と競爭せんことの至難ならん而已ならず、竟には邦の存立も覺束なし何を以て漢字廢す可らざる者に非ずとするぞと云はんに、我邦人の思想を表さんには漢字より外に方便のなからんには、漢字を廢さんことは固より出來ざるべけれども、既に便利なる假名あり又片假名あり天下には尙ほ便利なる羅馬字の如き者あり、斯る便利なる者のあるからは漢字を廢すべからずとは固より云ひ難し、蓋し漢語を表さんには漢字より便利なる者はあらずとは是れ漢字者流の常に口に唱ふる所なり、それ或ば然らん然りと雖も此說たる我邦にては漢語は多く用ひざるべからず、漢語は益〻增すべき者なりと假定せる者の說なり、然るに余輩は漢語を減少するの必要なることを見るも之を益〻增加せざるべからざるの理由を見る能はざるなり、漢字を用ふればこそ漢語は益〻增加すべけれ假名若くは羅馬字を用ひんには、我國の語は其字を以て表するに都合よき者に次第に變遷して之を以て表することの出來がたき漢語は漸々に跡を絕つに至らんこと何より見易きの理なり、我邦に今

日迄漢語漢字の行はれたるは固より止を得ざる事情に出でたることなり、何んとなれば我邦古來の開化は專ら支那より來れる者にして制度文物都て何事を論せず大概支那に由來せざるはなく、高尚なる思想は云ふも更なり日常器具の類に至る迄之を彼に採らざる者は甚だ尠なかりしが故に之を表するの支那語は勢ひ我邦に行はれざるなく、其語を表するの文字は勢ひ我邦人の用ふる所となりたり、且や制度文物道德經濟都て之を支那に採ることなりければ、苟も學者たり物識たらんと欲する者は必ず漢書を讀まざるを得ざりしが爲に國の開くるに隨て漢字を讀み書きする者は次第々々に增加せるが故に竟に今日の如き漢字國となりたるなり。それ、我邦の一時斯の如き漢字國となりたるは固より止むを得ざりしことなれども、我邦は永久漢字國にてあるべしとは決して云ひがたし、最初我邦の開化は支那に採れる者にもせよ、久しく時を經て既に、我邦の開化は支那の開化と自ら獨立殊別なる者となりたる上にては最初彼の開化を受取る最中の如く漢語漢字の用は甚だしき者にはあらざるなり、況や今日の如く我邦の知識は最早之を支那に仰ぐことは少しもなけれども、歐米諸國の開化は之をひた眞似に眞似て昔時支那より知識をまる取になしたると同樣に歐米諸國の知識をまるとりになさねばならぬ時に當つてや、昔時漢語を用ふることの必要なりし如く、今日は又歐米の語を用ひんことは必要なり、支那の事物は支那の語を以て表するは便利なるが西洋の事物の如きも西洋の語を以て表するはチンプン漢語を以て之を表さんより便利なる者尠なからざるなり、今日西洋諸國をして西洋諸國たらしむる所の彼の諸學術上に用ふる所の語の如きは十に八九は我邦在來の語の中には適當なる譯語のなき者なり、斯る場合に於ては直に西洋語を用ふるの便利なること尠なからず、然るに今の習として西洋語を直に用ふる時は至て分りよき場合と雖も、必ず六かしき漢字を幾字も組合はして何だか分らぬ譯語を作るを以て學者の如く思ふ者もあれば、愛國者氣取りで居る者もあり、實に愚の至りと云ふべし。

漢字を廢さん時は之に替ふるに何を以てせんやと云はんに、今迄の所にては假名にすべしと云ふ者が多くして余の如きも則ち假名の會の一人なれども、萬全の策は假名よりは寧ろ羅馬字を用ふるにあるならん、如何んせん羅馬字を用ひんと云ふ說を贊成する者の寡きを此說を贊成する者の多からんには余は斷然羅馬字にすべしと云はんとする者なり、羅馬字の便利なることは大日本學士會院中に其人ありと知られたる西周先生が十餘年前に既に證明せられたる如し、特にこゝに一

漢字を廢し英語を熾んに興すは今日の急務なり

言すべきは羅馬字を用ふる時は西洋語の未だ我邦に適當なる譯語のなき者は直に原語を用ふるに便利なること之なり。

漢字を用ひ續かんには西洋諸國と競爭せんことは甚だ六かしくして竟には邦の存立も覺束なしとは如何なる譯ぞと云はんに、我國は開化の度に於てはるかに西洋諸國に後れたる者なれば、彼と競爭せんことは既に至難なることなるに、若し我国むて漢字を用ひ居らんには益〻彼に後れ益〻彼と競爭せんことは出來がたくなるならん何んとなれば羅馬字と云ふ最と簡便なる者を用ふるが故に、彼に在ては知識を得るの道は極めて容易なりと雖も、我に在ては漢字と云ふ最と六かしき者を學ぶことは何より必要なれば知識を得るの道は漢字の爲に實に壅塞せられたりと云ふべし、されば我が漢字を學び居る間に彼は衞生學を學び得るなり、我が漢字を學び居る間に彼は理學を學び得るなり、我が漢字を學び居る間に彼は政治學を學び得るなり、我が漢字を學び居る間に彼は農學を學び得るなり。我が漢字を學び居る間に彼は工學を學び得るなり、斯の如き有樣なれば既に著しく彼に後れたる我は彼に追ひつかん所ではなく、却つて益〻彼に後れざるを得ざるなり、畢竟我邦人が漢字を學ばん爲に多數の年月を費すことを憂へざるは、我邦の開化は如何程西洋の開化に後れて居るか、西洋人と競爭せんことは如何に至難なるかを少しも辨知せざるが爲めならん、之をよく辨知したらんには漢字は一刻も速に廢すべきことを悟らんこと疑なし。

次に西洋語を熾んに興さんことは漢字を廢すると同樣に今日の急務なり、今日の如く制度文物百般の事物都て之を西洋に採る際に於ては西洋語に通ぜんことは我邦人に取りて何より必要なり、殊に我邦人をして西洋の事情に通ぜしめんことは今日の急務なり、今日の如く西洋の事情にうとき者の我邦人中に多きは決して悅ぶべきことにあらざるなり、西洋の事情にうとき者は西洋人の恐るべき者なることを知らざる者なり、西洋人の交るべき者たることを知らざる者なり、國權の振はざることを慨かざる者なり、國產の興らざるを憂へざる者なり、かる〳〵しく西洋人を侮りて却つて恥辱を取らんとする如き者なり、彼を籠絡せんとして却つて失敗を取らんとする如き者なり且つ夫れ今や鐵道は將に全國に敷設せられんとす、而して鐵道の至る所は則ち西洋人の至る所なり良しや內地雜居を許さるゝことなきも鐵道敷設の爲に我邦人と西洋人との交際は非常に劇しくなるならん、此際に當つて彼の事情にうとき者は勢ひ彼の爲に籠絡せられざるを得ざるなり爲

に我邦人の被る損害は決して尠少にあらざるならん是等の點を考へ見るに我邦人をして西洋の事情に通ぜしめんことは實に今日の急務なり。

既に彼れの事情に通ぜんことは今日の急務なりとせば、其方法を考案せずんばあらざるなり蓋し彼の事情に通ぜんには彼の國に渡航し制度文物宗教風俗等を親しく觀察するに如くはあらざるならん、然れどもこは是れ特り少數の人に在て能く行ふべくして多數の人には行ふべからざることなり、多數の人に行ふべきは西洋語に通ぜしめて彼の書籍並に新聞紙雜誌等を讀ましむるより外はあらざるなり、是れ則ち余輩が我邦人をして普通に西洋語を學ばしむることの必要なるを說く所以なり、而して我邦人の西洋語を學ばんことは今日の急務なりとせば隨つて起る所の問題は我邦人の普通に學ぶべき洋語は佛語なるべきか、獨語なるべきか、英語なるべきかと云ふ問題なり、蓋し佛學者は佛語に限る樣に云ふならん、獨逸主義に深醉したる者は、獨逸語に如く者はなしと云はん、英吉利斯最負の者は英語にさへ通ぜんには如何なる專門家と雖も他の語は一切之を知らざるも少しも差支なき如く云ふならん、余輩の考は斯る人々の考とは大に異なるなり、苟も高尙なる學問を研究して學者たり研究者たらんと欲する者に在りては獨逸語は固より之を學ばざるべからず、特り獨逸語を學ばざるべからざる而已ならず佛語も英語も亦之を學ばざるべからざるなり今日一學科を修めんとする者に取りては英佛獨三國の語に通ぜん事は實に必要なり、若し三國の語を學ぶ遑なき者は是非共二國の語には通ぜざる可らざるなり、然れども一般の知識を增し西洋の事情に通ぜんが爲には英、佛、獨三國の語の中其一に通ぜんには固より充分なり、而して斯る目的の爲に普通教科中の一として學ばんには無論英語に如く者はあらざるならん、斯く云ふを聞きて一概に余を以て英僻なる者とな思ひそ、斯く云ふは固より確實なる理由のあるが爲なり、第一英語は佛語若くは獨逸語より遙に學び易き語なり、第二英語は世界中最も多數の人の使用する語にして、殊に英、米二國人の語なるが故に英語に通ずる時は歐洲一大國の書を讀み、其智識を受け、其事情に通ぜんことの出來ん而已ならず、米國の書を讀み米國の知識を得米國の事情に通ぜんことの出來ん者なり、第三英語は東洋にては殊に專用せらるゝ語なるが故に東洋にては如何なる國の人と交際するにも英語を解し得る時は差支なからん第四我邦に住居する西洋人中最も多數なるは外人にして外人との交際中最も劇しき者は則ち英人との交際なれば英語に通じ英人の事情に通ぜん事は我邦人に取りて最も要用な

り。第五英、佛、獨三國の人民中最も着實なる者は英人なれば我邦人をして着實なる思想を起さしめんと欲せば、之をして獨逸書を讀ましむるにあらず之をして佛書を讀ましむるにあらず、之をして英書を讀ましむるにあるなり、第六英、米人は佛、獨人に比して道德大に優る者なり道德の爲を思へば英米の書を讀ましむるに如かざるなり、第七崇神の心の深きは英米人にありとするか、將た佛、獨人にありとするか、英、米人に崇神の心の深きことは天下の公認する所なり、我邦人をして神佛を崇尊する心强からしめんと欲せは佛、獨の書は最も忌むべくして英、米の書は甚だ好ましき者なり、此等數個の理由あるが故に普通敎科として我邦人の廣く學ぶべき語は英語に限ること疑なし、以上陳ぶる如く余輩の考にては今日の急務は漢字を廢することゝ我邦人をして普通に英語を學ばしむることの二なり、而して漢字に替ふるに最上の者は無論羅馬字なれども、今日は此說を唱張する者甚だ尠なきが故に羅馬字の行はれざる限りは假名の會を贊成してせめては假名にても爲すべきなり、去りながら假名にまれ羅馬字にまれ之を漢字に替へんには漢字雜りの文章を敎授すると同時に假名なれ羅馬字なれ其漢字に替へんとする所の字を以て綴りたる文章小學生徒に敎授して讀み書きせしむるこそ必要なれ、斯く爲さんには今の童兒の人と成らん頃には漢字を廢さん事も難きにあらざるならん、又我邦人をして普通に英語に通せしむるは今日の急務なりとせば普通學科中に之を加へて熾んに之を敎授せんことこそ願はしけれ、若し敎師に乏しとせば各府縣に英語學校を設立し英、米人を雇ひ我邦の英語に熟達せる者と力を協せて英語敎師を仕立てしむべきなり、此事たる固より多くの金額を要することなれども事の重大なるを思へば、他の費用をはぶきても是非共此事は行はざるべからざるなり、我邦の今日の有樣に滿足し、高枕にて安眠せんとする如き者は、漢字を廢さんことも、英語を興さん事も共に今日の急務なりとは思はざるならん、斯る輩は余の論を以て空想に屬する者と爲すならん、余は空想論者の名を固より厭はざるなり、余の論の空想に屬さゞることを悟るべき日は必ず至るべければなり。（公刊）

羅馬字を主張する者に告ぐ

（明治十七年七月）

百事西洋に習ひ間接に直接に歐米諸國と競爭せねばならぬ今日に在ては漢字を廢さんことは何よりの急務なることは余輩屢〻說く如くなり、我同胞三千六百萬人中には余輩と同感なる者蓋し尠なからざるならん、彼の假名の會の諸君の如きは則ち斯の如き者なり、然れども漢字の廢さずんばあるべからざることを悟られたる者は特り假名の會の諸君而已に止まらざるならん、漢字に替ふべき字の問題に至りては種々の考へこそあれ漢字の一日も早く廢さずんばあるべからざることを確信するの點に至りては假名の會の諸君の外にも之を讓らざる者夥多あることは余に於て疑はざる所なり、斯る輩の中に或は速記法を主張する者もあらん、或は朝鮮字抔を以て何より便利なる者と思はるゝ者もあらん、なれども多數は羅馬字の便利なることを悟り、漢字を廢する上は羅馬字にすべしと云ふ者ならん、開明の今日たる羅馬字の便利なることを悟りたる者は固より尠なからざるならん、然るに羅馬字者流が假名の會の諸君の如くに團結して漢字の不便なることを鳴し羅馬字の便利なることを唱へて之を主張することを爲さず又一個人の資格を以ても之を爲す者の尠なきは余に於て遺憾に堪へざる所なり、羅馬字者流が袖手傍觀するは國家の爲に甚だ歎くべきことなり、今の時たる苟も漢字の不便なることを悟りたる者に在りては其假名者流なると羅馬字者流なるとに係はらず、一日も躊躇沈默すべき時にあらざるなり、今の時たる一日も失ふべからざるのときなり、今の童兒をして漢字抔を學ばんが爲に貴重なる歲月を浪費せしめんには國の安危は甚だ覺束なし、羅馬字者流の如きも假名者流同樣に團結して漢字の廢せずんばあるべからざることを唱へ之に替ふるに羅馬字を以てすべきことを主張爲さんことは一日もおこたるべからざるなり。

今の有樣を見るに上政府の役人より下新聞記者に至るまで漢字の奴隸にあらざる者は尠なし漢字の勢ひは實に熾んなりと云ふべし、羅馬字を主張する者は此の勢力に怖れたるか將た自然に時の至るを待てと云ふ者なるか、果報は寢て待てと云ふ者なるか、開きた口へ牡丹餅の入るを待たんとする者なるか、若し然らざるに於ては奮起して此の勢力に抗すべきなり、躊躇沈默する者は即ち敵に勢力をかす者なり、漢字の性質たる時の經るに隨つて勢力の減少せん者にあらず、之を用ふれ

ば用ふる程其勢力は強くなり之を廢せんことは難くなる者なり、漢字を用ふる間は漢字を以て表するには都合よくして他の字にては表することの難き性質の語は益〻増加するなり、一語斯くの如き語が増せば一語だけ漢字を廢せんことは難くなり二語斯くの如き語が増せば二語だけ漢字を廢せんことは難くなるなり、斯の如き語の成る丈け尠なき間に漢字は廢すべき者なり、斯の如き語が増せば増す程漢字を廢し難くなる者なり、蓋し今の時たる必ず漢字は廢すべきの時なり、今の時は決して失ふべからざる時なり、今の時たる、西洋の事物思想のいまだ我邦に其名のなき者の續々入り來る時にして其名を直に採用するにあらざれば新たに我に於て其名を作らざるを得ざるなり、而して漢字の行はるゝ限りは漢字を以て表するに都合よき語を作るは是れ自然の勢ひなり、即ち假名若くは羅馬字にて表するには不便なる語を作るは自然の勢ひなり、されば此の際に於て漢字を廢せんことは最も願はしきことなり、是れ則ち羅馬字者流に速に奮起せんことを望む所以なり。

漢字の如く多勢の奴隷を有する敵に打ち勝たんことは實に至難なることなれば既に漢字の不便なることを悟り一日も早く之を廢せんことを欲するものは其の假名者流なるとの別なく團結一致してよく力を合せて其敵を攻撃せずんばあらざるなり、然るに今の風として假名を主張するものは羅馬字を主張するものを以て輕躁なりとして之を笑ひ羅馬字を主張するものは假名を主張するものを以て迂濶なりとして之を笑はんとする如き有樣なり、尙ほ甚だしきは同じく假名を主張するもの〻中にても假名使抔に關して少々の異同の爲めにや〻ともすると互に張附を爲さんとする如きものに乏しからず、實に不見識の至りとや云はん胸の狹きとや云はん片腹痛きことなり、假名にするも羅馬字にするも漢字を廢したる上のことなり、未だ漢字を廢することに定まりもせぬのに假名でならぬの羅馬字でなくてはいやだのと爭ふものは兵法を知らざるものと云はざるべからず、大敵を前にひかへ乍ら戰ふことを差し置きてまた取もせぬ分取の割前に就て爭論する如きものは言語に絶へたるものなり、斯る情實にては敵に勝たんことは固より出來ざるなり、是れ則ち余が羅馬字者流に速に團結せられんことを望む所以なり、是れ則ち余が假名者流と羅馬字者流と同心協力して漢字を攻撃せられんことを望む所以なり、是れ則ち余が假名の會の會員なるに係はらず羅馬字の會を興さんことに一臂の力を盡さんとする所以なり。（公刊）

新體漢字破

（明治十七年十二月）

緒言

本論は明治十七年十一月四日かなのくわいの諸君が芝公園紅葉館に於て親睦宴會を催されたる節余の爲したる演說の趣意を愛媛縣高松の郡長兼本縣御用掛泉川健君の求に應じて著述したるものなり、蓋し氏は本論を以て讃岐かなのくわいをして益〻勢力を逞しうせしめん爲の一助とも爲さんとせらるゝ由なれども余と雖も本論にして果して斯る効能あらんと妄信せんとする如き程の者にはあらず、本論にして日本人中一人でも漢字嫌の者を多からしむる効能のあらんには余は以て案外のことゝなさんとするものなり。

愛媛縣高松の郡長兼本縣御用掛泉川健となん云はるゝ御人の頃日余の宅へお出に成りたるが、其お出になりたるは假名の會のことに付き余の考を聞かれん爲にてありき、則ち氏の余に問はるゝ樣先生は假名の會員なる由は兼て承り居る處なるが抑も先生はいろは會の會員にてあられしや又は假名の友の會員にてあられしや、假名使抔は古來用ゐ來れるものを其儘に用ゆる積なるや或は又改正を加へて用ゆることを主張するものなるや其邊の所を承りたしとのことにてありき、其時余は氏に答へて自分儀はいろは會や假名の友のことは少しも承知仕らず、又假名は古來用ゐ來りの儘に用ゆべきか將た改正を加へて用ゆべきか其れ等のことはまだ少しも考へ申さず、但し余は假名の會の月の部の會員たりし者なり、而て余の雪の部や花の部を贊成せずして月の部を贊成なしたるは、月の部には國學者が多いからと云ふ譯にもあらず、月の部の假名遣は他部の假名遣より正しいからと云ふ譯にもあらず、全く月の部は三部の中にて一番人數の多きものなるが故に則ち此部に荷擔したるまでのことにてあるなり、若し雨の部でも風の部でも月の部より尙ほ人數の多き者がありたらんには余は決して月の部を贊成せし者にはあらざるならん、余は漢字を廢さんと云ふ組ならば其主張する所の假名遣抔は如何樣でもそんなことには少しも構はず、少しでも人數の多き組を贊成なさんとするものなり、否漢字を廢さんと云ふ者ならば月の部でも雪の部でも假名者流でも羅馬字者流でも少しも嫌なく何んでも御座れ一々之を贊成せんとするものなり、今

の時に在つては余は漢字程嫌なるものは他にはあらざるなり、世の中には何故に余は漢字を嫌ふこと斯の如く甚しきかを訝かしく思はるゝ者蓋し尠なからざるならん、固より其れには深き理由のあることなり、一通り聞き玉へ、世人も知る如く知識には眞正の知識と眞正の知識を人に傳へ若くは人と思想を交換する爲の方便にすぎざるの知識あり、家を建つる術、機を織るの術、田を耕ふ術、病を癒す術、國を富ましむる術、天下を治むる術、海に航する術、彈藥を製造する術、其他化學なれ物理學なれ術生學なれ天文學なれ何れも皆な眞正の知識なり、之を知る時は風雨をふせぎ、寒氣をしのぎ、露命をつなぎ、庶民を安堵し、人の國をも奪ひ、敵の首をも取ることを得、恐るべき雷を避くることも出來れば、手の裡をかへす間に數千里の外と音信することをも得るなり、然るに言語の如き文字の如きに至りては右等の知識とは大に異なり、之を知りたる計にては少しも益のなきものなり、其役は右等の知識を人より人へ傳へ若くは人の思想を交換する爲の方便にすぎざるなり、されば言語たり、文字たり何と云ふて一つに限るにあらず、何んでも知識を傳へ思想を交換するに便利なるものがよし、其れに不便なる者は若し改良を加へ得べきものならば宜しく改良するがよし、改良位では兎てもおッつかざる者ならば成るたけ速に其れより便利なる者と換るがよし。

余を以て見るに支那並に日本にて古來用ゆる所の彼の漢字の如きは知識を傳へ思想を交換する爲の方便中最も不便を極むる所のものなり、大に開化の妨をなすものなり、何んとなれば之を用ゆる時は貴重なる歲月は之を學ぶ爲に過半費さずんばあるべからざればなり、人の時には固より際限のあるものなり、丸で勘定をした所が一日二十四時間なり、然れども何人と雖も二十四時間丸で勉强の出來る人はあらざるなり、飯も喰はねばならず、寢もせねばならず、樂もなさねばならず、そこで二十四時間を三部に分ち八時間は寢る爲の時となし、八時間は飯を喰ひ運動をなし其他樂を爲す爲の時となし、殘り八時間を以て勉强する爲の時となさんには、最後の八時間の使用には實に注意せずんばあるべからざるなり、何んとなれば幸福の多少たり、開化の進步たり、此の八時間の使用如何に關すること尠なからざればなり、此八時間は成る丈益の多きことを爲す爲に費さねばならぬなり、八時間中一時間を無益なることに費さんには、有益なることに使ふ時間は則ち七時間となるなり、三時間無益なることをなさんには、有益なることを爲す爲の時は五時間となるなり、眞正の知識を得るも知識の方便を學ぶも、共に此八時間中にて爲さねばな

らぬ譯なれば、知識の方便を學ぶ爲に費す時間が多ければ肝腎眞正の知識を得る爲に費すべき時間は隨て減少せざるを得ず、眞正の知識を得る爲の時をして多からしめんと欲せば、知識の方便を學ぶ爲に費す時間を減少せずんばあらず、之を學ぶ爲に多量の時間を要する如き知識の方便は之に改良を加へてさまで時を取らぬ樣にせねばならず、改良を加るも到底多分の時間を費さずんばあるべからざる如き性質のものならば、一刻も早く之を廢さずんばあらざるなり、余の漢字を嫌ふ所以は全く此譯なり、漢字を用ゆる中は八時間中多分は之を學ばん爲に費さねばならず、漢字を用ゆる中は眞正の知識を得る爲に費すべき時間は極めて僅少ならざるを得ず、國の進歩も爲に遲々せざるを得ず、富の增殖も爲に減少せざるを得ず、漢字の行はるゝ中は物理學を學ぶ爲の時間も之を漢書を讀み手習を爲す爲に費さずんばあらず、化學を學ぶ爲に費すべき時間も漢書を讀み手習を爲す爲に費さねばならず、水車の改良を考ふべき時間も漢字を讀み手習を爲す爲に費さねばならず、田地を膏腴に爲すことに從事すべき時間も漢字を讀み手習をなす爲に費さねばならず、武器の改良をはかるべき時間も漢字を讀み手習をする爲に費さねばならず、惡疫の原因を探究すべき時間も漢字を讀み手習をする爲に費さねばならず、トルピドを作り軍艦を堅牢に爲すことを勉むべき時間も漢字を讀み手習をする爲に費さねばならず、油をしぼり砂糖を製造するの工風に心をこらすべき時間も漢字を讀み手習を爲す爲に費さねばならず、民情を視察し國を治むるの術を研究すべき時間も漢字を讀み手習を爲す爲に費さねばならざるなり、漢字の行はる中は水車は粗惡ならざるを得ず、田畑は膏腴なる能はず、惡疫の爲には苦しめられ、外國と戰へば敗北せずんばあらず、其れが虛だと思ふなら、淸佛事件が論より證據、漢字を多く知つたとて、其れで戰爭は出來ぬなり、他國と一切交はらず、我國のみで居ることの、出來る時ならいざ知らず、今は海外萬國と、競爭せねばならぬ時、へたにまごつく其時は、天下は竟に人の者、嗚呼恐ろしや恐ろしや、西洋人を相手では、漢字抔ではおつつかず、我れが漢字を學ぶ間に、彼は電氣を使ふなり、我れが手習するひまに、彼は船をば堅くする、手習抔に莫大の、時を費す人民が、西洋人を相手にし戰爭抔とは尾籠敗、されば忽地久留兵衞が、何んのこしやくな阿蘭兵衞と、赤子の手でも折る樣に、愚う〳〵〳〵とぐうの音も出でざる樣に一とつぶし、斯く久留兵衞にしめらるゝ、支那人共は我國の、人々よりは文字の數、多く知りたる者ならん斯かる字知りの人ですら、何んのたわいも泣く計り、兎ても戰爭は出來ぬなら、字數で戰爭

は止めにしろ、されど此度支那人で戰爭らしきことをばし、爲したる者は、誰なるぞ、亞米利加國へ留學に、行きたる者の由なるぞ、此人々は字の數は、他の支那人に比べては、蓋し尠なく知るならん、良しや字數は知らずとも、蒸氣を使ひ破裂丸、投ぐる術抔知る者の、國に多人數出來んには、久留兵衛抔が攻めかけて、何人來ても譯はなし、先づ我邦で字を廢し、隣りの國のよしみにて、支那にも勸め廢さして、留學生の千人も、又萬人も西洋へ、出さする樣にしたきもの、されど今日海外と、なさねばならぬ競爭は、トルピド以て軍艦を、しづむる外に夥多あり、醫者の進歩がおそければ、同じ病にかゝりても、彼は全快するものを、我れは死なねばならぬぞよ、汗水流し作りたる、物は直が高くして、賣らんとしても買手なし、じり〳〵じり〳〵と眞綿にて、首をしめられ死す如く、國は次第に衰微せん、それが心に分りたら、少しも早く六かしき、文字を廢する工風しろ、佛蘭斯人や英人は、三時も四時もすわり込み、手習抔はせぬものぞ、筒つぼ袖にダンブクロ、土足の儘でズシズシと、座敷の上へ上がり來る、最と恐ろしき奴原ぞ、金の糸にて雷を釣り、氣の力で大船を、走らす工風仕出す者、コレラが流行る其時は、門の戸しめて青くなり、恐れ戰慄ぐ者ならず、千里の波濤打越へて、ヤヲレ曲者御參なれ、コレラの種は何方に、潛伏なすものがさじと、人の爲には命をも、更に惜まぬ剛の者、道を弘むる爲ならば、良しや喰はれて死するとも、恐るゝ心露もなく、如何に野蠻の國までも、經を手にもち十字形、胸にをさめて出て行く、實に稀代なる人民ぞ、小さな島に安んじて、褥の上にすわり込み、富士の白雪打ちながめ、天下に二なき山抔と、役にもたゝぬ誇りだて、富士の如くに己が鼻、高くなしつゝ毛氈と、唐紙取り出しヌラヌラと、ぬらくら書で日をおくり、豆鐘程の盃で、貴重な時を飲みつぶす、ぬらくら者で居る中は、兎ても海外萬國と、競爭とては出來ざらん、既におくれし我が開化、今の如くに色々と、漢字を學ぶ其爲に、貴重な時を徒費なさば、彼れの進歩は速くして、我れの進歩はのろければ、唯々優劣の增す計り、我が神國は人の手に、渡る樣なる成行に、立至らんが恐ろしや、行末最とも覺束な、我が日本の敎育は、頃者餘程改良に、赴きたるは實なれど、我が敎科書は皆な都て、漢字を以て綴る故、良き敎育も其れ程に、爲にならざる今の仕儀、其れは如何にと尋ねんに、物理學でも化學でも、動植物の學とても、其學問の眞理をば、生徒に說いて聞かすより、いけ六ヶしき漢字の、字義を說くのを專一と、爲すのが今の習なり、科目にこそは歷然と、諸般の學を掲ぐれど、實は文字の講釋が、何地のはてゞも多きよし、文字の講義に止まるは、漢學者流の僻なるぞ、孔子の主義は何々で、孟子の主義は何々と、說いて聞かすることとて

は、漢學者流の知らぬこと、孔子の主義は大學か、論語に就いて一字づゝ、字義を說くより其の外の術は一向辨へず、孟子の主義も其通り、孟子の字義を一字づゝ、說くことのみを知る計り、漢字の罪は淺からず、速く漢字を廢さずば、我が敎育も近來は、西洋風に理科學を、尊ぶ抔と誇りても、其れは帳面上のこと、有名無實の理科學ぞ、斯かる事情のある故に、一日も速く漢學は、廢することにいたしたし。

前に云へる彼の泉川氏は明年中位には漢字の不便なることを悟る者も餘程多くならんと思ふやと余に問はれたり、余は此質問には實に驚きたり、何んとなれば余を以て見るに世人は中々漢字の不便を悟るごころではなく、漢字と云ふものは實に都合よきものなりと思ふ念日一日に强くならんとする如き者が多き樣に思はるればなり、蓋し今日我邦人中には漢字を讀み書きすることを知る而已の故を以て善き地位を占めて居る者が實に多し、官吏たり新聞記者たり特に漢字を知るの故を以て人の上に立ち押柄な面をして威張て居る者が甚だ多し、斯かる人の爲には漢字程貴きものはあらざるならん、漢字程恩の深きものは親でも君でもあらざるならん、漢字を廢したらんには斯かる人々は今日の樣に尊大に構へて居ることは出來ざるならん、今日の人に漢字を廢する事を嫌ふ者の多きは決してあやしむに足らざるなり、つくいもの樣なる字を唐紙へならぶることさへ出來んには、品行は惡るくも智慧は足りなくも、中々な人物の樣にもてはやされ、御馳走にもなれるし、お世事も云はれると云ふは何んと難有次第ならずや、これ偏に漢字の御德にむらずや、今又或は化學に或は物理學に或は建築學等に於ては中々の大先生と雖も手習抔は餘りなしたことなく唐紙を出されると唯〻頭をかき尻をもじ〳〵なして居る如き者は地方へ出ても何方へ行つても丁稚小僧か何んどの樣に思はるゝのが今の風なり、實にや今日書畫が流行り、其れに續て骨董茶の湯抔が追々に熾になり、禮式より道德まで何から何まで古風をしたひ、己が田へ水を引くのは人情の致し方なきことぞかし、斯かる有樣なる故に漢字の不便なることを悟る者こそ尠なけれ。

漢字嫌の某をして實に痛哭に堪へざらしむること一事あり、そは如何なることぞと云はんに、大臣樣や參議樣に御名筆のお方の多きことこれなり、大臣樣や參議樣が御名筆なる時は大輔樣や少輔樣は勢御手習でもなさらねばならず、お手習をなさるれば、大輔樣でも少輔樣でも相應にお書けなさる樣になる、そこで書記官樣もお手習をなさらねばならず、隨て屬官樣より御門番樣までがお手習とお出掛けに

なる、そこで日本は天下第一の手習國となる、斯樣な第一は餘り好ましき第一とも思はれぬなり、悅ぶ者は久留兵衞計り、そこで又大臣樣や參議樣が御揮毫がお好きだと、上を見習ふ下なれば、大輔少輔議官縣令書記官屬官猫も杓子も皆一同に御揮毫とお出掛になる、又自惚心は誰しもあるものなれば月給は少なくも位はひくゝも書記官でも屬官でも字を書いては大臣參議にも負けぬ氣取りで書き立つる者もあるかなきかは知らねども、同じく書記官なら、同じく屬官なら字の書ける方が百姓町人の持てがよい、そこで誰しも書く氣になる、希くは大臣樣や參議樣や其れに續いて縣令樣抔は成る丈御名筆をお揮ひ遊ばされぬ樣にいたしたし、上の人が恭が好きなれば下の人も恭が好きになる、上の人が茶の湯にこれば下の人も茶湯にこる、是れ人情免れがたきことなり、されば上の人は一舉一動何んに寄らす克く愼まねばならぬなり、善きことゝ思はるゝことは卒先してせらるゝがよし、惡しきことと思はるゝことは卒先して止めらるゝことこそ願はしけれ。

右に陳べたる如き事情なるが故に漢字は兎ても俄に廢さるべきものにあらねども、千年か萬年の後に之を廢さんには如何なる方法を以てすべきぞと云はんに、漢字を讀み書きすることにのみになれたる者は漢字を廢するを何より不便のことに思ふが故に、小供の中より、初等小學の頃より、漢字を敎ふる傍ら假名なり羅馬字なり、行々漢字に換へんと思ふものを敎へ、之を以て綴りたる書物を讀み習はし、之を以て綴りたる文章を書き習はしむる樣に爲すべきなり、蓋しこれには格別多分の時は要さゞるならん、若し斯の如くなら、且つ六かしき漢字を成る丈敎へ込まぬ樣になさんには其小供等の成人した時に至りては漢字を廢さん事を贊成せざる者は全國一人もあらざるならん、余の考にては漢字を廢する事は國會開設よりも宗敎改良よりも急務なりと思はるゝなり、久留兵衞先生それ如何んと思ふ。（公刊）

羅馬字會之趣意

（明治十八年二月）

發起人總代の考では本日此會に於て羅馬字を以て日本語を綴る會を起す趣意を一通演說せねばならぬとて其演說者には某こそ適當の者と集議にて決しましたが乃で某が一通此の演說を爲すことに定りましたが某の考では本日諸君に向ひて此の會を起す趣意を演說するは無要の事と思ひます何せと申すに本日此の席に御來會に成りたる諸君は孰も皆此の會を起すことに御同意にて又之れを起すは必要なりと悟られた方々の事であれば殊更に人に聞かずとも既に本會の趣意を御承知の事と思はれますからで御座ります去り乍ら一方に於きては發起人總代と諸君と御互の考が果ては同じ事なりけりと云ふ事を見る滿足を諸君に與へねばならず又一方に於きては廣く天下に對して吾々の趣意を示さねばならぬ尤本會を起す趣意だの本會の規則だのは委員を撰みて之れを作らしめて堂々と天下に向ひ之れを公に致す可き積では御座るが今日諸事の御相談をするに先ちて一通趣意を演說するが適當だと發起人諸氏が認められて乃で某が其の任に當りました今某が演說せむとするものは某が獨りで自分の考を吐ではなく發起人總代の考なりと思ふものを演說いたします特り發起人總代の考なりと思ふ者のみでなく發起人來會諸君一同の考なりと推察せらるゝものを申します。

何故羅馬字で國語を綴ることを主張する會を立つるかと問ふに古來我が邦にて用ひ來りました漢字てふものは甚不便なるもので晩かれ早かれ廢さなければならず之れを廢する日には之れに換ふるものは羅馬字ほど便利なるものはないさて此の事を信ずる者は西周先生が本會樣で先生が明治六年に高論を吐露せられてから信者も日一日より多く今日では實に夥しきことになりましたそこで此人達の考を全國の輿論となして竟に之を押し通さむと思はゞ名々孤立して居らるよりいつそ協同一致して事を爲さば望を遂ぐることも大いに速かならむと思はれます以上申し〻事が即何故本會を起すかと云ふ問に對する最簡短なる答で御座りますが之れを今少し精しく說きませう先漢字を廢さねばならぬ理由の最著明なるものを擧げますれば第一に漢字を用ふる間は之れが讀書を學ぶ爲に貴重なる歲月を多く費さねばならず其れが爲有益なる事柄を學ぶ時間は非常に減ずる譯なり第二漢字の讀書を學ぶ爲に歲月を費すことが多い故漢字の行はるゝ間

は上下の知識が格外に隔絶せねばならぬことに相成る第三漢字は「イデオグラフ」即思想の記號なるに依て其の行はるゝ間は語を知る許でなく語毎に異りて太甚しく入り組みたる記號をも知らねばならぬ譯なり然れば始終二重の骨折をせねばならぬ第四言語は事物につれるもので昔の樣に何でも支那の眞似をした時には漢字を採り用ひたるは勢止む可からざる事ではあれど今日に至りては支那の事物にて新に採り用ふることは一つもなく外國より新に採り用ふるものは皆歐米諸國の事では御座りませぬか然れば歐米の言語は事物につれて我が邦に入らなければならぬ譯にて漢字の行はるゝ間は只其の道を塞塞する許りでなく妙な乙な事がありますす諸君御覽なさい日用の語でも學術上の語でも至て分り易い語があるのに其れに態々之れを分り惡い漢語に反譯し分り惡い漢字で之れを表さうとする弊を免れぬでは御座りませぬか第五今日に至りては少しも早く少しも多く支那の臭氣を脱して歐米諸國の文化を受けねばならぬ時で御座る然るに支那の臭氣は漢字に固着するものなるに依て漢字を用ふる間は支那の臭氣を脱することは極めて六ヶ敷多く漢字を知てゐれば知てゐる程支那風の根性が强くてどうもこうも仕方がないといふことは世人の普く知てゐるだらうが漢字の行はるゝ間は是れ亦已むを得ざることで御座ります第六漢字は漢語を表す爲には便利なるかは知りませむが日本語及び西洋語を表すには頗不便なるものです第七漢字を用ふる間は如何なる學術を敎授するにも半分は文字の講釋に終らざるべからざる次第に立至ります尙此の外にも漢字を廢さねばならぬ理屈は澤山御座りますが餘り學問上に涉りますから之れを略しまして次に羅馬字の便利なることを手短く演べませう。

第一羅馬字を用ふることにすると是れまで漢字を讀書する爲に費したる時間は全く之れを有益なる事業を學ぶ爲に用ふることが出來るやうになる利益があります第二羅馬字を用ふる時はさまで時を費さなくて書物を讀むことが覺えらる故書物を讀む者の範圍が極めて廣大になる理由です第三羅馬字を用ふる時は書物を讀むことが易くなる故に知識を得ることも亦隨ひて易くなる道理です第四羅馬字は我が邦の言語のやうに多くの音を以て成立つ者を綴るに甚だ便利な者で御座ります第五百事百物之を西洋に取る今日に於ては其の事物につれて西洋の語をも取ることが餘程必要な場合も尠なからずと存じますそこで之れを取るには羅馬字を用ふるのが至極都合よき事であります第六羅馬字を用ふるとき

は分らない譯語を新に作り立つるに及ばず又之れにて譯語新製の弊害を免るゝ事が出來るではありませぬか第七羅馬字を用ふる時は支那の固陋なる習俗を脱却して文明開化の新鮮なる空氣を吸ふことが易くなること萬々請合ふ可きことです第八羅馬字を用ふることは我邦の人民中にて將來屹度全權を握るに相違ない部分又我が邦將來の安危を身に繫ぐ部分即之を略言すれば西洋語に通ずる人達は必之れを便利なりと認めるで御座りませうし又認めなければならぬ理由があるにても其の眞に便利極ることが分りませう第九羅馬字を用ふる時には學術を敎授するに當りて文字の講釋の爲に多分の時間を浪費するやうな弊は全く除き去ることが出來るで御座ろう、尙此の外に羅馬字を以て綴りたる語は大層つゞまりがよくて一目して解すことが出來又横文字は竪文字より讀み易い抔羅馬字が便利だといふ箇條は澤山あるが大層緻密な學問上の議論になるから之れを置きまして次に今日羅馬字會を起すことは一日も猶豫してはならぬと云ふ特別の理由に說き及ぼす事に仕つらう。

今日羅馬字會を起すこと一日も猶豫してはならぬといふ理由は少くも四個あるやに思はれます今一々之れを陳べませう第一づゝと見渡すに近來我邦の人民の中には普通敎育の中に英語を加ふる必要を悟りたる者が段々多くなりて殊に時事新報、東京横濱每日新聞、東洋學藝雜誌記者の如きは必死となりて之れを主張しました又政府に於かせられても御同感の方々があらせらるゝ者と見えて既に先般學習院の小學科中に英語を加へられ續きて京都府の小學科中へ英語を加ふることを許され又候東京女子師範學校中へも英語の專修科を置かれましたが竟に頃は明治十七年十一月のはたまり九日と云ふ日には文部卿閣下は小學生徒に英語の讀方、會話、習字、作文等を授くることを許されました箇樣に普通に英語を敎授す可しと云ふ論が天下の輿論となつた上は爾後我が邦に於て英語に通ずる者は其の數實に夥しいことに成るだらう、して又英語に通ずる者に取りては羅馬字で邦語を綴つたり又は羅馬字で綴つた邦語を讀んだりすることは何の苦もないことですから今より數年を出ずして羅馬字主義の贊成者は非常に增加することは饒に掛けて見るやうで御座る然れば今日より豫め其の綴り方を定めたり又は字書などを作りて置くのは極めて必要な事と存じます第二今日の世の中に成程理論上で羅馬字が一番便利だが贊成者が少からうといふ懸念があつて或は「かなのくわい」抔を贊成して居る者も多いして見れば今日羅馬字主義に熱心してゐる人

人は是非とも羅馬字會を起して廣く同感者を天下に募り其の果に羅馬字主義の人と假名主義の人と何方が少數なるかを見極めることは甚緊要な事と思はれます第三仄かに承るに政府に於きても吾々と感を同くして漢字の不便を歎かせらるゝ御方も御座すとか其の方々のお考では羅馬者流だの假名者流だのと云ふて世間に呶鳴る奴原は澤山あるが彼奴等は何故綴方なり文章なり字書なり是れならば漢字に換へることが出來ると思ふものを立派に組立て政府に相談に來ぬだらうとて私に惜み居らるゝと申すことですこれまた速に羅馬字會を起さなければならぬ一の理由で御座る第四羅馬字主義の人が羅馬字會を起して公然と旗揚をなし漢字を廢して仕舞ふて之に換ふるに羅馬字を以てすべきことを唱へなければ全國中如何程の羅馬字者流があるとも皆漢字者流と思はれ漢字廢止論を唱ふる者は特り假名者流に限れるやうに見え徳をするものは眞の漢字者流ばかりに成るだらうそこで羅馬字者流は一日も早く旗揚をして假名者流の外にも漢字を廢さうとする者は澤山あるといふことを天下に公にせねばならぬさうせぬ時には羅馬字者流の罪業深かしと謂はねばならぬ是れ亦羅馬字會を起さねばならぬ一の理由で御座る。

最後に臨みて某は假名者流と羅馬字者流とに一言忠告致さねばならぬ事が御座る、別の儀でも御座らぬが羅馬字者流は出來る丈假名者流を攻擊せぬやうにし、又假名者流は成る可く羅馬字者流に敵對せぬやうにするがよい、蓋羅馬字の敵は假名ではなく漢字で又假名の敵は羅馬字でなくて是れ亦漢字では御座らぬか。此の漢字といふ强の敵を前に控え乍ら假名者流と羅馬字者流と喧嘩をするのは同士討と同じことで思慮ある者の當に爲す可からざることで御座る假名と羅馬字とが喧嘩をおつぱじめて雌雄を決するのは漢字を亡してから後に在る事で、先其れまでは同士討に力を費さぬやうにし、假名者流は假名の書方抔を少しでも改良して成程假名は便利な者だと天下の人に思はれるやうに心掛けねばならず、又羅馬字者流も同樣に邦語を綴る最良方法を研究し又は字書抔を作ることを專一に勉めなければならぬ。

以上演說致しましたものが即今日羅馬字を以て邦語を綴ることを主張する會を起さなければならぬと云ふ趣意の概略です、先是れ丈を申し上げて置きます。

西洋語學を學ぶことの必要

（明治十七年六月高崎に於て爲したる演說）

教育には普通と專門の別あり、普通教育と專門教育とは共に各人の受けねばならぬ者なり、何をか普通教育と云ふ、普通教育とは何人にも普通に緊要なる事がら則ち讀み書き、算術、物理學、化學、歷史、地理學等の如き者の大要を修めしむる爲の教育なり、何をか專門教育と云ふ、專門教育とは化學、物理學、地質學、金石學、醫學、文學、兵學、農學、政治學等其他何に限らず一科を專修せしめん爲の教育なり、何故に右二樣の教育は各人に必要なるや、各人皆な共に專門家たり普通家たらねばならぬ故なり。各人共に專門家たらねばならぬとは如何なる譯ぞと尋ねんに、凡そ此世の中に全く無職業にて居ることの出來る者は多くはあらざるならん、天下大概は何か職業を營まざるを得ざるならん、又營むべき筈なり、天下大概は或は官吏たり、或は商人たり、或は軍人たり、或は百姓たり、或は學者たり、或は美術家たり、或は代言人たり、或は新聞記者たり、或は演說家たり、或は僧侶たり、或は大工たり、或は左官たり、或は桶屋たり、或は井戸屋たり、或は役者たり、或は藝者たり、何か一の職業を營まぬ者は多

教育には普通專門の別あり

各人に要する普通教育

專門教育

何故二樣共に各人に必要なるや

各人共に專門家たらねばならぬとは何故ぞ

くはあらざるならん、ありても餘り用の無き者なり、何となれば喰ひつぶしなれば、なり、人と生れては必ず何か一學科一藝術を修めて一の職業を以て天下に立たんことこそ願はしけれ則ち各人皆な專門家たらんことこそ願はしけれ、專門教育は各人に必要なりとは此の謂ひなり、蓋し大工たり、左官たり、壁屋たり、屋根屋たり、十年程も年期を入れて其業を修むるにあらざれば一の職業を以て社會に成立せんことは出來ざるなり、然れども世には往々專門教育とては露程も受けたることなくして專門家たらんとして事業を企る者尠なからず、斯の如き者は之を名付て、デモ」と云ひ「ゴマ」と云ふ、醫術に暗くして醫者の門戸をはる者之を名付けて「やぶ」醫者と云ふ、人の病を癒すことを知らざる而已ならず、病もなき者をして死に至らしめんとする如き最も恐ろしき者共なり、僧侶の道を辨へずして身に衣をまとひ肩に袈裟を掛くる如き者之れを名付けて賣僧若くはなまぐさ坊主と云ふ、我身の成佛さへ覺束なき者いかでか人を成佛さすることを得んや、近年まで歐米諸國にては政治家而已は其道を專修せざるも立派にやつて行けることゝ思ひたれども、近來に至り屋根屋、壁屋同樣に其道を專修爲したる者にあらざれば當にあやまり而已爲す者たることが分り今では獨逸の如く天下にて最も開明を極はめたる國に在

大工たり左官たり十年程も年期を入れねばならぬなり

やぶ醫者

賣僧

政治家

教育家

りては政治學は頗る盛に行はれ其道に明るき者にあらざれば政治家たることを得ざる樣になりたり、亞米利加合衆國の如きも頃者政治の道を專修せること無き者の政治を執るの弊害を悟り漸く政治學を貴重する樣に成りたり、蓋し何の業を論せず其道を專修せざる者にして能く之を營まんことは決して出來ざるならん、是れ則ち專門敎育の何人にも必要なる理由なり。

普通敎育は何故に何人にも必要なるか

專門敎育の何人にも必要なるは既に說きたる所にて分りたるとするも、普通敎育は又何の爲に各人に必要なるや、專門敎育を受けて一の職業を營むことが出來れば、それにて事は足るに非ずや、專門敎育こそ實に何人にも緊要なれ、普通敎育に至りては未だ其要を見る能はずと云はんとする如き者往々之ある樣に思はるゝなり、此說たる一通りは如何にも尤の樣に聞ゆれども、能く考へ見る時は甚だしき謬說たるにすぎざることが分るならん、人にして特に專門の職業を營むの外に何も爲すことなからんには成る程專門の敎育而已を受けてこと足るべしと雖も、人たる者には專門の業を營むの外に多くの作用ある者なり

國民たらざるべからず

る者は專門の職業を營むの外にも多くの作用のある者なり、種々の義務ある者なり、第一何國を論せず其國に生れたる者は誰彼の別なく皆國民たるの義務を盡さねばならぬなり、我は大工なり家屋を建築することさへ出來ればよし他事は一切

我は大工なり

知らざるなり我は學者なり學問さへ出來ればよし他の事は一切知らざるなりと云ふて國法をまもることも知らず、國の風俗にも全く背かんとする如き者は其社會の仲間にて居らんことは出來ざるならん、我は物理學者なり、物理學さへ必得て居ればよし他のことは一物、我の關せざる所なりと云ふて妻を娶り人の良人となり、子を設けて人の親と成らんことを欲せずして、生涯獨身にて暮す而已ならず、一夜婦人と枕をかはしても親に成ることの恐なしとせずと云ふて辨慶も三舍を避けよと生涯唯の一度も女の肌をふれざらんとする如き者は今の世界に幾人あらんか、我は化學者なり化學に明るくさへなればよし、我は法律家なり法律にさへ精しければよしと云ふて動物に大切なる衞生の道を少しも知らず、人類のまもるべき道德主義も全く辨へなきに於ては其身を永く保存せんことも出來ざるならん、我は法律家なり人類に非ず、我は政治家なり動物にあらず、我は物理學者なり人の親にあらず、我は大工なり國の民にあらずと云ふてすまして居ることの出來ざる限りは其職業は法律にまれ、政治にまれ、醫術にまれ、敎育にまれ、理學にまれ、大工にまれ、左官にまれ、屋根屋にまれ、人々皆動物の知るべきことは之を知らざるべからず、人類の知るべきことは之を知らざるべからず、國民の知るべきことは之を知らざるべからず

民人たらざるべからず

我は學者なり

親たらざるべからず

我は化學者なり

我は法律家なり

我は法律家なり人類にあらず

我は政治家なり我は大工なり國の民に非ず

ざるべからず、親の知るべきことは之を知らざるべからず、子の知るべきことは之を知らざるべからず、良人の知るべきことは之を知らざるべからず、是に由て之を觀るに普通教育は何人にも必要なる者にあらずや、誰にも必要なることは誰も學ばねばならぬなり。

教育は開化の高低に依て異同ある者より

教育は普通と專門との別なく國の開化するに隨て善良になる者なり、玆には特に普通教育のことを陳ぶることにいたさん、蓋し普通教育は如何なる野蠻國にも必ず多少あるならん、さりとて學校抔云ふ者のあるありて之を教授することありと云ふにはあらざれども父母の膝下に生長する間に漸々に其社會相應の道德衛生知識等を仕込まれざる者はあらざるならん、漸く國の開化するに及では學校なる者のあるありて普通教育の一部分はこゝにて授くる所たりと雖も、其時と雖も尙ほ父母の膝下にて不知不識受くる所の教育尠なしとせず、我邦の如き往時に在りては學校にて授くる所の普通教育は讀み書き、算術等に止まりたり、蓋し武士の子弟に在りては漢學は必ず多少學ばねばならぬことになり居りたり、往時學校にて授けたる教育は實に簡單なる者にして麁糙を極はめたりと云はざるを得ず、之に比すれば今日學校にて授くる所の普通教育は甚だ善良なる者なり、今日の子供は

我邦往時の教育

今日の教育

普通教育に於て讀み書き算術等の外に物理學、化學、地理學等の如き者をも學ぶことを得る者なり、蓋し此教育を受けたる者は萬事にふれて能く處するを知ることと往時の人に比して萬々優らんこと固より疑なし。

普通教育中に語學を熾んに教ふべし

往時の普通教育と今日の普通教育とは其良否にこそ異同あれ、其教科たる共に何人にも必要なる者共なり、我邦の普通教育は近年追々善良に赴き今日の處にては普通學科たるべき者は大概皆教科中に加へられたる如く思はるれども、慾には今一つ熾んに普通に教授せられたらばよからんと思はるゝ者あり、そは如何なる事ぞと云はんに英吉利斯語若くは獨逸語若くは佛蘭西語の中を熾んに普通に教授なし度しと云ふこと之なり、余の考にては今日の日本に在りては古來漢學の我邦に普通に行はれたる程西洋の語學の普通に行はれんことは何より願はしきことなり、古來我邦に漢學の熾んに行はれたる理由を尋ぬるに我邦の開化は專ら之を支那に取り、政治、文學、學藝、美術に至るまで都て之を支那に學ばざるはなく、支那の思想と支那の語とは次第々々に我邦人の用ふる所となり、隨て之を表する所の支那字を學ばんことは我邦人に取りては何より必要に成りたる而已ならず、漢書を讀むにあらずんば其學ぶべき支那の道德、政治學藝、美術等を知り且つ支那の事情

漢學の行はれたる理由

今日は西洋を眞似る世の中

を察することの出來がたき處より自然支那學は一般に我邦に行はるゝ所と成りたり、昔時百般の事物共に之を支那に眞似たる如く今日は百般の事物之を西洋に眞似ざるべからず、道德より法律より政治より學藝より美術より一から十まで西洋に習はずんばあるべからざる譯ならば、我邦人の彼國の語學に通じ其書物を理解し得んことは最も肝要なり、若し又西洋の事物にして取るべきものと取るべからざるものとある譯ならば是れ又我邦人の彼國の語學に通じ、其書物を讀み其事情に精しからんことは甚だ肝要なり、然らざれば取捨せんことは到底六ヶしからん、且つや兵法にも己を知り彼を知らざる者は敗を取らんことを說けるにあらずや、既に今日の如く海外諸國と交通の開けて百事彼と競爭せずんばあらざる以上は彼の事物に能く通ずるにあらずんば必ず失敗を取らんことは照々乎として鏡を見る如し、初めて彼の「コモドール」ペリー氏の我邦に到來せる時に當りてや我邦には既に蘭學の久しく開くるありて西洋の事情に通せる人の我邦にありたるにあらずんば、我邦の如きも既に一印度たり一安南たりしやも知るべからず、海外諸國の事情に通せざる者の國に多きは實に危うきことなり、諸人の能く彼の事情に通じ、彼は如何程進步せる者なるや、彼は如何程恐るべき者なるやを親しく知らん

己を知り彼を知るの必要

ことは今日何よりの急務なり、之を親しく知りて人々能く心を戒め憤激勉勵爲さんことは今日の急務なり、今や西洋人に內地雜居を許さんことを主張するもの漸く多からんとす、若し此の說にして果して行はれんには、我邦人の彼の事情に通せんことは最も必要なり、今にして彼の事情に通せんことを努めざるに於ては臍を噬むも及ばざるに至らん、今や鐵道は將に全國に布かれんとす、鐵道にして一度全國に布かれ、內地雜居にして一度許されんには間接に直接に彼と競爭せざるべからざること、今日の幾百倍なるを知るべからず、歐米人の人を侵掠するに巧なるは天下の公認する處なり我邦人にして彼の爲に侮辱を被り彼の爲に侵掠せらるゝことの尠なからんことを欲せば努めて彼の事情に通せずんばあらず、而して我邦人をして一般に西洋の事情に通せしめんには彼の語を學び彼の書を讀ましむるに如くはなし、故に余は我邦人中未だ西洋語を一も知らざる者は英語及び佛語若くは獨語の中を一つづれにても勉强して學ぶべきこと〻思ふなり、故に余は普通教育の一科として西洋語の熾んに教授せられんことを願ふなり、故に余は各府縣に語學校の熾んに起らんことを冀望するなり。

內地雜居を許さんか

鐵道

西洋語學を學ぶことの必要